有川町文化財調査報告書 第１集

頭ヶ島白浜遺跡

かしら が じま しら はま

１９９６

長崎県有川町教育委員会

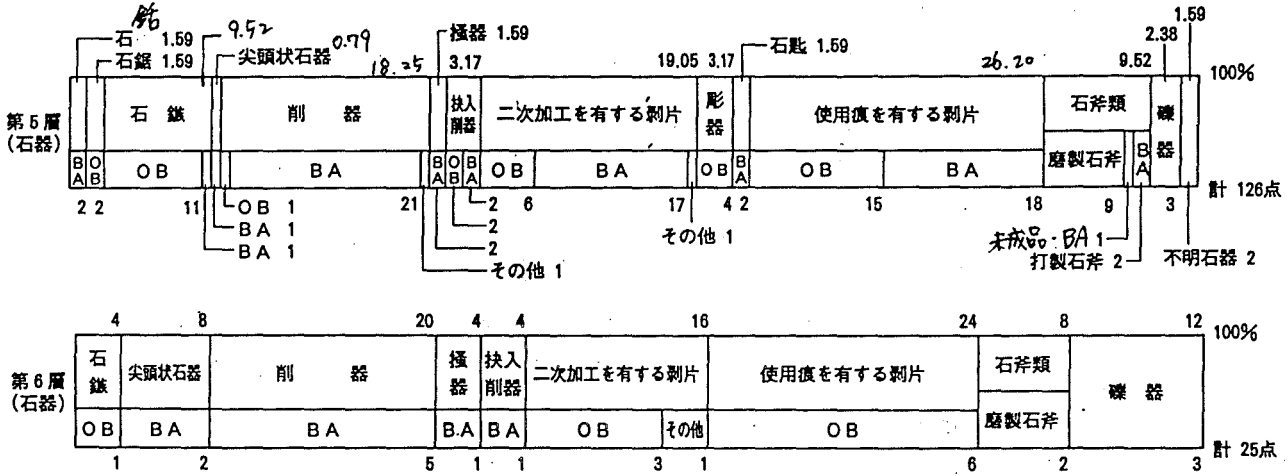
頭ケ島白浜遺跡調査報告書　正誤表

（1）４頁１１行目

（誤）南北方向に５列のグリッド　　（正）南北方向に４列のグリッド

（2）３９頁第２７図　下段

下記のとおり

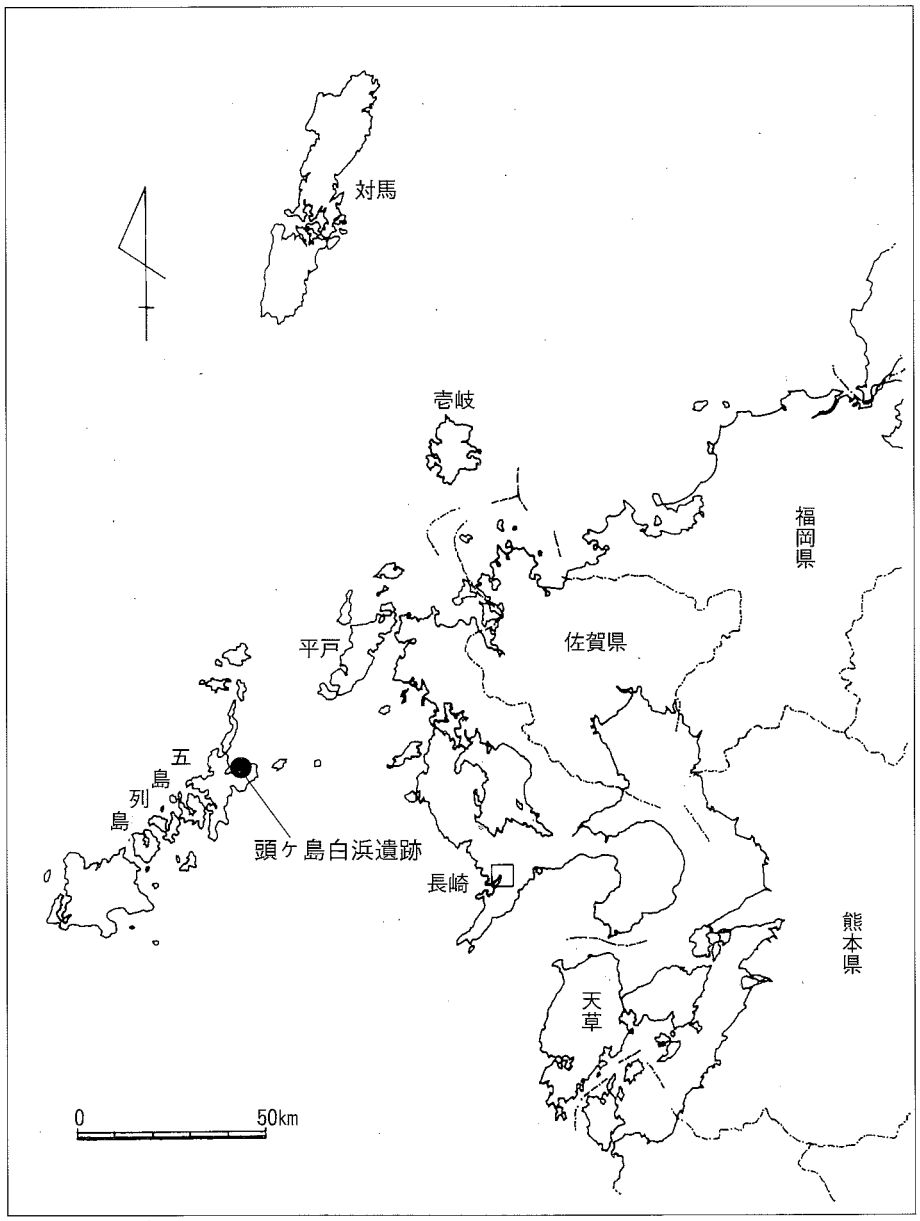


第27図　頭ヶ島白浜遺跡出土石器組成グラフ　（ＯＢ:黒曜石，ＢＡ:玄武岩）

有川町文化財調査報告書 第１集

かしら　が　じま　しら　はま

頭ヶ島白浜遺跡



発刊にあたって

このたび平成７年度に実施いたしました有川町頭ケ島白浜遺跡発掘調査の結果を報告書として発刊することになりました。頭ケ島は美しい石造りの教会がある島として，県内外に知られる一方，上五島空港の開港によって五島の空の玄関口としても知られております。また，夏ともなれば，白浜海岸には海水浴を楽しむ人々や，観光客が大勢訪れます。将来町ではこの海岸を多くの町民が憩える公園として整備することにしております。

このたびは，白浜海岸の西側に町営アワビ養殖場を移設するとともに，施設の拡充をはかることになり，県文化課の協力を得て埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

その結果，縄文時代の土器や石器，江戸時代の埋葬遺構など多数の遺物が出土しました。さらには，日本の縄文時代に朝鮮半島で使われていた土器片も発見され，太古の昔より五島列島と朝鮮半島との間で文化交流があったことが初めて証明されました。このような貴重な発見や出土した遺物は町の重要な文化遺産として活用するとともに，今後ともこの地の保存と開発の調和を図っていきたいと思います。

最後に，今回の調査にあたり，ご指導とご協力をいただきました県文化課ならびに土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの先生方，調査作業に従事いただきました地元関係者の皆様に心から感謝を申し上げ発刊の挨拶といたします。

平成８年３月29日

有川町教育長

原　　雄　覺

例　　言

1．本書は，長崎県南松浦郡有川町友住郷字白浜に所在する頭ヶ島白浜（かしらがじましらはま）遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，町営アワビ養殖場建設事業に伴い，平成７年５月15日から同年６月16日まで実施した。

3．調査は，有川町教育委員会が主体となり，長崎県教育庁文化課が実施した。

4．本書の執筆は，古門雅高・渡邊康行・荒木伸也がおこなった。Ⅰ～Ⅳ章は古門が執筆し，Ⅴ章～Ⅶ章は分担執筆として，執筆者名は文末に記した。

5．韓国隆起文土器については，釜山広域市立博物館の河仁秀氏と佐賀県立名護屋城博物館の廣瀬雄一氏から玉稿をいただいた。また，廣瀬氏には本報告書の要旨をハングルに翻訳する労をとっていただいた。

6．人骨については土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長　松下孝幸氏より玉稿を賜った。

7．石器の石質同定については，長崎大学教育学部の長岡信治氏より教示をうけた。しかし基本的に肉眼観察によるものであり，磨耗や風化を受けている資料の場合，正確な識別は困難であった。このため比較的同定の容易な黒曜石・サヌカイト質安山岩・玄武岩・蛇紋岩・結晶片岩類・鉄石英を除く石材，とりわけ砂岩や流紋岩などに関しては厳密さを欠いている。また同定作業は，実測図掲載資料および分類作業時に注意を引いた資料に限定しており全点を対象にしているわけではない。よって本文中に記さなかった石材（例えばホルンフェルスなど）が存在している可能性も否定できない。

8．出土遺物の実測は網谷泰代・森崎京子・荒木美保・徳永妙子・荒木伸也の協力をえた。

9．製図は，斉藤いづみと渡邊・古門がおこなった。

10．本書関係の写真撮影は，調査中のものは調査担当者がおこない，遺物については古門がおこなった。

11．本書関係の遺物は，報告書刊行後，有川町教育委員会に移管される予定である。

12．本書の編集は，古門による。

本文目次

Ⅰ．調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2

1．地理的環境 …… 2
2．歴史的環境 …… 2

Ⅲ．調査の概要 …… 4

1．範囲確認調査の概要 …… 4
2．本調査の方法 …… 4
3．基本層位 …… 5

Ⅳ．遺　　構 …… 6

1．近世末から近代の遺構 …… 6
2．近世埋葬遺構 …… 6
3．近世墓被葬者について …… 6

Ⅴ．出土遺物 …… 8

1．縄文土器 …… 8
2．石器 …… 22
3．近世遺物 …… 33

Ⅵ．考　　察 …… 35

1．遺物の遺存状況 …… 35
2．石材について …… 37
3．石器組成について …… 38
4．頭ヶ島白浜遺跡における活動の推定 …… 40
5．縄文前期および縄文中期土器について …… 49
6．頭ヶ島白浜遺跡出土　韓国系彩色土器　断想 …… 55

Ⅶ．総　　括 …… 58

1．まとめ …… 58
2．まとめ（ハングル版） …… 59

Ⅷ．付　　編 …… 65

挿図目次

第１図　頭ヶ島白浜遺跡試掘坑配置図（Ｓ＝１/600）……1
第２図　ＴＰ４土層図（Ｓ＝１/60）……1
第３図　頭ヶ島白浜遺跡と周辺の遺跡・地形（Ｓ＝１/75,000）……3
第４図　頭ヶ島白浜遺跡グリッド配置図（Ｓ＝１/750）……4
第５図　頭ヶ島白浜遺跡土層図（Ｓ＝１/120）……5
第６図　頭ヶ島白浜遺跡近世人骨出土地概念図（Ｓ＝１/250）……6
第７図　第６・７層出土縄文土器実測図①（Ｓ＝１/３，３はＳ＝１/２）……9
第８図　第６・７層出土縄文土器実測図②（Ｓ＝１/３）……11
第９図　第５層出土縄文土器実測図①（Ｓ＝１/３）……13
第10図　第５層出土縄文土器実測図②（Ｓ＝１/３）……15
第11図　第５層出土縄文土器実測図③（Ｓ＝１/３）……16
第12図　第５層出土縄文土器実測図④（Ｓ＝１/３）……17
第13図　第５層出土縄文土器実測図⑤（Ｓ＝１/３）……19
第14図　第４層出土の石器実測図　（Ｓ＝１/２）……22
第15図　第５層出土の石器実測図①（Ｓ＝１/２）……23
第16図　第５層出土の石器実測図②（Ｓ＝１/２）……25
第17図　第５層出土の石器実測図③（Ｓ＝１/２）……27
第18図　第５層出土の石器実測図④（Ｓ＝１/２）……28
第19図　第５層出土の石器実測図⑤（Ｓ＝１/２）……29
第20図　第６層出土の石器実測図　（Ｓ＝１/２）……30
第21図　第７層出土の石器実測図　（Ｓ＝１/２）……31
第22図　排土および表面採集の石器実測図（Ｓ＝１/２）……31
第23図　近世陶器実測図（Ｓ＝１/２）……33
第24図　出土銭貨拓影（Ｓ＝１/１）……34
第25図　Ｃ３精査坑出土遺物の垂直分布……35
第26図　第５層出土石器の器種別平面分布……36
第27図　頭ヶ島白浜遺跡出土石器組成グラフ……39
第28図　凡方貝塚出土彩色土器（Ｓ＝１/２）……57

表　目　次

第１表　頭ヶ島白浜遺跡出土近世人骨一覧……7
第２表　頭ヶ島白浜遺跡出土縄文土器観察表①……20
第３表　頭ヶ島白浜遺跡出土縄文土器観察表②……21
第４表　頭ヶ島白浜遺跡出土石器観察表①……32
第５表　頭ヶ島白浜遺跡出土石器観察表②……33
第６表　出土銭貨一覧表……33
第７表　頭ヶ島白浜遺跡出土石器層位別集計表……39
第８表　長崎県における主要外洋遺跡の遺構・装備一覧……41

図版目次

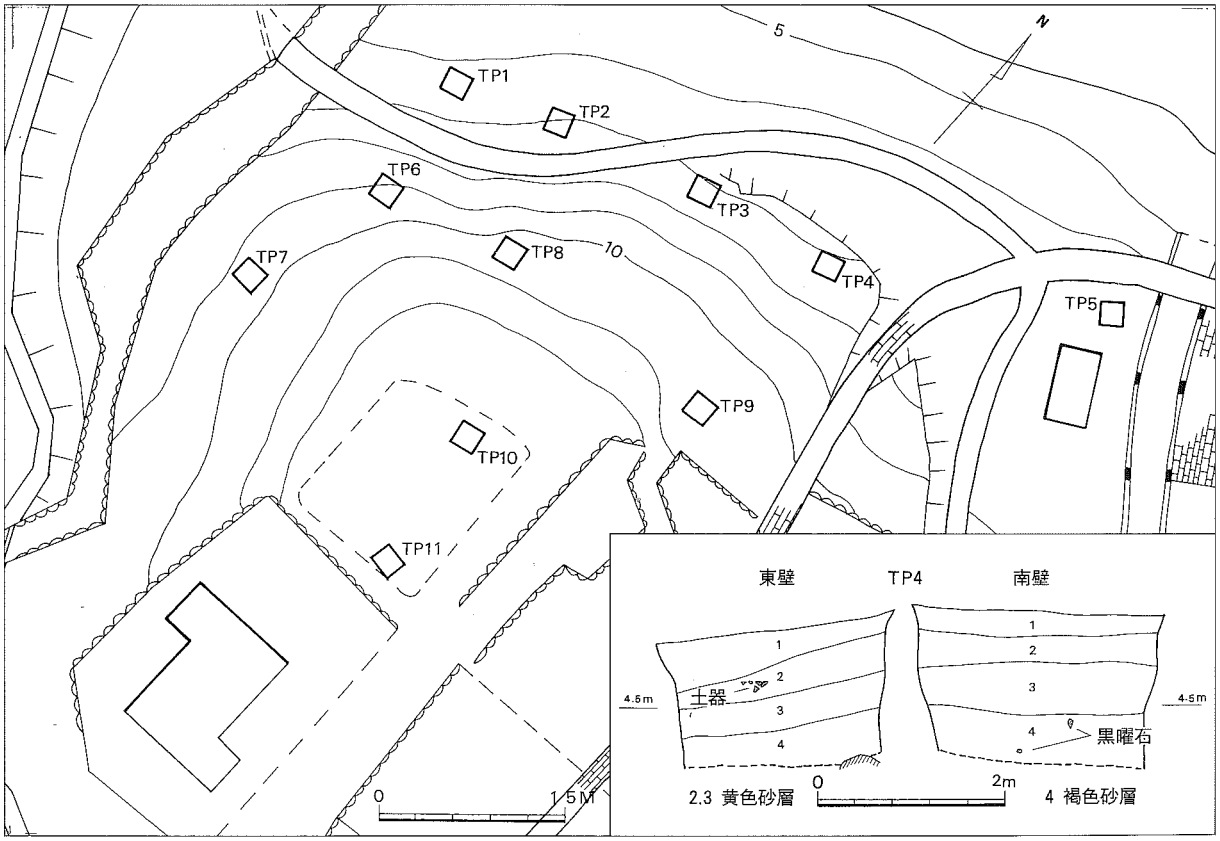
図版１　遺跡近景・旧汀線付近の打上礫・韓国隆起文土器……63

Ⅰ．調査に至る経緯

白浜遺跡が立地する海岸では，戦時中より砂の採取がおこなわれていたが，1967（昭和42）年４月頃，砂採取中に人骨20体が偶然発掘された。同年７月に有川町所在の浜郷遺跡の調査のために来町していた別府大学・長崎大学の研究者が現地を確認し，同年８月に緊急発掘調査を実施した。その際，人骨２体（成人女性・幼児），縄文時代前期・中期・後期・晩期の土器が発見されている。

近年，有川町では手狭となったアワビ養殖場の拡張のため，同養殖場の移転を計画し，最終的に白浜地区を建設地として選定した。そこで本年２月に有川町教育委員会および長崎県教育庁文化課が範囲確認調査を実施し，このたび本調査を実施した。調査面積はおよそ400m²である。

調査組織【有川町教育委員会】教育長　原 雄覺，事務局長　宗 吉範，事務局長補佐　江口 勝彦，生涯学習係長　原 光康　【土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム】館長　松下 孝幸，同館学芸員　中川 しのぶ，中野 江里子，中野 範子，磯部 美恵子，松下 玲子　【長崎県教育庁文化課】埋蔵文化財班係長（副参事）安楽 勉，文化財保護主事　古門 雅高，甲斐田 彰，文化財調査員　高原 愛　【調査協力】長岡 信治（長崎大学教育学部助教授），渡邊 康行　【調査作業員】竈本 勝，立石 清和，川上 潔，小田 住義，大塚 忠勇，境川 克治，江浜 繁義，大瀬戸嘉一，原 千代喜，江口 佐均，布袋 等，中山 ヤス子，中山 スミエ，川崎 タミ，大塚 マツ，大塚 タミ子，中本 イサ子，中田 サヨ，中田 イセ子，江崎 キミ子，江崎 ワカエ，境川 ヤス子，吉田 トメ子，川端 ユリエ，松井 キクエ，井川 キクノ，小田 リエ子



第１図　頭ヶ島白浜遺跡試掘坑配置図（S＝１／600）
第２図　ＴＰ４土層図（S＝１／60）

II．遺跡の立地と環境

1．地理的環境（第3図）

頭ヶ島白浜遺跡が所在する長崎県南松浦郡有川町は中通島のほぼ中央部に位置する。東は五島灘に面し，西は青方を介して南松浦郡上五島町，北は浦桑を介して南松浦郡新魚目町，南は南松浦郡若松町の荒川・楡木に隣接し，浜串を介して南松浦郡奈良尾町と境を接する。町域は東西約6km，南北約32km，面積約57.01km²をはかる。有川町の座標は北緯32°59′東経129°8′であり，人口は男3,749人，女4,271人，計8,020人，世帯数は2,984世帯である。（平成8年1月末日現在）

有川町の地勢は有川湾と鯛之浦沿岸に海岸低地があるのみで，東岸部は中起伏山地からなり，海岸低地と山地の間は丘陵地である。有川湾沿岸の低地は木場川・大川の谷底低地とその河口のデルタと砂州の合成による海岸低地である。鯛之浦の湾奥部には奥浦海岸低地が存在する。

頭ヶ島白浜遺跡は有川町北東部に位置する頭ヶ島北部の海岸に立地し，行政上は，南松浦郡有川町友住郷字白浜にある。頭ヶ島は，面積1,639m²，人口は48人，22世帯（平成2年現在）で，昭和35年の243人からすると減少は著しい。同島の地質は，五島層群からなり，島の周囲はほとんど岩礁で，砂地は南側の田尻地区と浜泊地区および白浜地区だけである。島の中央部には島を東西に走る丘陵があり，最高所は111.4mを測る。島内東部には，昭和56年に上五島空港が開港し，それにともない頭ヶ島大橋も開通して道路整備が進んだ。

2．歴史的環境

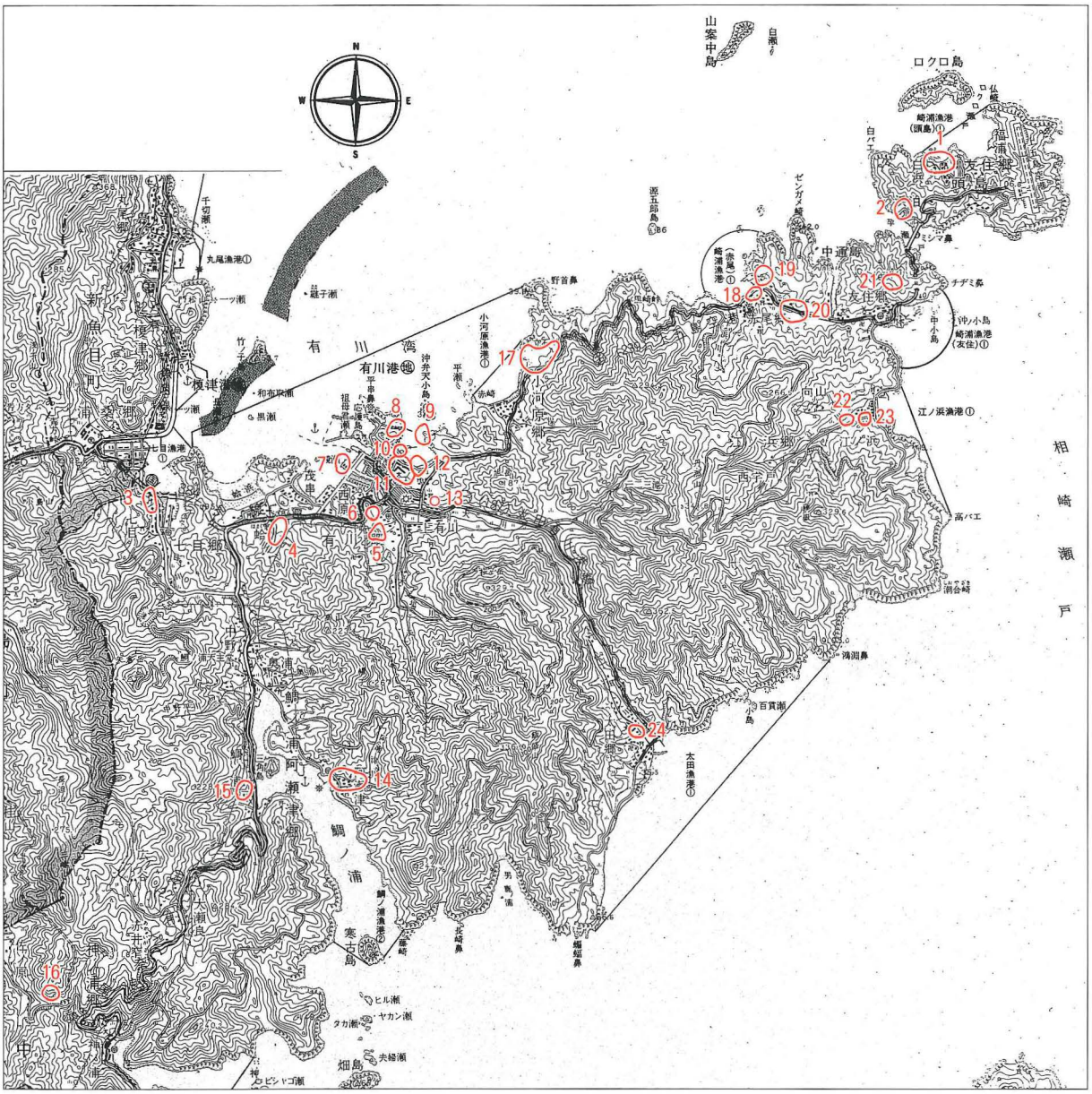
有川町の旧石器時代の遺跡としては赤尾郷字小櫃越（こびつごえ）所在の赤尾C遺跡から，細石核・細石刃・ナイフ形石器が表採されている（下川1979）。

本遺跡と同様に縄文時代の遺跡である頭ヶ島浜泊遺跡では，頭ヶ島大橋の工事に伴う緊急調査が県文化課によって1976（昭和51）年に行われ，縄文土器（曽畑式・阿高式）を出土している。また，未調査であるが小河原（おがわら）郷字立石の立石遺跡からは，縄文前期（轟式・曽畑式），中期（阿高式系），後期（北久根山式・鐘崎式）の土器や，石鋸・敲石・石鏃などの遺物が表採されている。その他の散布地としては，赤尾郷の赤尾B遺跡，有川郷浜村の浜海中遺跡，有川港海中遺跡，有川郷字西原の西原A遺跡，同西原B遺跡，有川郷字絶所（ぜっしょ）の絶所遺跡（旧海老川遺跡），神之浦郷の佐野原峠遺跡などがある。また，鯛ノ浦阿瀬津郷には鯛之浦貝塚が存在する。

弥生時代の遺跡としては著名な有川郷浜村の浜郷遺跡（浜遺跡・浜第2遺跡）がある。弥生時代の散布地としては，有川中学校の敷地や周辺の墓地からなる有川郷字上原の上原遺跡や，先述の浜泊遺跡，赤尾A遺跡，赤尾B遺跡，浜海中遺跡，有川港海中遺跡，鯛之浦阿瀬津郷の阿瀬津（あぜつ）遺跡がある。古墳時代の遺跡は少なく，散布地としては，赤尾A遺跡，赤尾B遺跡がある。

［引用・参考文献］

下川達彌1979「日本最西端の旧石器資料」『考古学ジャーナル』167号
有川町郷土誌編集・編纂委員会1995『有川町郷土誌』有川町
長崎県土地対策室1982「有川・漁生浦・佐尾」『離島振興開発地域土地分類基本調査』長崎県



1．**頭ヶ島白浜遺跡**
2．頭ヶ島浜泊遺跡
3．七目遺跡
4．絶所遺跡
5．西原Ｂ遺跡
6．西原Ａ遺跡
7．有川港海中遺跡
8．鯨見山遺跡
9．浜海中遺跡
10．浜第２遺跡
11．上原遺跡
12．浜郷遺跡（浜遺跡）
13．堂前様石塔群
14．阿瀬津遺跡
15．鯨之浦貝塚
16．佐野原峠遺跡
17．立石遺跡
18．赤尾Ｂ遺跡
19．赤尾Ａ遺跡
20．赤尾Ｃ遺跡
21．供栖遠見番所跡
22．江ノ浜石塔群
23．江ノ浜薬師堂石塔群
24．太田石塔群

第３図　頭ヶ島白浜遺跡と周辺の遺跡・地形（Ｓ＝１／75,000）

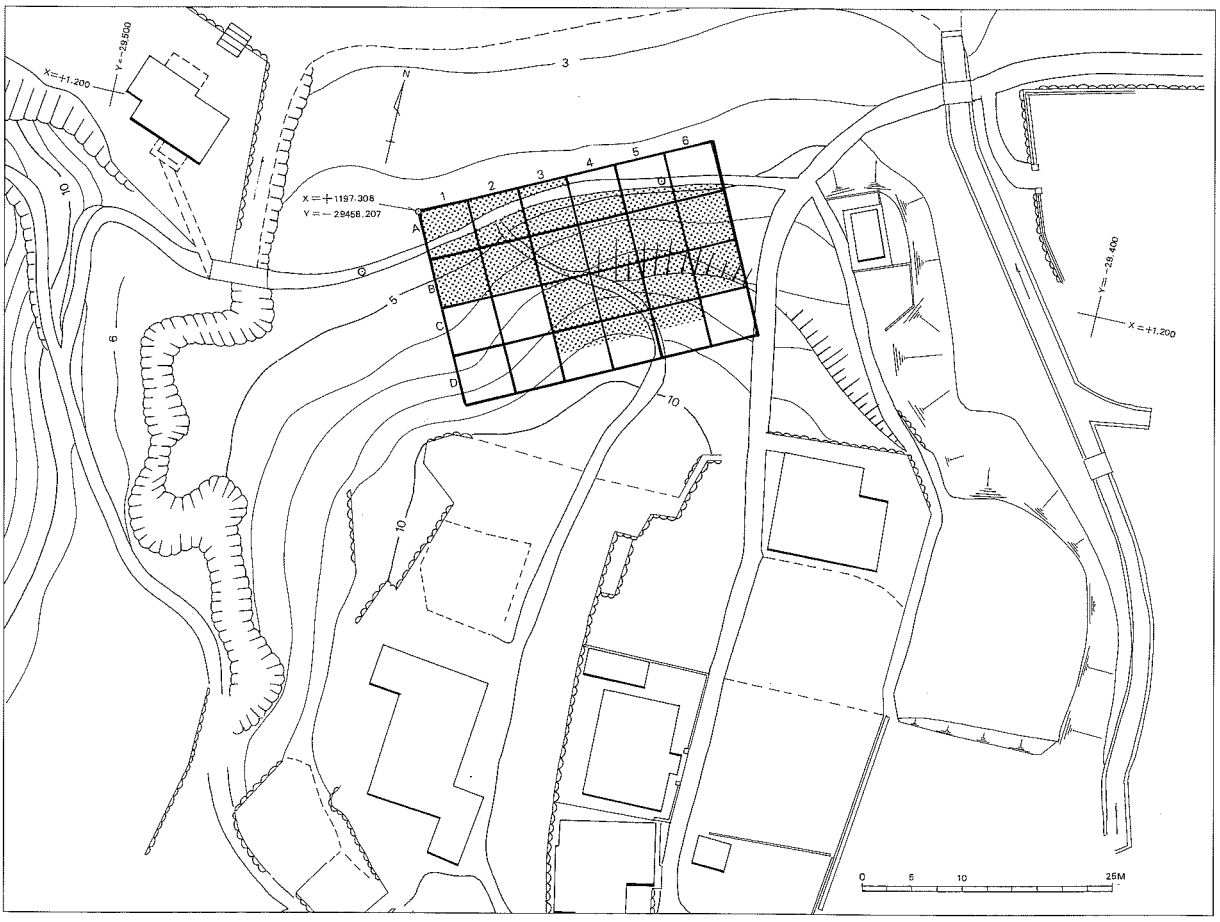
Ⅲ．調査の概要

1．範囲確認調査の概要（第1・2図）

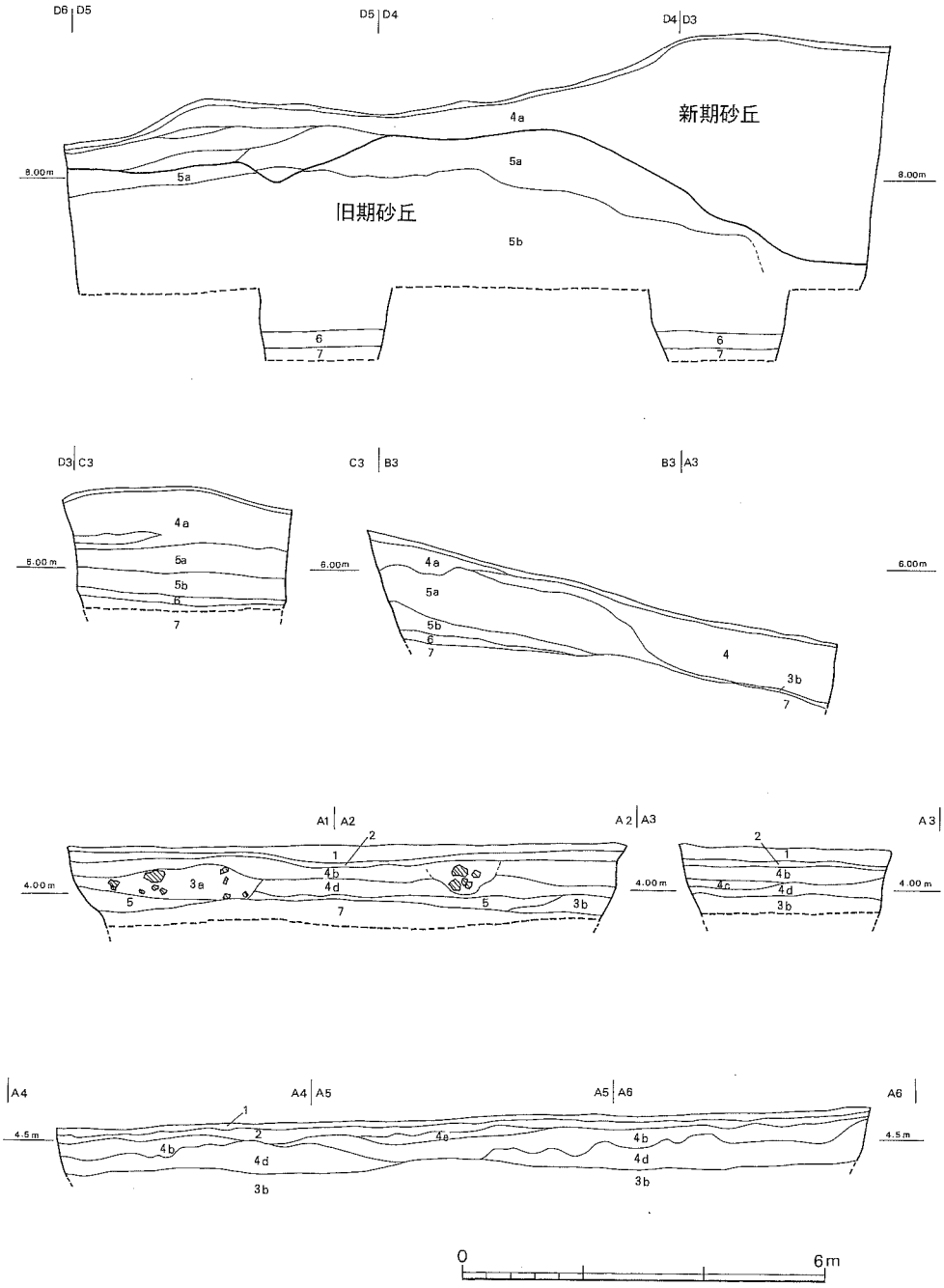
調査は平成7年2月14日～同月18日にかけて実施した。工事予定地内に11箇所のＴＰ（試掘坑）を地形に応じ，任意の点に設定した。平坦部にＴＰ１～５，傾斜面にＴＰ７～９，頂部にＴＰ10・11をいれた。平坦部のＴＰ２・４では縄文前期の遺物が認められ，砂層の下に粘土と砂の混じり合った褐色粘砂土層の包含層が確認された。ＴＰ９は頂部に近い傾斜地であるが，暗褐色砂質土層からは後期の粗製無文土器が多く出土した。このＴＰは２m掘り下げても粘砂土層に届いていない。頂部のＴＰ10・11はキメ細かい砂層が2.5m掘り下げても続き，下層を確認していないが，安全面から中止した。

2．本調査の方法（第4図）

２月の範囲確認調査で工事区の東側を中心に４つの試掘壙で包含層が確認されたため，このＴＰを取り込むかたちで，東西方向に６列，南北方向に５列のグリッド（１グリッドは５×５m）を設定した。グリッドの起点の座標は国土基本座標Ⅰ系からＸ＝＋1197.306，Ｙ＝－29458.207である。Ａ３・Ｂ３・Ｃ３グリッドは精査グリッドとし，出土遺物はすべて原位置を記録した。その他のグリッドからの出土遺物は土層ごとにとりあげた。ただし，遺物取り上げの際には一つのグリッドをさらに４分割し，北面するＺ形にａ～ｄの小グリッドを設定しておこなった。なお，グリッド番号は北西隅の基準杭にそれぞれ付した。

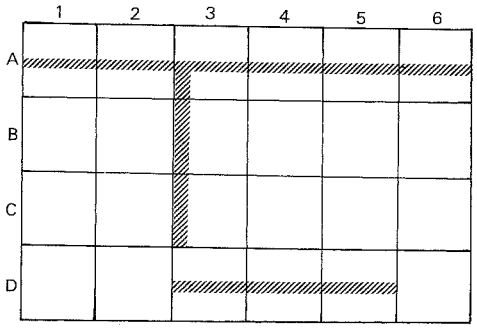


第4図　頭ヶ島白浜遺跡グリッド配置図（Ｓ＝１／750）



第５図　頭ヶ島白浜遺跡土層図（S＝1／120）

３．基本層位（第５図）



基本的な層序は表土（第１・２層），灰白色砂層（第４層），礫層（第３層）黄色砂層（第５層），褐色粘砂層（第６層），褐色粘質土層（第７層）である。

第５層は縄文前期海進後に堆積した風成砂で，これを旧期砂丘とすることができる。第５層は上下２層に分離できそうである（第５ａ層・第５ｂ層）。しかしな

がら，調査区全体にわたっては，上下の識別が困難であった。第４層は古代から現代にかけて堆積した風成砂で，新期砂丘といえる。第５層とは色調が異なり識別は容易であるが，４層自体は堆積場所によって砂質や色調が微妙に異なる（第４ａ層～第４ｄ層）。以上の層は第Ⅵ章１に詳述している。

礫層は２種類を確認した。第３ａ層は土層観察や調査区西側を流れる小河川の河岸断面の土層との比較などから，この河川の氾濫堆積物と判断した。Ａ１グリッドの土層図や範囲確認調査の土層の所見などから旧期砂丘（第５層）の形成後の堆積物と判断した。第３ｂ層は第７層との境界付近に海棲生物の生痕が確認されたこと，礫中より縄文前期土器が出土することなどから縄文前期海進にともなう打ち上げ礫で当該期の汀線付近と判明した。（図版１）なお，第３ｂ層と本遺跡の砂丘形成過程については，長崎大学の長岡先生より教示をうけた。

Ⅳ．遺　　構

１．近世末から近代の遺構

第４層を中心に一部第５層を切り込んで石組み遺構，階段状遺構，集石遺構を検出した。出土遺物より近世末から近代にかかるものと推定される。石組み遺構の下からは直立したアワビ貝や，石で囲われた徳利などが出土した。いずれも出土状態から地鎮的なものかと判断された。

また，Ａ３グリッドには転倒して埋没した墓石が２基発見された。近代以降の墓石とみられる。[註1]

２．近世埋葬遺構（第６図・表１）

第４層を中心に一部第５・６・７層を切り込んで45体の埋葬人骨を確認した。埋葬方法は土坑墓・木棺墓・カメ棺墓などがあり，埋葬姿勢には伸展葬・座葬・屈葬などがある。屈葬には仰臥屈葬・伏臥屈葬・左右側臥屈葬があり，膝の屈曲にも強弱があるなど多様である。頭位や主軸方向も一定しない。副葬品は少ないが，数珠・六道銭・かんざし・小壺などがある。これらの副葬品から，埋葬時期は近世であることが判明した[註2]。人骨には改葬されたものや，頭蓋骨など大半の骨が失われながら一部原位置を保ったものがあった。これは集骨状況や追善供養の供献土器などから近世末に頭ヶ島に入植した人々による改葬行為にともなうものと判断された。

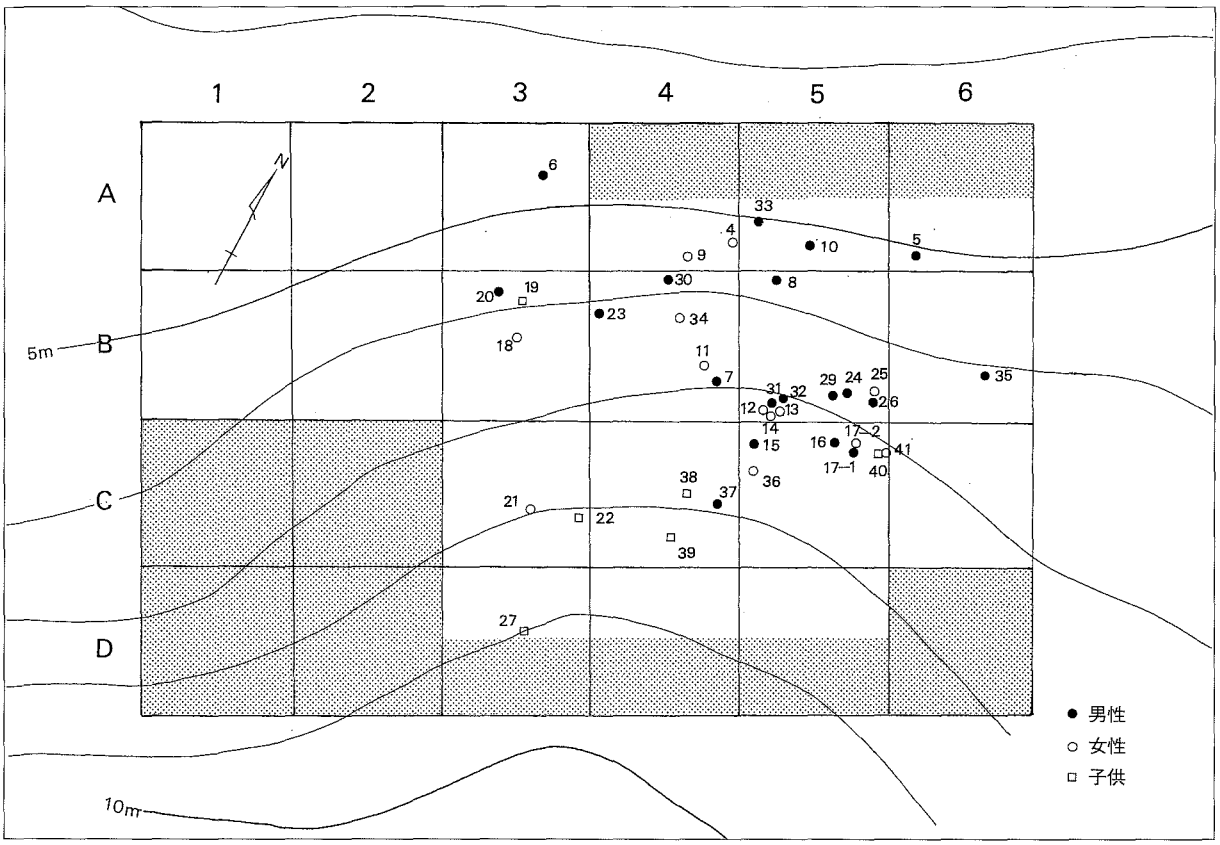
３．近世墓被葬者について

近世墓の被葬者については，現状では頭ヶ島島内の人ではなく島外の人々と考えたほうが妥当であろう。その根拠としては，まず，現在の白浜地区の人々の墓が調査区の東側にあり，住民によって手厚い追善供養がなされているのに対し，調査区より出土した近世墓地は既に無縁化していること，さらに現在の白浜地区の人々が近世末に入植したキリスト教信者の末裔であるのに対し，調査した近世墓の副葬品などにはキリスト教的な要素が全くみられないどころか，数珠や六道銭など，むしろ仏教的な要素をもつこと，また，近世の頭ヶ島は無人島であったといわれることなどがあげられる。

さらに埋葬の契機であるが，被葬者が本貫地の墓地に埋葬されないということで，いくつか推論も成り立つであろうが，ここでは事実報告にもとづく問題提起のみにとどめておきたい。

註１　墓碑に年号はなく，１基には「川崎清之　つる　まつ」の名があり，もう１基には「中山つる」の名が刻してある。

註２　37号人骨にともなった六道銭にはマ頭通（18世紀中頃初鋳）が含まれる。



第6図　頭ヶ島白浜遺跡近世人骨出土地概念図（S＝1／250）

第1表　頭ヶ島白浜遺跡出土近世人骨一覧

番号	グリッド	性別	年齢	埋葬姿勢	副葬品	備考	番号	グリッド	性別	年齢	埋葬姿勢	副葬品	備考
1		男性	熟年			集骨改葬	23	B 4 a	男性	壮年	側臥屈葬		
2		男性	熟年			集骨改葬	24	B 5 d	男性	不明			部分骨
3		女性	壮年			集骨改葬	25	B 5 d	女性	壮年			最近の集骨改葬（ビニール出土）
4	A 4 d	女性	熟年	側臥屈葬			26	B 5 d	男性	壮年			最近の集骨改葬（ビニール出土）
5	A 6 c	女性	不明			重機により損傷	27	D 3 b	—	小児	側臥屈葬		10歳前後
6	A 3 b	男性	熟年			集骨改葬・緑青付着	28			欠番			
7	B 4 d	男性	熟年			改葬・サザエの供献あり	29	B 5 d	男性	不明			部分骨
8	B 5 a	男性	熟年	座葬		釘が出土	30	B 4 b	男性	不明			部分骨・頭蓋骨なし
9	A 4 d	女性	壮年	座葬		釘が出土	31	B 5 c	男性	熟年	仰臥伸展葬		
10	A 5 d	男性	熟年	座葬			32	B 5 c	男性	壮年			部分骨（集骨の可能性あり）
11	B 4 d	女性	熟年	伸展葬	数珠（左上腕部）	木棺埋葬・鉄釘・棺木質	33	A 5 c	男性	熟年	側臥屈葬		
12	B 5 c	女性	熟年			集骨改葬	34	B 4 b	女性	不明			部分骨・下肢のみ
13	B 5 c	女性	壮年			集骨改葬	35	B 6 d	男性	不明			部分骨
14	B 5 c	女性	壮年			集骨改葬	36	C 5 a	女性	壮年	伏臥葬		
15	C 5 a	男性	熟年			集骨改葬	37	C 4 d	男性	壮年	仰臥屈葬	壺・銭貨8・箱状鉄製品	
16	C 5 b	男性	壮年			集骨改葬	38	C 4 d	—	小児	側臥屈葬		12歳前後
17—1	C 5 b	男性	熟年			鉄製容器に集骨改葬	39	C 4 d	—	幼児	座葬	銭貨6	4歳前後
17—2	C 5 b	女性	壮年			鉄製容器に集骨改葬	40	C 5 b	—	幼児			部分骨，4・5歳前後
18	B 3 b	女性	壮年	側臥屈葬			41	C 5 b	女性	老年	座葬	銭貨6・かんざし・木片	甕棺葬
19	B 3 b	—	小児	屈葬		12歳前後	42		女性	壮年			
20	B 3 a	男性	壮年	座葬	銭貨		43		—	幼児			1歳前後
21	C 3 d	女性	不明			部分骨	44		男性	不明			
22	C 3 d	—	小児			15歳前後・足のみ残存	45		男性	不明			旧集骨西側

Ⅴ．出土遺物

1．縄文土器

(1) 縄文土器出土状況

頭ヶ島白浜遺跡から出土した土器の大半は縄文前期から後期初頭を中心とする土器で，総破片数は1954点である。そのうち第６・７層から365片，第5層から1589片が出土した。後述するがＣ３精査坑の遺物堆積状況から判断して包含層は安定した堆積を示しており，これらの土器は原位置をほぼ保っていると考える。グリッドごとの出土状況によると，第６・７層ではＢ列のグリッドを中心にして出土し，比高の高いＣ・Ｄ列では出土数が少ない。それに対し第5層では，比高の高いＤ列のグリッドからの出土が増加する。また，曽畑式系土器に関してはＢ４・Ｂ５グリッドから集中して出土した。本遺跡の縄文土器の出土状況としては，調査面積に対して，出土土器の数量が少ないこと，しかし出土量が少ない割には図上で復元できる，まとまった個体資料の出土が多いという特徴が指摘できる。

(2) 縄文土器（第７～13図）

出土した縄文土器を以下のように群別に分類し，出土層位ごとに説明を加える。

なお，個々の土器の詳細については観察表（表２・３）を参照されたい。

第Ⅰ群　轟Ｂ式系土器

第Ⅱ群　曽畑式系土器古相（深堀Ⅳ群・江湖貝塚・下本山岩陰遺跡出土土器）段階の土器

第Ⅲ群　曽畑式系土器新相（深堀Ⅴ群・伊木力第3群3類）段階の土器

第Ⅳ群　曽畑式系土器終末相（深堀Ⅶ群，曽畑（新）式を含む）段階の土器

第Ⅴ群　尾田式系土器

第Ⅵ群　並木式系土器

第Ⅶ群　春日式系土器

第Ⅷ群　阿高式系土器

第Ⅸ群　瀬戸内系中期土器

第Ⅹ群　韓国隆起文系土器

第ⅩⅠ群　型式不明土器

(3) 第６・７層出土縄文土器

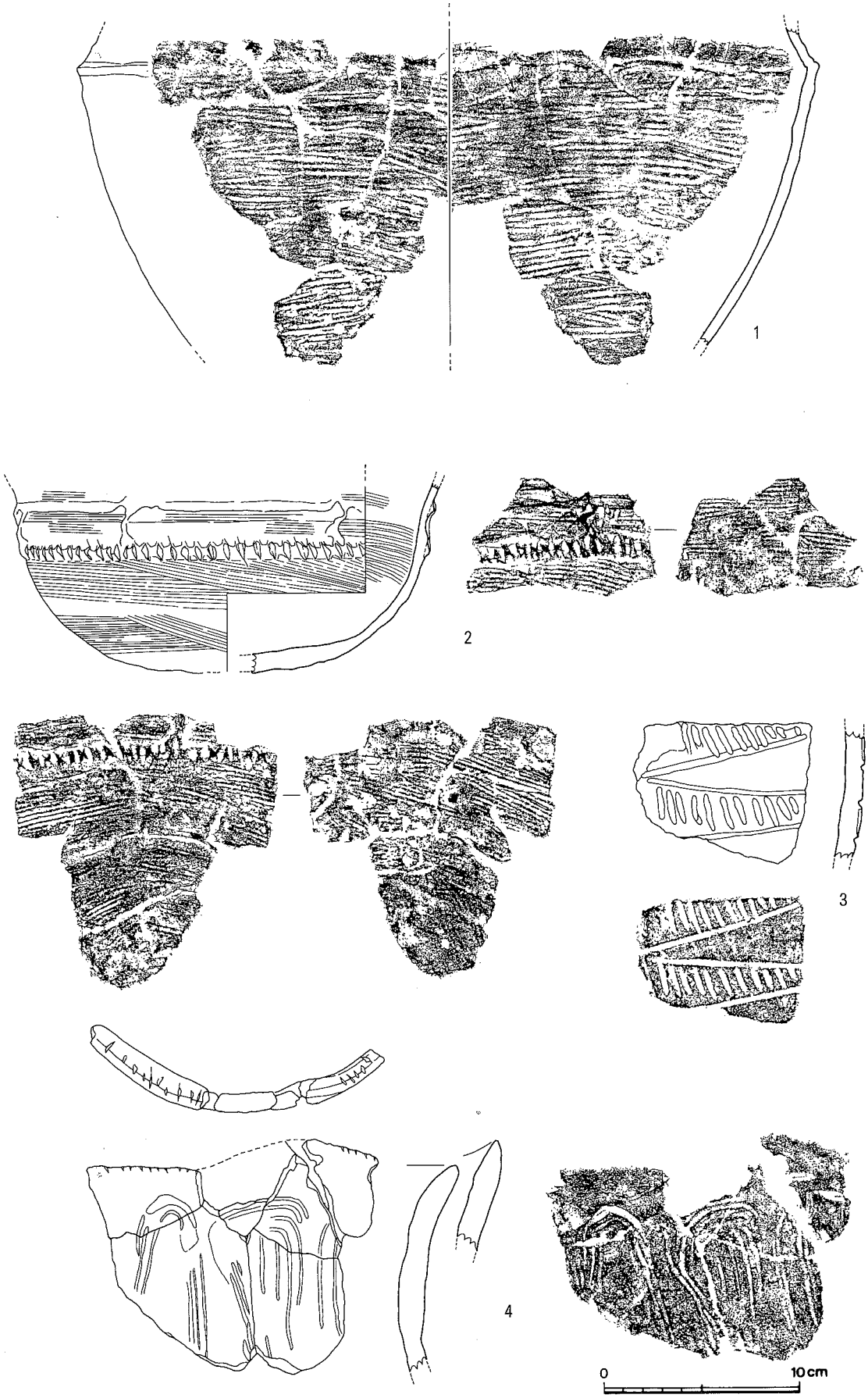
①第Ⅰ群土器（轟Ｂ式系土器）（１・２・６～17）

ａ．第１類土器（１）

１は胴部が「く」の字形に内傾し，胴部が張出す器形で，内外面は貝殻による条痕が施されている。屈曲部には隆起帯が貼付され，頂部がつまみ出されるように盛り上がっているが，装飾といえるものはこれだけである。色調は外面が暗褐色で内面は赤褐色を呈し，器壁は薄い。胎土に滑石や結晶片岩は含まない。

ｂ．第２類土器（２・８）

２は胴部において「く」の字形に外傾しながら屈曲する器形を有する。屈曲部の上下には断面三角



第７図　第６・７層出土縄文土器実測図①（Ｓ＝1/3，３はＳ＝1/2）

形の２本の隆帯がめぐり，両者は逆Ｓ字状の垂下隆帯で結ばれている。屈曲部下の隆帯には鋭利な施文具により，やや斜めに刻目が施されている。刻目は深く，器壁にも刻み痕を残す。内外面には貝殻条痕が施され，外面は暗褐色，内面は赤褐色を呈する。胎土には，結晶片岩が混入されている。**8**は**2**の口縁部ではないかと思われる資料である。これが口縁部とすると，**2**は屈曲部より上に，さらに数本の微隆起帯がめぐり，その微隆起帯を垂下隆帯でつなぐという器形に復元できる。

ｃ．第３類土器（**6**・**7**・**10**・**13**）

いずれも内外の器面に貝殻条痕が施されるものである。**7**・**10**・**13**は胎土や条痕の施法が類似し，胎土には金雲母を含む。**6**は試掘坑（ＴＰ２）からの出土資料であるが，この試掘坑付近は河川浸食や近世の攪乱などをうけ，整層状態とはいえないので**6**については参考資料に留めるべきと考える。

ｄ．第４類土器（**9**・**11**・**12**・**14**～**17**）

少量かつ細片のため，全体の特徴がつかみにくいものを一括した。隆帯を横に貼付するもの（**12**・**14**・**15**），曲線的な隆帯を貼付するもの（**16**・**17**），隆帯に刻み目があるもの（**11**）などがある。

②第Ｘ群土器（韓国隆起文系土器）（**3**）

3は鋸歯状に斜行する沈線で文様帯を区画し，それぞれの文様帯を密な縦位の沈線で充塡するか，研磨ののちにベンガラを塗彩するかのいずれかによって施文した土器である。内面はナデによって調整されている。胎土は緻密で精選されており，共伴する轟Ｂ式系土器の胎土とは明らかに異なる。焼成も極めてよく，色調は内外面ともに黄褐色を呈する。後述するように韓国新石器時代の隆起文土器の搬入品である可能性が高い。

③第ＸＩ群土器（型式不明土器）（**4**・**5**）

4は器壁が厚くボッテリとした土器で，胎土には結晶片岩を混入させており，それら結晶片岩粒は大きいもので直径３㎜ほどになる。土器内外の表面において，これらの結晶片岩が光を反射する。口縁部は外反し，口唇部には不規則に施文された刻目をもつ。色調は外面が黒褐色で，内面は黄褐色である。全体の器形は不明だが，胴部下端の形状から推測すると，頸部から胴部にかけて若干張り出し，再び屈曲して底部にいたるものではないかと思われる。胴部の文様は３ないし４本単位の施文具により浅い沈線を施している。縄文早期の土器のように器壁が厚く，轟Ｂ式系の土器とは系譜を異にする土器であろう。**5**は内外の器面に貝殻条痕が施され，胎土には結晶片岩を含まない土器である。外面には貝殻腹縁によるＣ字形の爪形文が２列に施文されている。２列の爪形文列の間には粘土塊が貼付され，その上からやはり貝殻腹縁によるＣ字形爪形文を施している。口縁部と思われる土器片にもＣ字形爪形文が胴部のそれより密に施されている。この土器も**4**と同じく轟Ｂ式系土器とは系譜を異にする土器であろう。

(4) 第５層出土縄文土器

①第Ｉ群土器（轟Ｂ式系土器）（**18**～**25**）

第５層からも轟Ｂ式系の土器を出土した。**18**は内外面に条痕を施し，口縁部から垂下隆帯が貼付され，口唇部には玉状の突起を貼り付けているものである。この土器は第５層下位から出土した。その

第８図　第６・７層出土縄文土器実測図②（S＝1/3）

ほかにも隆帯を横位に貼付するもの（**20・21・24**），微隆帯をもつもの（**23・25**），土器の内外面は条痕のみのもの（**19・22**）などの出土がある。

②第II群土器（曽畑式系土器古相段階の土器）（**27～58**）

Ｂ４・Ｂ５グリッドの第５層下位から出土した土器群である。本遺跡の曽畑式系土器は前述した第６・７層からは出土していない。これらの土器の文様は整然と施文され，器壁は薄く，胎土には滑石が混入され，焼成も良好な土器群である。第１類から３類に細分される。

ａ．第１類（**27～29・36**）

いずれも口縁部の資料で，口縁部先端に１列の刺突列点文をもち，２本の横位沈線を経て，組帯文系の文様を配するものである。口唇部にも刺突列点文がみられる資料がある。

ｂ．第２類（**39～41・43～58**）

第１類の口縁部資料に続く胴部資料である。組帯文系の文様を整然と施文している。

ｃ．第３類（**30～35・37・38・42**）

下から上への刺突によって施された複数の刺突文列に向かって横走する沈線文を施したもの（**31～34・37**）や，刺突文列に平行して沈線文が走るもの（**30・35**），沈線文のみのもの（**38・42**）などがある。第１類や第２類に比較して沈線の施法や間隔に乱れが生じ，土器の色調も若干異なる。

③第III群土器（曽畑式系土器新相段階の土器）（**59～64・67**）

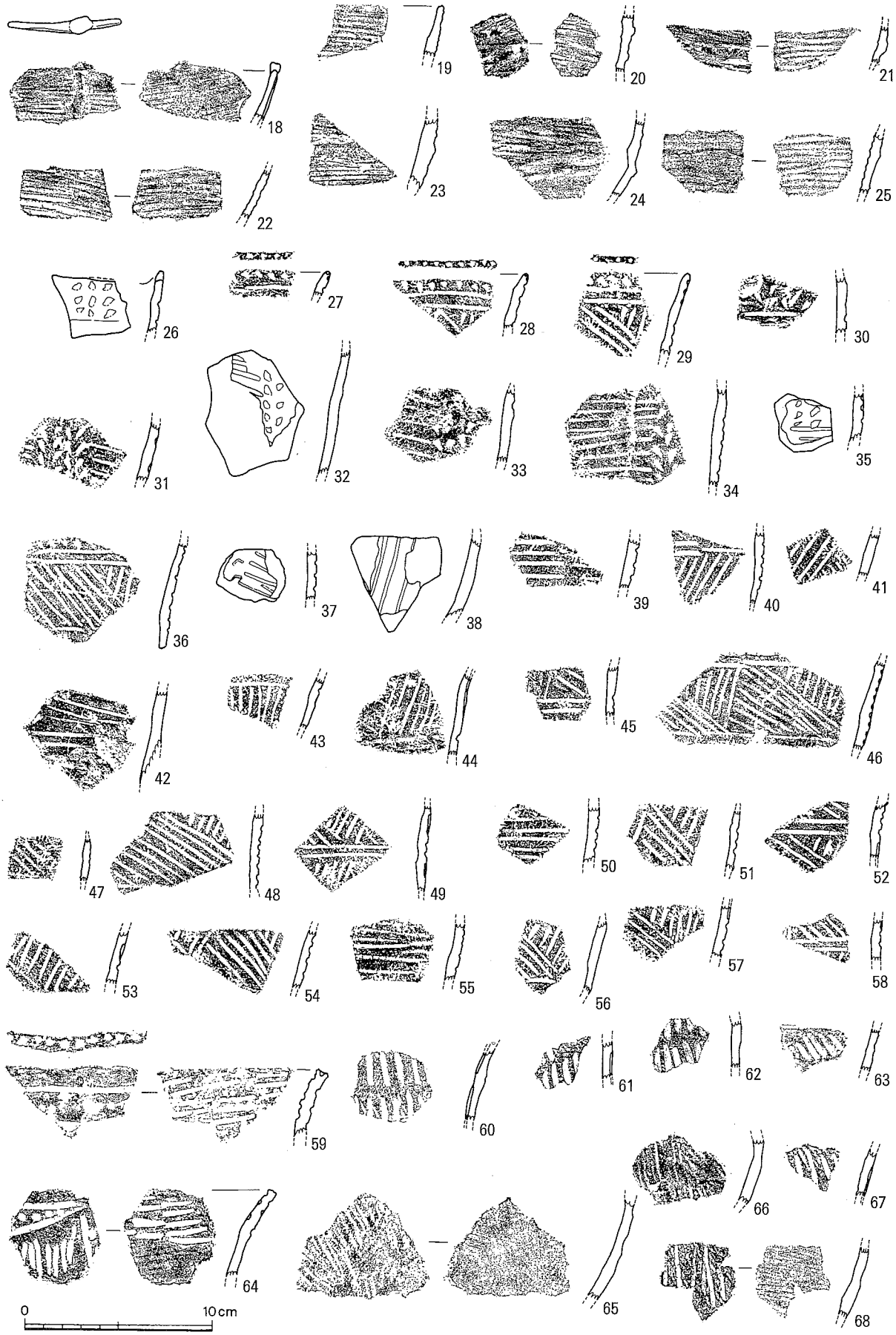
口縁は外反し（**59・64**），胎土には滑石を含まず石英が多く混入され，沈線は太く粗く，かつ短くなった土器群である。

④第IV群土器（曽畑式系土器終末相段階の土器）（**65・66・68・69**）

69は復元口径15cmを測る深鉢形土器である。口縁部は小さな波状をなし，４つの山をもつ。口唇部には２本単位の施文具による刺突文列がある。内面全体には粗い貝殻条痕を施す。外面は条痕調整をほどこしたのちに文様を刻み，胴部上位・中位・下位において文様や調整が異なる。胴部上位では先端が平坦な工具により横位にナデられて，幅0.5～0.7cmの擦過状の条痕となり，前段階の条痕の地文は消失している。胴部中位では条痕の地文に浅い沈線を綾杉状に刻む。胴部下位では条痕地文の上から縦の条痕様の沈線を施す。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，胎土には滑石を含まない。**66**は**69**と同一個体である。**65**は胎土・調整などの点で**69**に類似する。

⑤第Ｖ群土器（尾田式系土器）（**70**）

70は本遺跡の範囲確認調査の際に，ＴＰ４から出土した深鉢形土器である（第２図参照）。器形は砲弾型で，底部は丸底になるものと推定される。内外面は黒褐色で，胎土には滑石を含まない。内面はナデによって調整され，条痕はみられない。土器表面は横走する６本から８本単位の押引沈線で構成される帯によって，器面が底部付近も含め，５つに区画されている。押引沈線文の帯の上位の線は連点文と化し，下位の線は沈線化し，漸移的な文様効果を演出している。押引沈線文の帯を便宜上，口縁部付近のものを第１押引沈線文帯，底部付近のものを第５押引沈線文帯と呼称すると，第２と第３押引沈線文帯の間に，上下対称に単線の弧文が配されている。この上下の弧文は完全な対称ではなく，



第 9 図　第 5 層出土縄文土器実測図①（S＝1/3）

不揃いである。弧文と弧文の間には横位の短沈線が入る。底部付近には曽畑式土器にみられるような曲線文が施され，さらに胴部下位には補修孔が穿たれている。

⑥第Ⅵ群土器（並木式系土器）**(71・76・78～81)**

71は復元口径18cmの深鉢形土器である。口縁部は若干肥厚し，５つの山形突起をもつ。口縁部先端は平坦に成形され，山形突起の頂部を含めて押引きされている。内面は擦過痕が若干残るものの，ほとんどナデにより調整痕は消されている。外面の施文としては凹線を引き，その後凹線と凹線の間に押引文を施している。色調は赤褐色で，胎土には滑石を混入させる。**76**は復元口径31cmを測る深鉢形土器である。口唇部は肥厚し，口縁部には４つの山形突起が付される。山形突起の頂部には，深い刻目が４つ施される。口唇部は平坦に成形され，胴部と同様に２本単位の施文具による押引文が施されている。しかし，ナデによって押引文は消されているため，部分的にしか残っていない。胴部文様の施文は２本単位の施文具による押引文のあとに，凹線が施され押引文を切っている。凹線を施した後に，押引きしている土器部分もあるが，文様の主体ではない。内面はナデによって成形され，胎土には滑石を含む。色調は内外面ともに明赤褐色である。

⑦第Ⅶ群土器（春日式系土器）**(73)**

73は復元口径31cmを測る深鉢形土器である。器形はいわゆるキャリパー型で，口縁部は波状をなし，４つの山がある。内面には横位の貝殻条痕が施される。外面の施文は口縁部と胴部上半に集中し，４つの単位文様がみられる。まずは口縁部の波状口縁に沿って３本の貝殻沈線が器面を全周する。次に波状口縁の頂部下には２本のＶ字形貝殻沈線文が施される。胴部上半には，３本の山形貝殻沈線文が器面を全周する。また，口縁部文様と胴部上半の山形文様を大きく結ぶ２本のＶ字形の貝殻沈線の単位文様が存在する。さらに上記の単位文様を構成する貝殻沈線のすべてを切って「沈線内沈線」ともいうべき短沈線が施されている。短沈線の施文は既存の貝殻沈線に対し直角に，しかも土器の口縁部方向には切り込まず，必ず底部方向に切り込んで施文されている。一方胴部下半に文様はなく，ナデによって調整される。胎土には滑石や金雲母が混入されており，焼成もよい。色調は内外面ともに明黄褐色である。

⑧第Ⅷ群土器（阿高式系土器）**(74・77・82～98・100・101)**

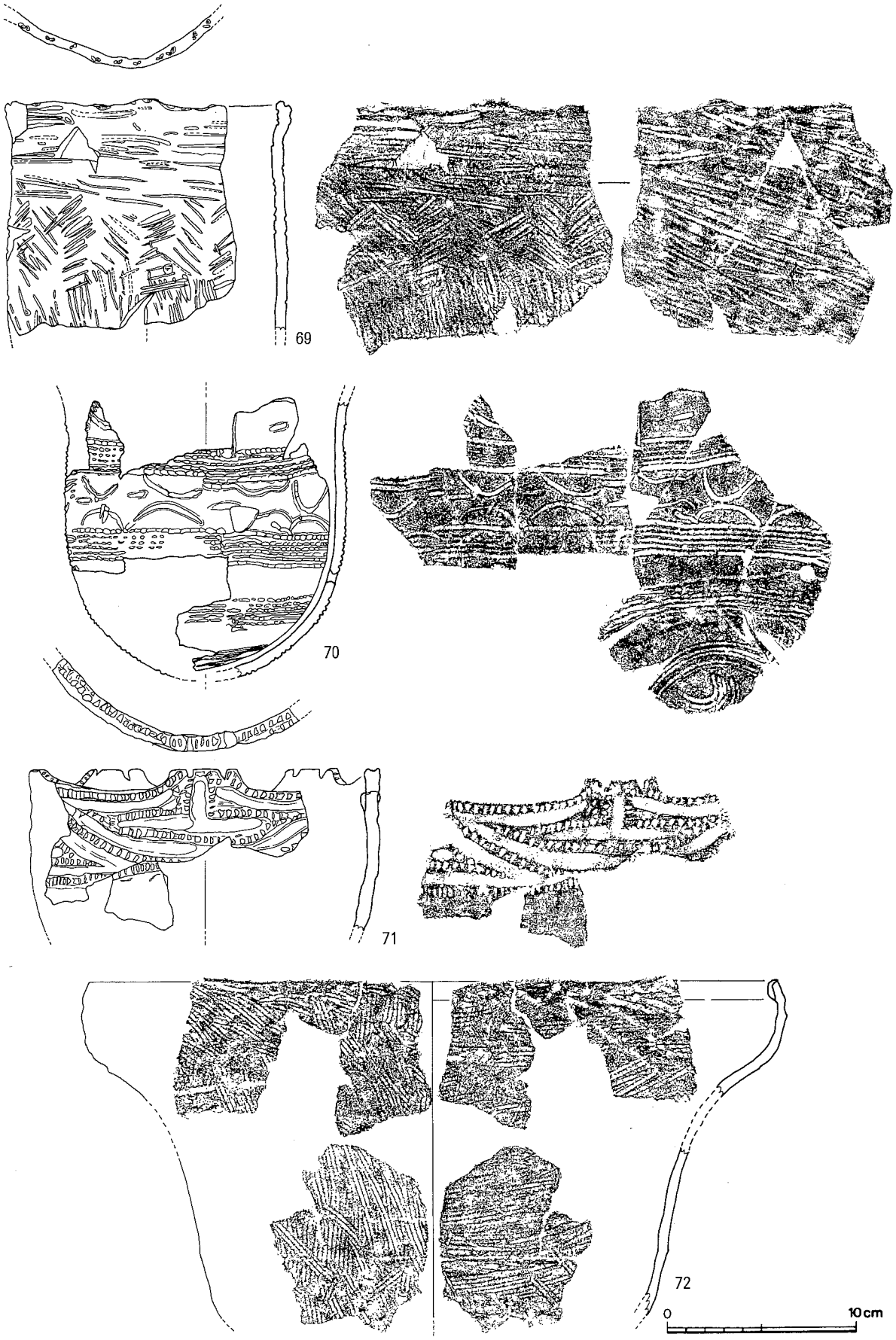
第１類から５類に細分できる。

ａ．第１類土器**(74・82・83・87・91)**

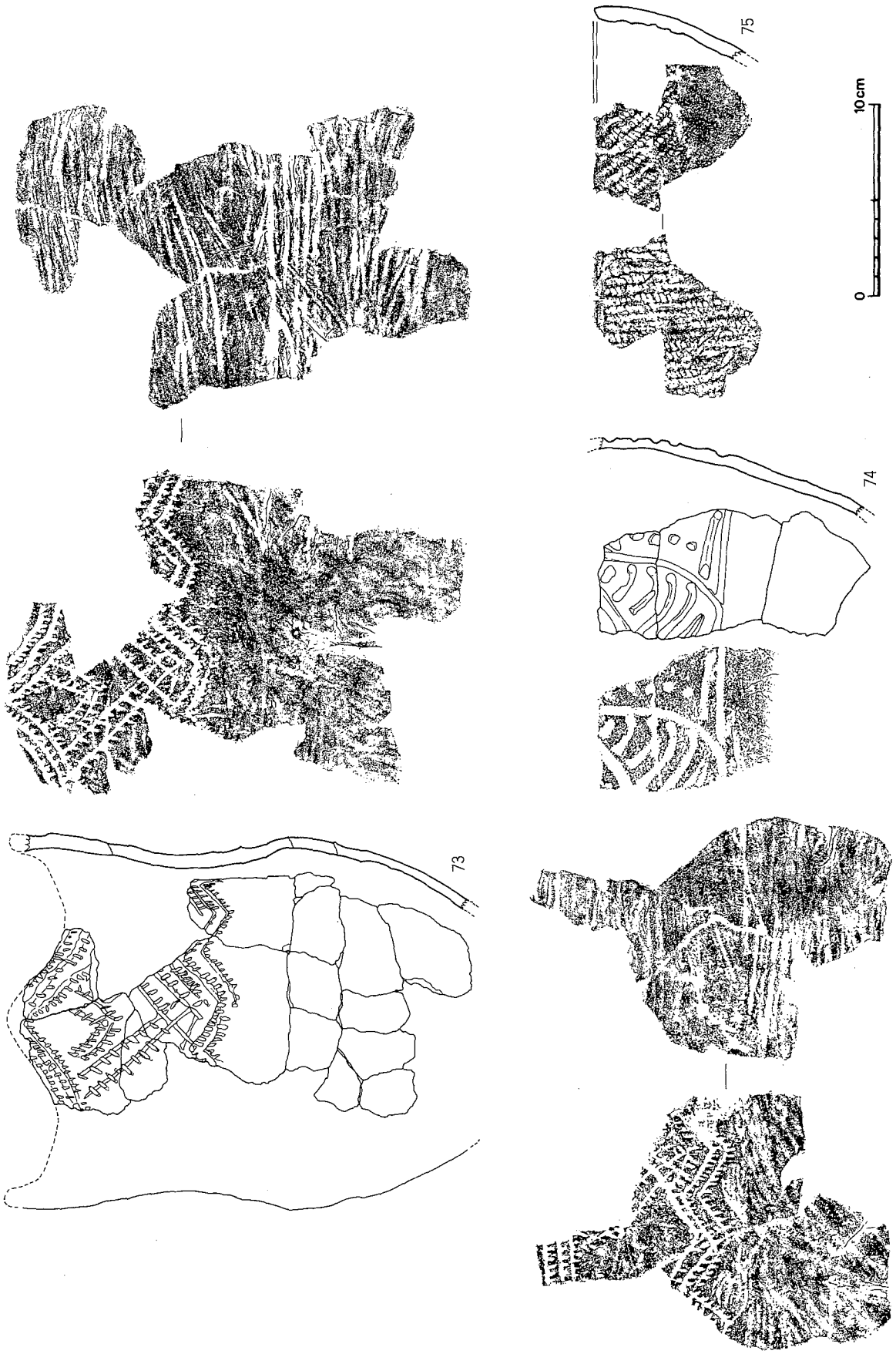
74は深鉢形土器の胴部破片である。上位には凹線文と凹点文が施される。胴部下半および内面はナデて調整され，無文で，胎土に滑石を含む。**82・83・87・91**の土器も同類型と思われる。凹線文が口縁部付近に集約される前段階の阿高式土器の資料といえよう（田中1979・川崎1990）。

ｂ．第２類土器**(86・88)**

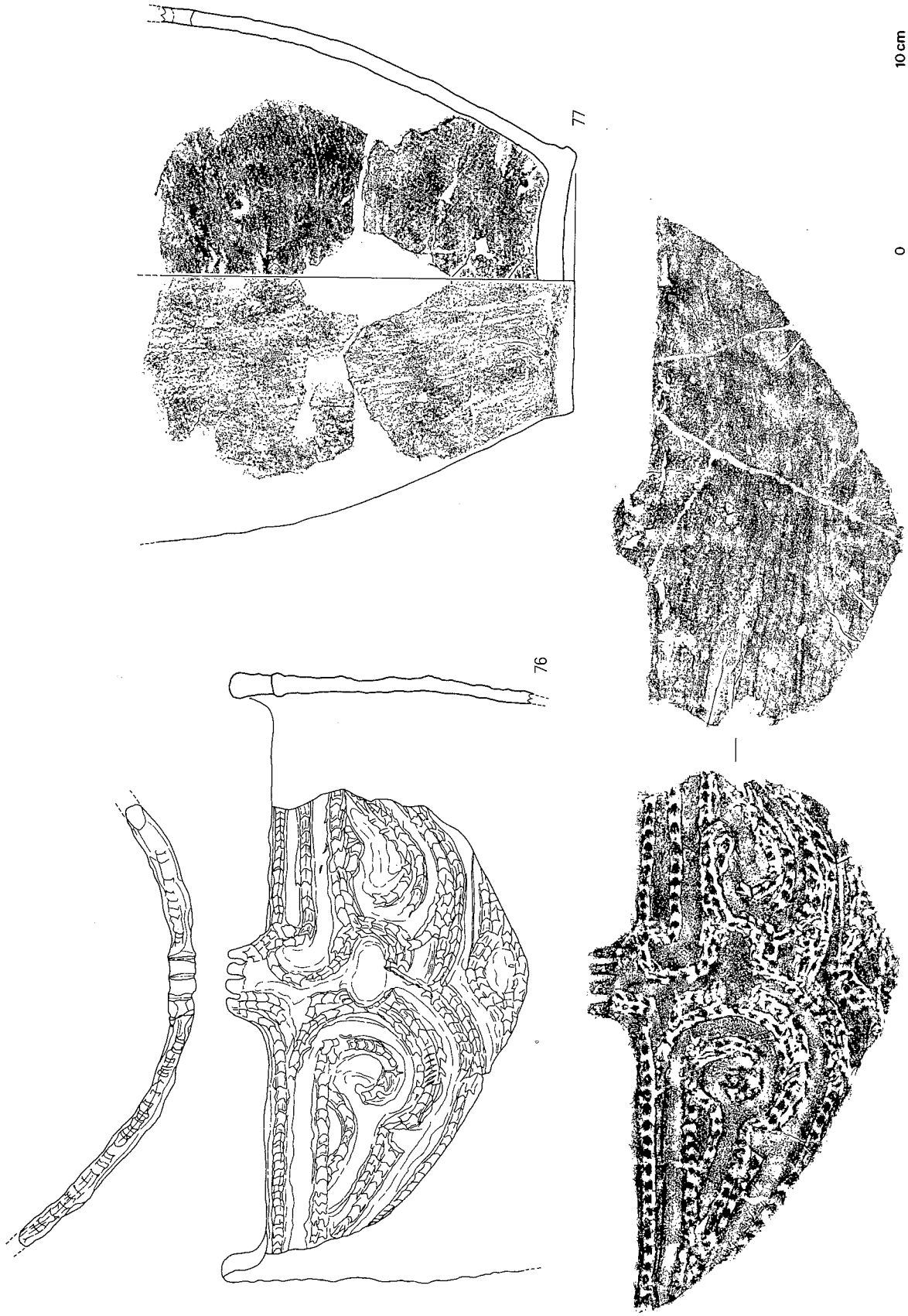
文様が口縁部に集約され，狭い口縁部文様帯が意識され，そこにはヘラ描きによって短凹線が施されている。胎土にはいずれも滑石を含んでいる。佐賀県西有田町坂の下遺跡より出土した阿高式系土器段階の資料に類似する。



第10図　第５層出土縄文土器実測図②（Ｓ＝1/3）



第11図　第５層出土縄文土器実測図③（Ｓ＝1/3）



第12図　第５層出土縄文土器実測図④（Ｓ＝1/3）

c．第３類土器（**92～98**）

文様が口縁部に集約され，狭い口縁部文様帯を有し，凹点文を施すものである。口唇部にも凹点文が施されるものがあり，胎土にはいずれも滑石が含まれる。第２類土器と同じく佐賀県西有田町坂の下遺跡より出土した阿高式系土器段階の資料といえるであろう。

d．第４類土器（**77・89・90**）

77は無文の深鉢形土器の胴部から底部にかけての資料である。底部の形状は上げ底である。土器外面の調整は底部付近から胴部に向って，ケズリによって行われ，内面の調整は横位のナデによって行われている。胎土には滑石を混入し，内外面は赤褐色を呈する。

e．第５類土器（**99～101**）

異形の土器を一括した。**99**は口縁部を粘土紐貼付によって鍔状に成形し，口縁下には貼付隆帯によって浮文を作出している。内外面ともにナデられており，丁寧につくられている。胎土には滑石がふくまれ，赤褐色を呈する。類例としては口縁部の形態は異なるものの佐賀県鳥栖市平原遺跡出土の土器に類似する（報文では図35の51）（徳永1993）。

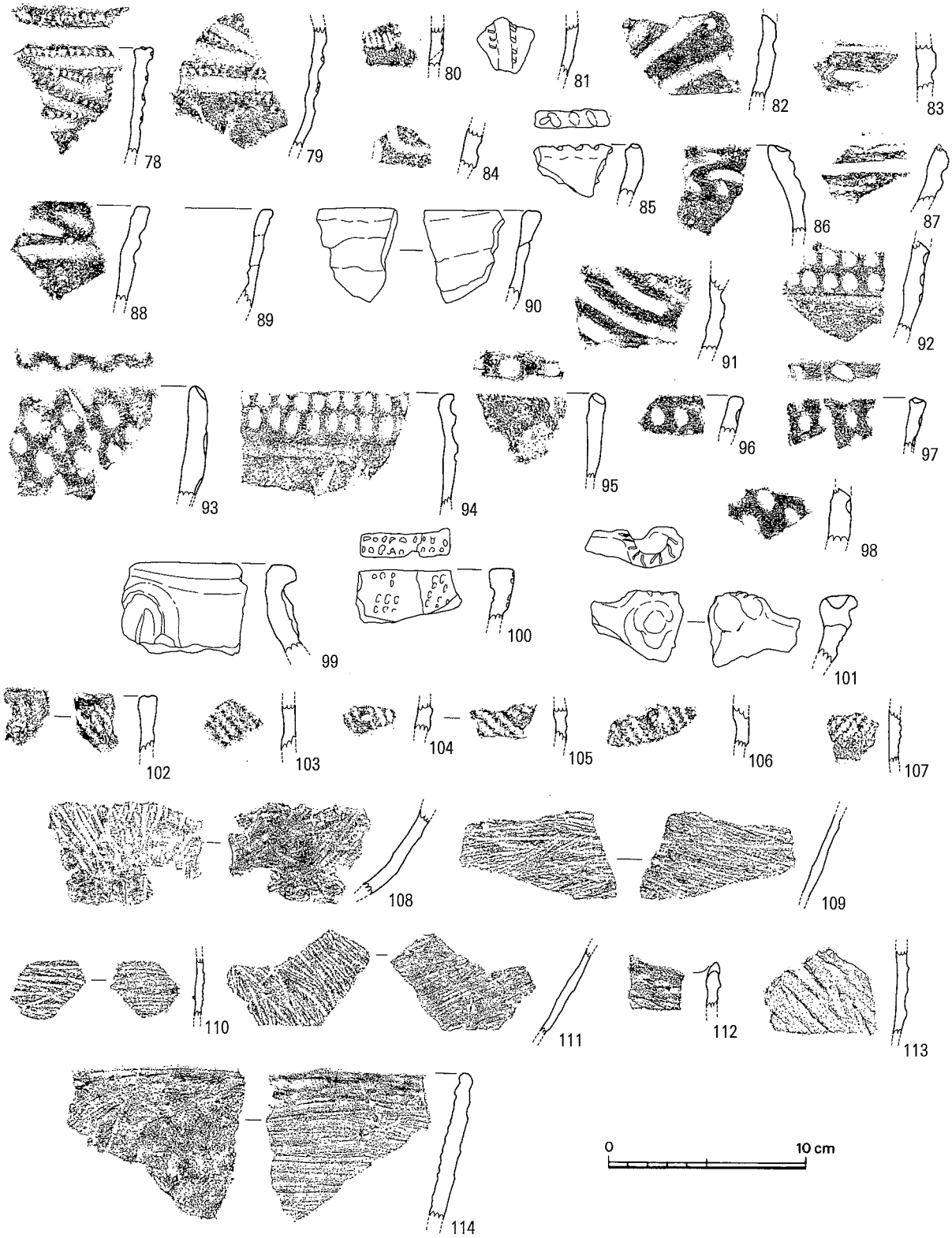
⑨第Ⅸ群土器（瀬戸内系中期土器）（**72・75・102～107**）

72は復元口径36.5cmを測る深鉢形土器である。いわゆるキャリパー型の器形で，口縁部の内側は粘土帯を貼付けることによって肥厚させている。土器の外面には，貝殻による条痕が縦位に施され，内面には同じく貝殻条痕が横位に施される。色調は灰褐色で，胎土には砂粒や金雲母が含まれるものの，滑石の混入はない。**75**もキャリパー型の器形と考えられる資料である。口唇部は平坦に成形されており，内面に向かってやや傾く。口縁部内側には，縄文（ＲＬ）が施文された幅４cmほどの文様帯をもつ。文様帯以外の部分はナデによって成形されている。土器外面にも縄文（ＲＬ）が施される。胎土には砂粒や角閃石が含まれるが，滑石の混入はない。色調は内面が明褐色，外面は暗褐色である。

⑩第ＸＩ群土器（型式不明土器）（**108～114**）

型式不明土器を一括した。**109～111**の土器は器壁が薄く，滑石を含み，赤褐色を呈する。内面は横位のケズリで調整され，外面は板状工具の擦過による条痕調整である。**112・113**は同一個体と思われる。内面は横ナデ，外面はミミズバレ状で断面三角形の隆起文が施されている。隆起文は粘土の貼付によるものではなく，ナデによって作出されたもので，轟式系土器のものとは異なる。

（古門 雅高）



第13図　第５層出土縄文土器実測図⑤（Ｓ＝1/3）

第２表　頭ヶ島白浜遺跡出土縄文土器観察表①

番号	ＧＲ	層位	器種	部位	文様・成形手法・特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
01	B4	7	深鉢	胴　部	貝殻条痕（内外）	精良	やや軟	茶褐色（外）赤褐色（内）	
02	B6	6・5下	深鉢	胴　部	貝殻条痕（内外）	結晶片岩・石英粒	軟	黒褐色（外）赤褐色（内）	
03	B6	6		胴　部	沈線文・丹塗（外）ナデ（内）	精良	良　好	黄褐色（内外）	韓国隆起文土器
04	C5	6・5下	深鉢	口縁部	浅い沈線文（外）	結晶片岩	やや軟	茶褐色（外）黄褐色（内）	
05	C4	6	深鉢	口縁部	貝殻刺突文・条痕(外)・条痕→ナデ(内)	砂粒・石英粒	やや軟	暗褐色（内外）	
06	TP2	6	深鉢	胴　部	貝殻条痕（内外）	結晶片岩・砂粒	やや軟	黒褐色(外)・赤褐色(内)	
07	C6	6	深鉢	口縁部	貝殻条痕（内外）	金雲母・砂粒	やや軟	褐色（内外）	
08	B6	6	深鉢	口縁部	条痕（外）	結晶片岩	やや軟	茶褐色（外）赤褐色（内）	
09	C4	6	深鉢	口縁部	条痕（内外）	角閃石・金雲母	やや軟	暗褐色(外)・灰褐色(内)	
10	B6	7	深鉢	胴　部	貝殻条痕（内外）	雲母・砂粒	やや軟	黄褐色（内外）	
11	C6	6			貝殻条痕（内外）・刻目隆帯・突起	砂粒	軟	褐色（内外）	
12	C6	6			条痕（内外）・貼付隆帯	砂粒	やや軟	褐色（内外）	
13	B5	7			貝殻条痕（内外）	雲母・砂粒	やや軟	褐色（内外）	
14	C5	6			ナデ（外）条痕（内）・貼付隆帯	金雲母	軟	暗茶褐色（内外）	
15	B4	6			剝落により調整不明・貼付隆帯	砂粒	軟	黒褐色（外）赤褐色（内）	
16	B6	6			条痕地に貼付隆帯（外）ナデ（内）	石英・砂粒	やや軟	茶褐色（外）赤褐色（内）	
17	C6	6			条痕（内外）・垂下隆帯・刻目隆帯	砂粒	やや軟	褐色（内外）	
18	B2	5下		口縁部	条痕（内外）・垂下隆帯・口唇部に粘土玉貼付による突起あり	結晶片岩	やや軟	茶褐色（内外）	
19	B1	5		口縁部	条痕（内外）	金雲母	やや軟	赤褐色（内外）	
20	C5	5			条痕（内外）・貼付隆帯	砂粒	軟	黒褐色（内外）	
21	C4	5			条痕（内外）・貼付隆帯	長石	軟	灰褐色（内外）	
22	C4	5			条痕（内外）	長石・角閃石・雲母	やや軟	灰褐色（内外）	
23	B5	5			条痕（内外）・貼付微隆帯	砂粒	良　好	茶褐色（外）赤褐色（内）	
24	C4	5			条痕（内外）・貼付隆帯	石英・角閃石・雲母	軟	灰褐色（内外）	
25	C6	5			条痕（内外）・貼付微隆帯	石英・砂粒・雲母	軟	褐色（外）黒褐色（内）	
26	B4	5		口縁部	刺突文（外）ナデ（内）・波状口縁	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
27	B4	5		口縁部	刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
28	B4	5		口縁部	刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
29	B5	5		口縁部	刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
30	B4	5			刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
31	B4	5			刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
32	B4	5			刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
33	B4	5			刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
34	B4	5			刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
35	B4	5			刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
36	B5	5下			刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
37	B4	5下			刺突文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
38	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
39	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
40	B5	5下			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
41	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
42	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
43	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
44	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
45	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
46	B5	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
47	B4	5下			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
48	B4	5下			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
49	B4	5下			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
50	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
51	B5	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
52	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
53	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
54	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
55	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
56	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
57	B5	5下			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	

第3表　頭ヶ島白浜遺跡出土縄文土器観察表②

番号	GR	層位	器種	部位	文様・成形手法・特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
58	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
59	B4	5		口縁部	沈線（内外）・口唇部刺突文	石英・砂粒	軟	褐色（内外）	
60	B4	5	深鉢	口縁部	沈線（外）条痕（内）	石英・砂粒	良　好	茶褐色（外）褐色（内）	
61	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	石英・砂粒	良　好	褐色（外）灰褐色（内）	
62	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	石英・砂粒	良　好	褐色（内外）	
63	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	石英・砂粒	良　好	褐色（内外）	
64	B4	5		口縁部	沈線（内外）・口唇部刺突文	石英・砂粒	良　好	褐色（内外）	
65	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	石英・砂粒	良　好	黒褐色（内外）	
66	C6	5			沈線（外）ナデ（内）	石英・砂粒	良　好	黒褐色（外）褐色（内）	69と同一個体
67	B4	5			沈線（外）ナデ（内）	石英・砂粒	良　好	黒褐色（外）褐色（内）	
68	A4	5			沈線（外）条痕（内）	石英	良　好	褐色（内外）	
69	C6	5	深鉢	口縁部	沈線（外）条痕（内）口唇部刺突文	石英	良　好	暗褐色（外）明褐色（内）	66と同一個体
70	TP4	5	深鉢	口縁部	押引沈線・弧文（外）ナデ（内）	角閃石・雲母	やや軟	褐色（外）暗褐色（内）	
71	D4	5	深鉢	口縁部	押引文・凹線文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
72	C4	5	深鉢	口縁部	貝殻条痕（内外）	砂粒・長石	やや軟	黄灰褐色（内外）	
73	D5	5	深鉢		貝殻沈線文・ナデ（外）貝殻条痕（内）	滑石	良　好	黄灰色（内外）	
74	C4	5	深鉢	胴　部	凹線文・連点文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色(外)明背褐色(内)	
75	D5	5		口縁部	縄文（RL）（内外）	砂粒・角閃石・雲母	良　好	茶褐色（外）赤褐色（内）	
76	D4	5	深鉢	口縁部	押引沈線文→凹線文（外）ナデ（内） 押引沈線→ナデ消し（口唇部）	滑石	良　好	赤褐色(外)上半赤褐色・ 下半黒褐色（内）	
77	D5	5	深鉢	胴底部	ケズリ状擦過（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色(外)明赤褐色(内)	
78	D4	5上		口縁部	凹線文→押引沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
79	D4	5上		胴　部	凹線文→押引沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
80	B4	5			凹線文→押引沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	明赤褐色（内外）	
81	D5	5			凹線文→刺突文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
82	D4	4			凹線文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
83	B6	5			凹線文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	明赤褐色（内外）	87と同一個体
84	B5	5			凹線文（外）ナデ（内）	石英・砂粒	良　好	黄褐色（外）暗褐色（内）	
85	B4	5		口縁部	ナデ（内外）口唇部に刺突文	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
86	B6	5		口縁部	凹線文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
87	B6	5			凹線文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	明赤褐色（内外）	83と同一個体
88	C5	5		口縁部	凹線文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
89	D4	5		口縁部	ナデ（内外）	滑石	良　好	暗赤褐色（内外）	90と同一個体
90	D4	5上		口縁部	ナデ（内外）	滑石	良　好	暗赤褐色（内外）	89と同一個体
91	D4	5			凹線文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
92	D3	5			連点文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
93	C5	5	深鉢	口縁部	連点文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
94	D4	5	深鉢	口縁部	連点文・沈線（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
95	D3	5上		口縁部	ナデ（内外）口唇部に刺突文	滑石	良　好	暗赤褐色（内外）	
96	D3	5上		口縁部	連点文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
97	D4	5上		口縁部	連点文(外)ナデ(内)口唇部に刺突文	滑石	良　好	赤褐色（外）黒褐色（内）	
98	C5	5上			連点文（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
99	D3	5上		口縁部	貼付隆帯（外）ナデ（内）	滑石	良　好	赤褐色（外）暗褐色（内）	
100	D5	5		口縁部	刺突文(外)口唇部にも刺突文・ナデ(内)	滑石	良　好	暗赤褐色（内外）	
101	D5	5		口縁部	沈線(外)口唇部に刺突文・ナデ(内)	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
102	C4	5		口縁部	縄文（内外）	砂粒・角閃石・長石	やや軟	褐色（内外）	
103	C4	5			縄文（外）ナデ（内）	砂粒・角閃石	やや軟	褐色（内外）	
104	C4	5			縄文（RL）（外）ナデ（内）	砂粒・石英・角閃石	やや軟	褐色（内外）	
105	C4	5			縄文（RL）（外）ナデ（内）	砂粒・石英・角閃石	やや軟	黒褐色（外）褐色（内）	
106	C5	5			縄文（RL）（外）ナデ（内）	砂粒・角閃石	やや軟	黒褐色（外）褐色（内）	
107	C4	5			縄文（LR）（外）ナデ（内）	砂粒	やや軟	黒褐色（外）褐色（内）	
108	D5	5			条痕（外）擦過（内）	石英	やや軟	赤褐色（外）暗褐色（内）	
109	D5	5			擦過（外）ケズリ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
110	C5	5			条痕（内外）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
111	D5	5			擦過（外）ケズリ（内）	滑石	良　好	赤褐色（内外）	
112	B4	5			波状口縁ミミズバレ状条痕(外)ナデ(内)	精選	良　好	赤褐色（内外）	113と同一個体
113	B4	5			ミミズバレ状条痕（外）ナデ（内）	精選	良　好	赤褐色（内外）	112と同一個体
114	B4	5	深鉢	口縁部	擦過（外）条痕（内）	砂粒	やや軟	黒褐色（外）暗褐色（内）	

2．石　　器

調査で得られた石器群は総数1743点，このうち出土層位の明確なものは1735点である。層位的には第５層に帰属する資料が1577点と圧倒的に多く，全体の約90％を占めている。ついで第６層が112点，第７層が38点となり，第４層では僅かに8点である。石核や剥片・砕片類を含む石器群総体として見ると，大半は剥片・砕片類で占められ，狭義の石器は全体の１割強に過ぎない。石器は剥片石器類と礫石器類に大別される。前者は石鋸・石鋸・石鏃・尖頭状石器・掻器・削器・抉入削器・石匙・彫器・二次加工を有する剥片・使用痕を有する剥片があり，後者では磨製石斧・磨製石斧未成品・打製石斧・礫器・敲石（表面採集資料）がある。以下，層位別に個別説明を述べる。

第４層出土の石器（第14図１～２）

本層は近世以降の撹乱を受けている可能性が強く所属時期は特定できない。ここでは２点のみ図示しておく。**1** は削器で，剥片の縁辺に粗い二次加工を施して粗鋸歯状の刃部を作出したものである。**2** は鎌崎型スクレイパー（田中1979）と呼ばれるもので，玄武岩製の大型剥片を素材として，両面加工を施したものである。

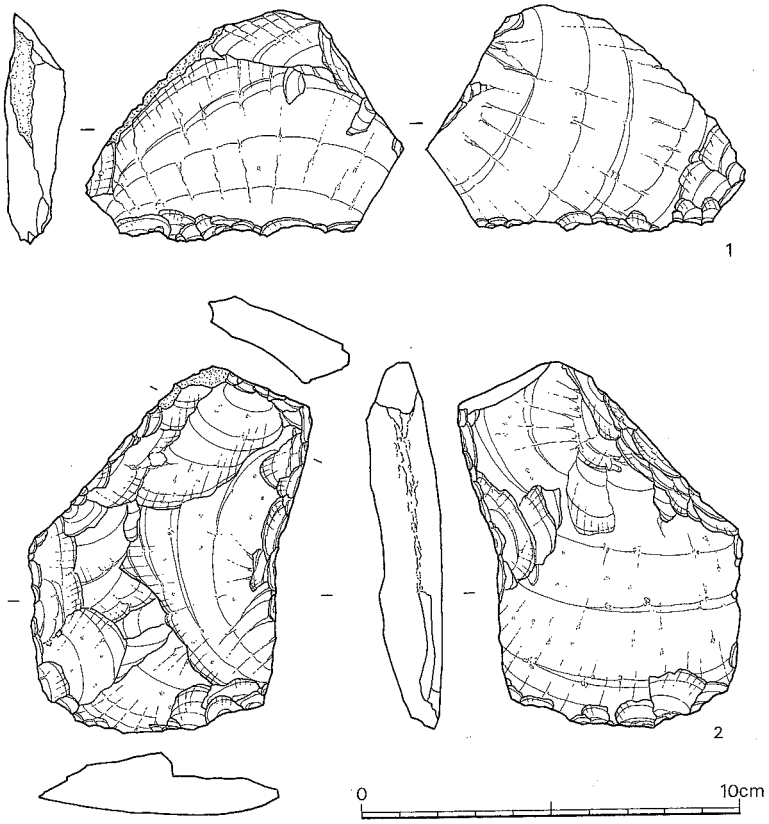
第５層出土の石器（第15図3～第19図58）

本層は頭ヶ島白浜遺跡の主体となる包含層で多量の石器・剥片類が出土した。時期的には縄文前期後半～中期を主体とする。

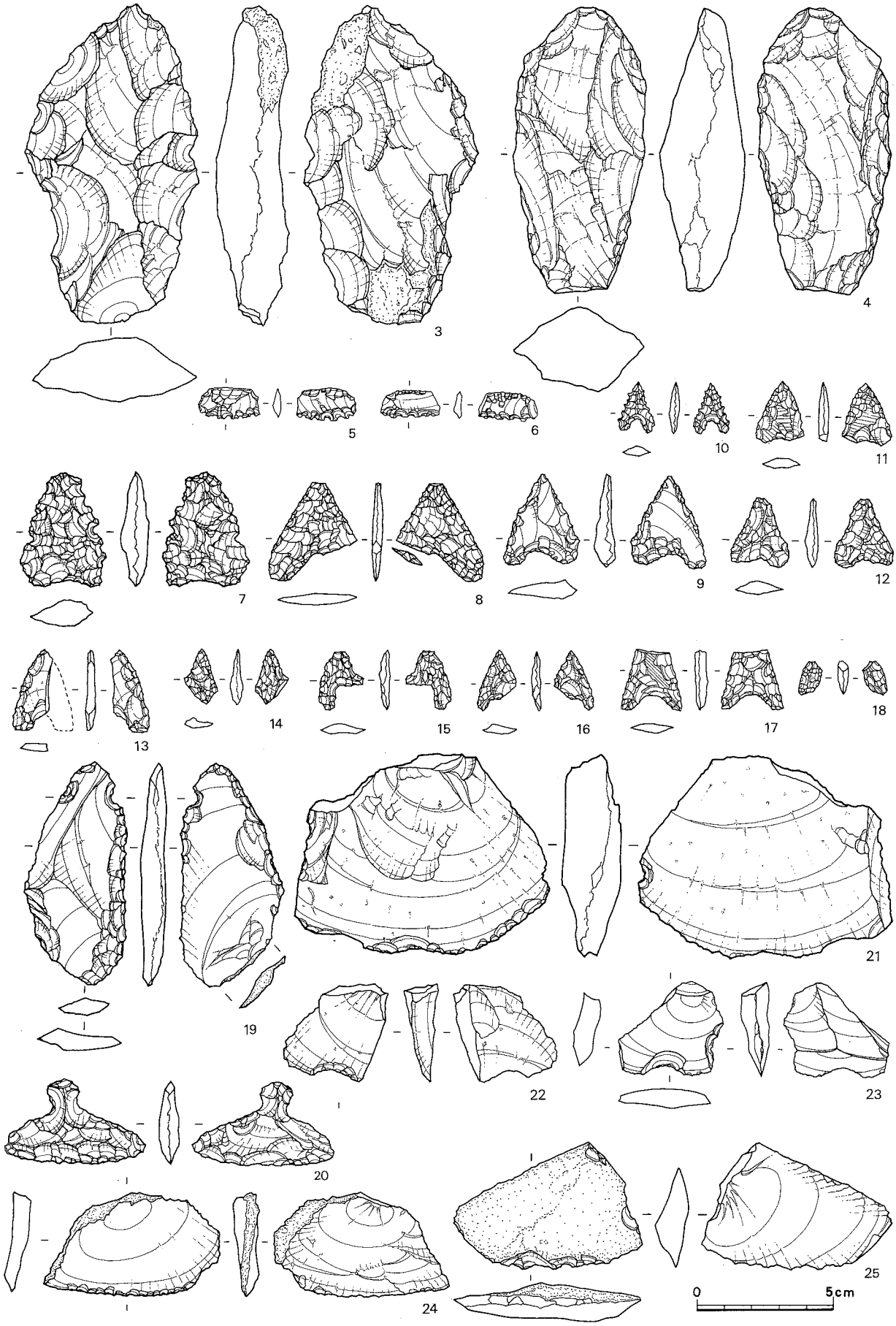
【石鋸（３・４）】　２点ともに玄武岩製の大型剥片を素材として粗い両面加工を施し，全体を鋸先状に整形したものである。先端部はやや鈍く，茎部の作出が不明瞭な点を特徴とする。橘分類（橘1979）に従えば，B類に相当しよう。

【石鋸（５・６）】　両例とも黒曜石製で，長軸の一側縁に微細な鋸歯状の加工を施したものである。

【石鏃（７～18）】　大型（７～９）と小型（10～18）の一群とがある。前者は機能的には鋸先である可能性が高いが，明確に分離できないため石鏃に含めている。**7** は大型で厚みのある剥片に二次加工を施して器体を整形したものである。先端部は鈍く全体に丸みを帯びているが，側縁は鋸歯状を呈する。**8** は正三角形状の器体に大きく山



第14図　第４層出土の石器実測図（S＝1/2）



第15図　第５層出土の石器実測図①（S＝1/2）

形の抉り込みを施したものである。片脚を欠損しているように見えるが，そこにはブランティング状の加工が施されている。欠損後の再加工なのか当初より左右非対称の形態を意図したものかは不明だが，興味深い加工例と言えよう。二次加工はきわめて入念であり，素材が良質であることとも相まって精巧な仕上がりになっている。**9**は素材剥片を斜位に用いており，二次加工が素材の形状を大きく変更しない程度に留まっているため全体にラフな作りで，断面形ではバルブ側が厚くなっている。**10**以下は**7**～**9**に比べ小型で，一般的な石鏃と言えよう。総じて二次加工は丁寧だが，鋸歯状の加工が施されているのは**10**が唯一である。**11**・**17**は中央部に軽い研磨が施されたもので，縄文中期～後期にかけて散見されるようである。**15**は左右非対称形で，石鋸と同様に組み合せ道具の一部である可能性も考えられる。

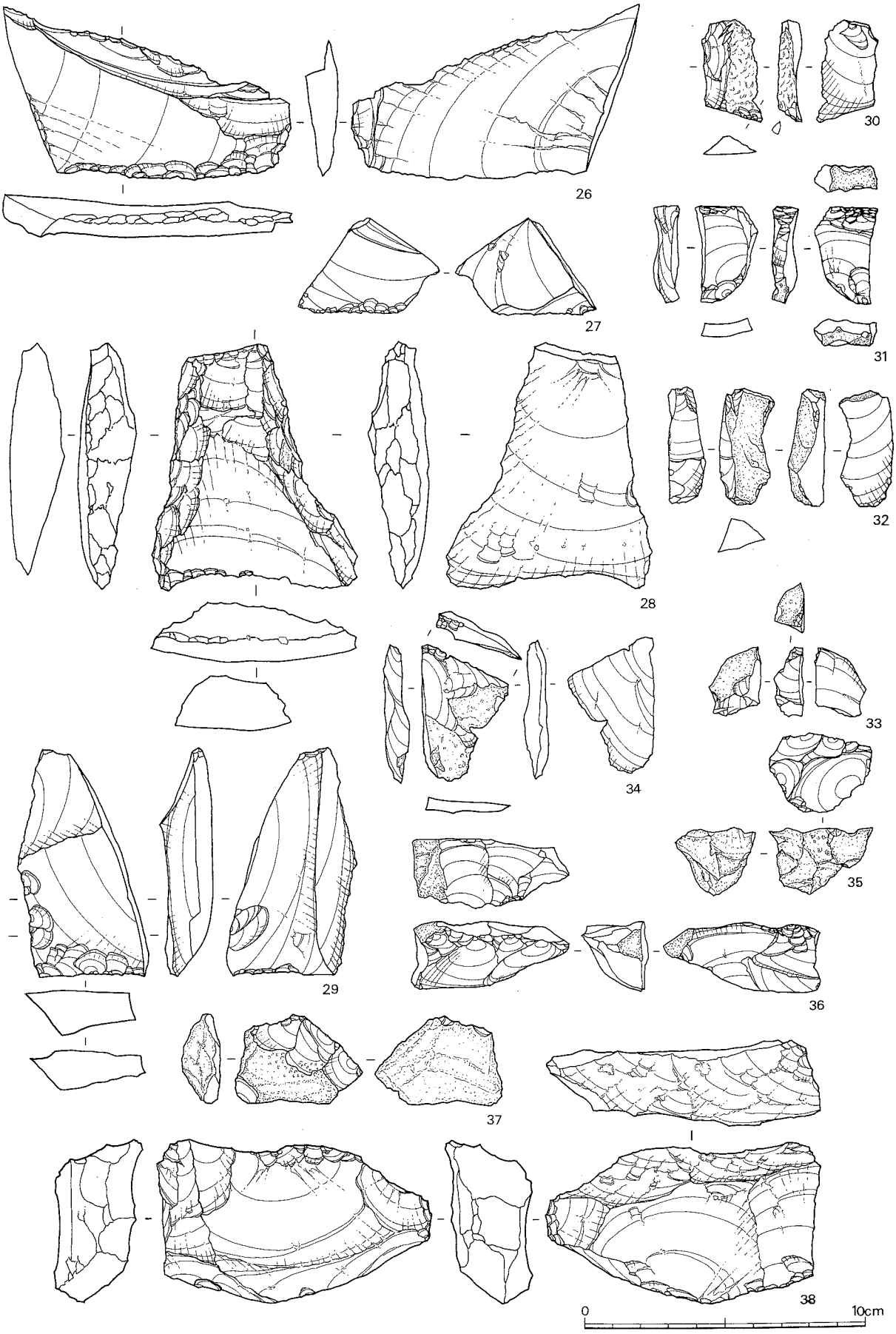
【石匙（19・20）】　縦型（**19**）と横型（**20**）がある。**19**はサヌカイト質安山岩製で抉入加工が弱く，つまみ部が目立たない作りになっている。

【掻器・削器類（21～29）】　**21**は大型厚手の剥片を素材とし末端部に二次加工を施して緩い弧状刃部を作出したもの。**24**は規則的な細かい二次加工が施されるもの。**25**・**27**は比較的粗い二次加工により刃部を作出したものである。**26**は大型剥片の縁辺部に直線的な刃部を有する。**28**は素材の両側縁に加工を施し下端の側縁を刃部として残したもので，全体として台形状に仕上げている。スクレイパーエッジを有しない点で一般的な削器とは明らかに区別されるものであるが，機能的には切削を意図しているものと考えられ，ここでは「鎌崎型スクレイパー」の一種と理解しておきたい。29は厚みのある剥片の両側辺を折断し左側辺下部から下端部にかけて「L」字形に二次加工を施したものである。

【二次加工を有する剥片（30）】　黒曜石製の縦長剥片を素材とし末端部に二次加工を施したものである。加工部は主軸に対し斜位に突出するように位置しており石錐として使用された可能性もあるが，摩耗痕は認められない。

【彫器（31～34）】　**31**は黒色良質の黒曜石製剥片を素材とし，長軸に沿って折断した後，末端部に残された自然面を打面として彫刀面を作出したものである。側縁には微細な使用痕が認められ，主要剥離面側の末端にも二次加工を施している。**32**は三角形の断面を呈する縦長剥片の頭部に小規模な彫刀面を作出したものである。図正面左側の縦走する剥離面は主要剥離面に先行する剥離面で彫刀面ではないが，側縁には微細な使用痕が残されている。黒色黒曜石製。**33**は素材の末端部に二方向からの加撃による彫刀面を作出したものである。頭部側は折面になっており，本来は縦長であったものが製作または使用時に欠損したものと思われる。暗灰色黒曜石製。**34**は黒色黒曜石製の不定形剥片を素材とし，ほぼ中軸の位置に樋状剥離を施して彫刀面としたものである。頭部には彫刀面作出後の二次加工が施されている。

【石核（35～38・39A・40）】　**35**は不安定な形状の黒曜石角礫を素材とするもので，自然面を打面として多方向からの剥片剥離を行っている。**36**は断面三角形の舟底型を呈する石核で，打面転移を行いながらの剥片剥離作業が行われている。**37**は小型で扁平な亜角礫を素材とするもので３面の連続的な剥片剥離が行われているが，剥出された剥片はいずれも３cmに満たない大きさである。図正面中央は，剥片剥離作業後に集中的な加撃が行われ，多数のパンチ痕が残されている。**39A**は円礫から剥出



第16図　第５層出土の石器実測図②（Ｓ＝1/2）

された大型厚手の剝片を素材とする石核で，自然面を打面としての連続的な剝片剝離作業が行われている。この石核には**39**Ｂの剝片が接合する。**40**は円礫を半割し，礫面を打面として剝片剝離作業を行ったものである。礫面は良く水磨されており，残存部から判断すると直径約12cm程度の大きさであったと思われる。玄武岩やサヌカイト質安山岩の場合，原材が明らかに円礫と認められるのはこの石核が唯一で，大半は**39**Ａのように大形厚手の剝片を素材として剝片剝離を行っているようである。そのため生産された剝片には正面・背面ともポジ面で構成され断面が凸レンズ状になる例も少なくない。黒曜石製の場合は，基本的に角礫または亜角礫で，原石のサイズが小さいため，剝出された剝片には自然面を残す例が多い。

【剝片（41～47)】 **41**は素材の両側辺を断ち切るように折り取ったもので，縁辺部には使用痕が著しい。器種的には「使用痕跡を有する剝片」に分類されるもので明確な二次加工は認められないが，機能的には**28**や**29**と同様に切削具として用いられた可能性が考えられ「鎌崎型スクレイパー」の一種として捉えられるものかもしれない。**42**～**44**は玄武岩製剝片の代表例で，いずれも90度ないし180度の打面転移を繰り返しながら剝出された剝片である。**42**・**43**のように直線か緩く外湾する縁辺部を有する例では，刃こぼれ状の使用痕を留めるものが多い。**47**は最大級の剝片で横幅は10cmを越える。**45**・**46**は黒曜石製である。紙面の都合上，比較的形状の整った縦長例を図示したが，出土資料の大半は**35**・**36**の石核から推察されるような不定形剝片である。

【石斧（48～57)】 **48**は玄武岩の大きな棒状礫を素材とするもので，全体に両面からの剝離加工を施した後，敲打整形を行っている。断面は楕円形に近く厚みがあり，また敲打整形痕が見られることから打製石斧とは思われず，ここでは乳棒状磨製石斧の未成品と理解した。**49**～**56**は磨製石斧である。**49**は刃部破片で斜め方向の加撃による剝離面で欠損している。**50**は撥形を呈し，完形。石質は極めて緻密で砂岩と思われる。**51**は唯一の蛇紋岩製で，平面形に比べ厚みがある。**52**は丸みを帯びた刃部を有する磨製石斧で，裏面が大きく欠損した後，刃部を再生したものと思われる。**53**は極めて扁平な磨製石斧の刃部破片である。**54**・**55**は刃部破片で，**54**の下部には刃部の稜線が残っている。**56**は，いわゆる石ノミで丁寧な研磨により全体を仕上げている。**57**は大型厚手剝片の周辺に両面からの二次加工を施したもので上半部を欠失している。全体の形状や加工の在り方から打製石斧と判断したが，擦痕や磨耗痕などは認められない。

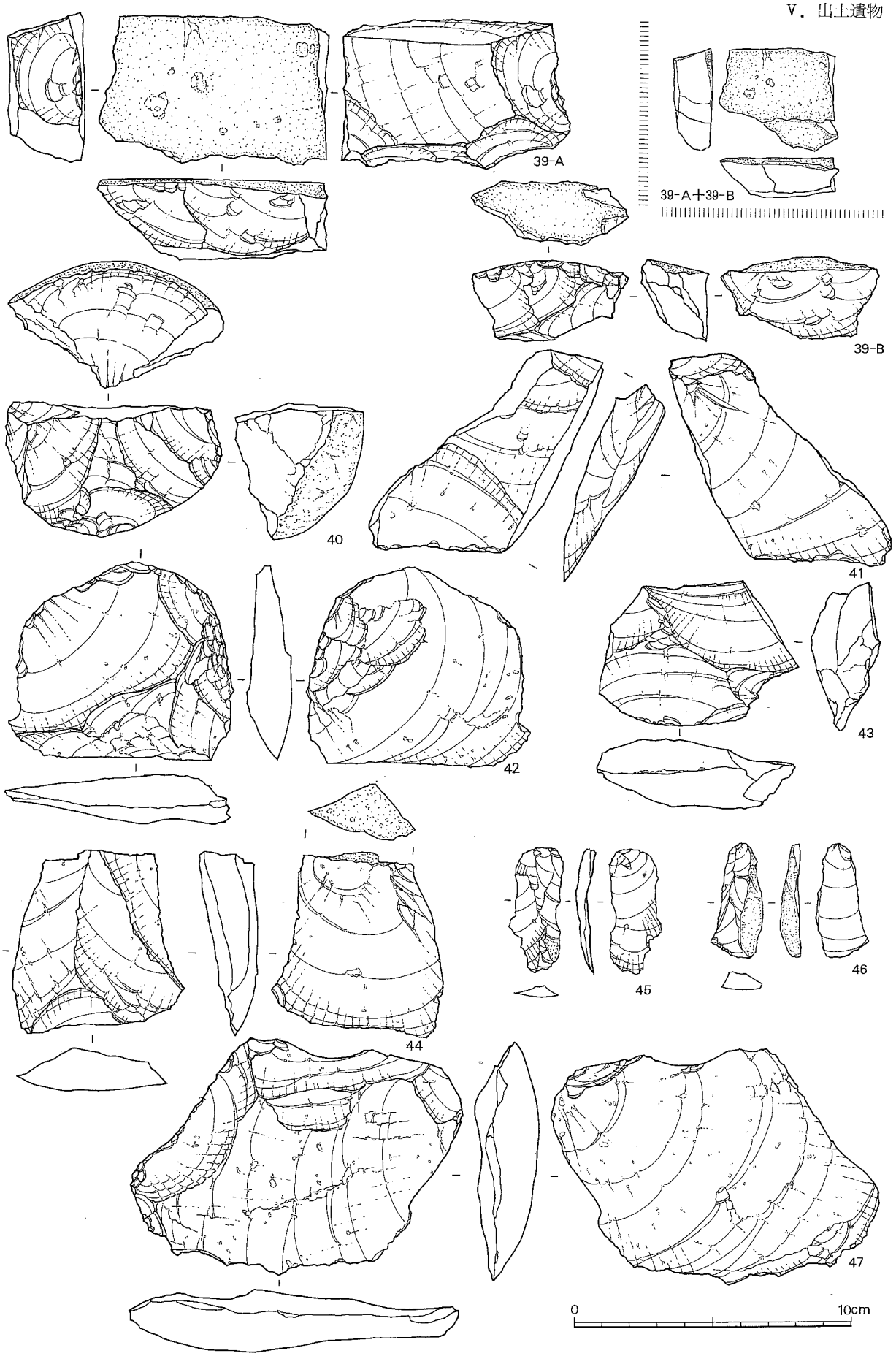
【礫器（58)】 大型で楕円形の扁平礫を素材とする。裏面は中央部に自然面を残す他は全周からの加工が施されているが，正面側の加工は下半部に集中し，上半は大きく自然面を残している。

第６層出土の石器（第20図59－70）

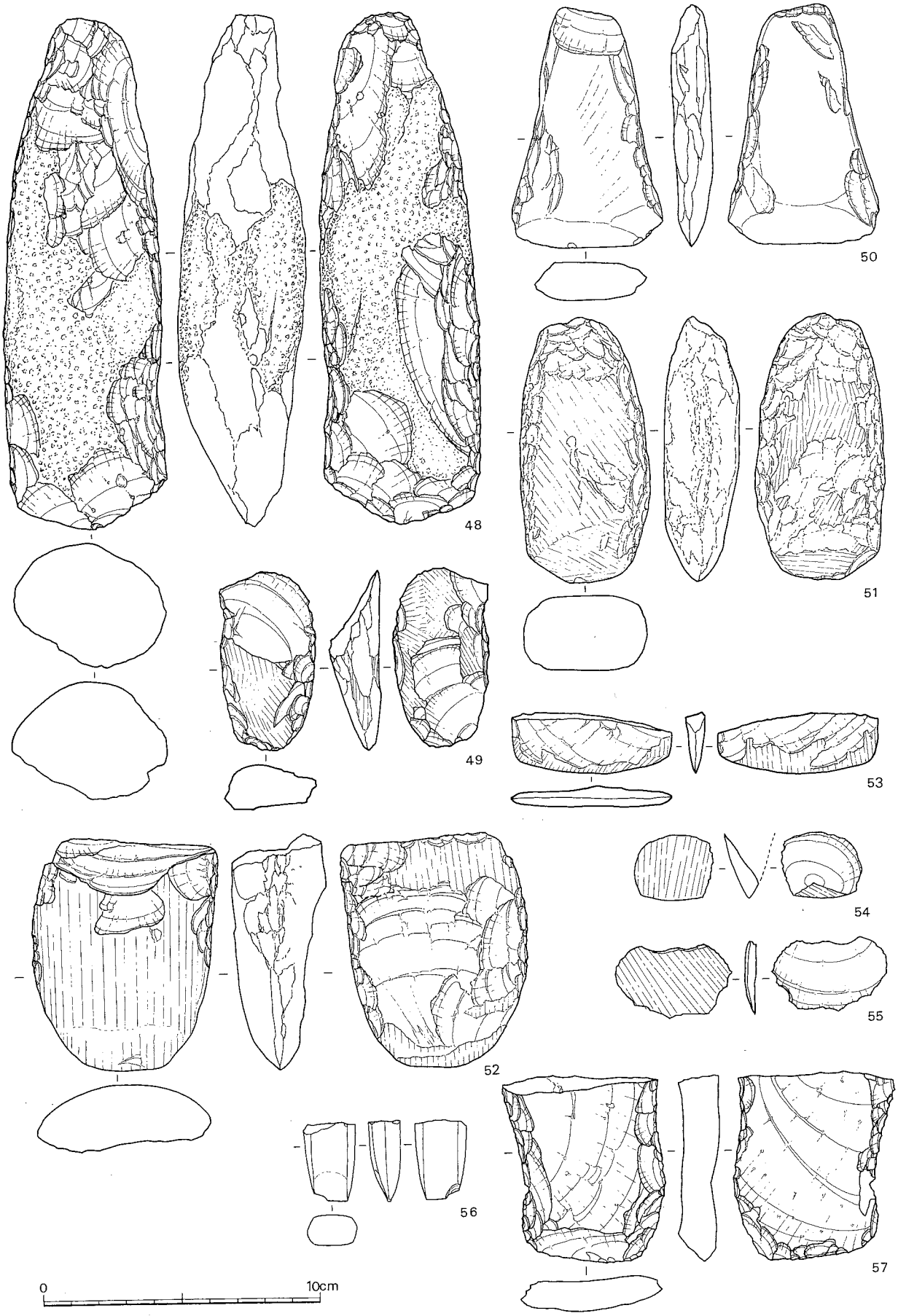
第６層と第７層は自然層としては明確に分離できるが，両層とも基本的には縄文前期前半の包含層である。出土点数が少ないため組成上の比較はできないが，石材や製作技術などに本質的な差異は認められず，同一時期の所産と解して大過ないものと思われる。

【石鏃（60)】 黒曜石製の脚部破片で，本層では唯一の出土例である。

【尖頭状石器（59・63)】 **59**は両面からの粗い二次加工を施したもので，基部破片と思われる。**63**



第17図　第５層出土の石器実測図③（Ｓ＝1/2）



第18図　第５層出土の石器実測図④（S＝1/2）

は断面形が逆三角形を呈するもので，両面からの加工により尖頭部を作出している。

【掻器・削器類（61・62・64～66）】 **61**は抉入削器で，緩く内湾する刃部を有する。**62・64**は大型で厚みのある剝片を素材とし，比較的急斜な刃部を作出するものである。いづれも削器であろう。**65**は厚みのある剝片の下端に急斜な刃部を施した掻器である。**66**は黒曜石製剝片の一部に小規模な刃部を作出したもので削器と考えられる。

【石核（67）】 サヌカイト質安山岩製の石核で，大型厚手の剝片を素材とする。

【礫器（68）】 水磨された扁平礫を素材とし片側からの加撃によって尖頭部を作出したもので，尖頭状礫器と呼ばれるものである。

【石斧（69・70）】 **69**は剝片を素材とし，軽い研磨を施した磨製石斧の基部破片である。**70**は第5層出土の**50**と同一石材と考えられるもので，サイズの差はあるものの形態的には酷似するものである。

第7層出土の石器（第21図71～74）

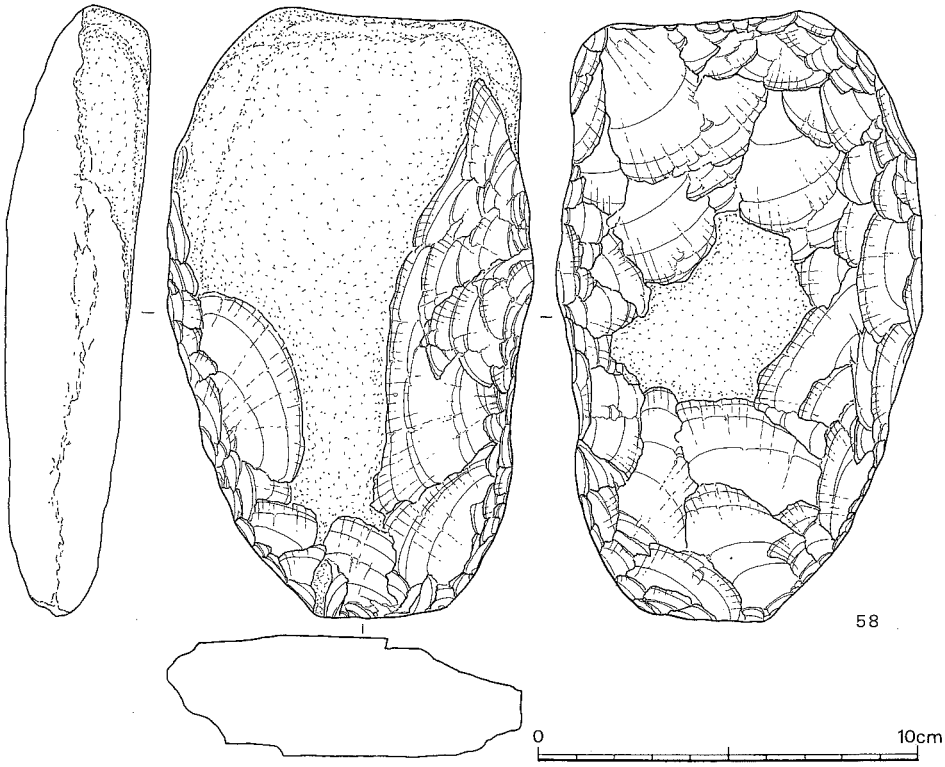
【掻器・削器類（71・72）】 いずれも玄武岩製の掻器である。素材剝片が比較的厚く，急斜な刃部を作出している。

【石核（73）】 サヌカイト質安山岩製でランダムな剝片剝離が行われている。

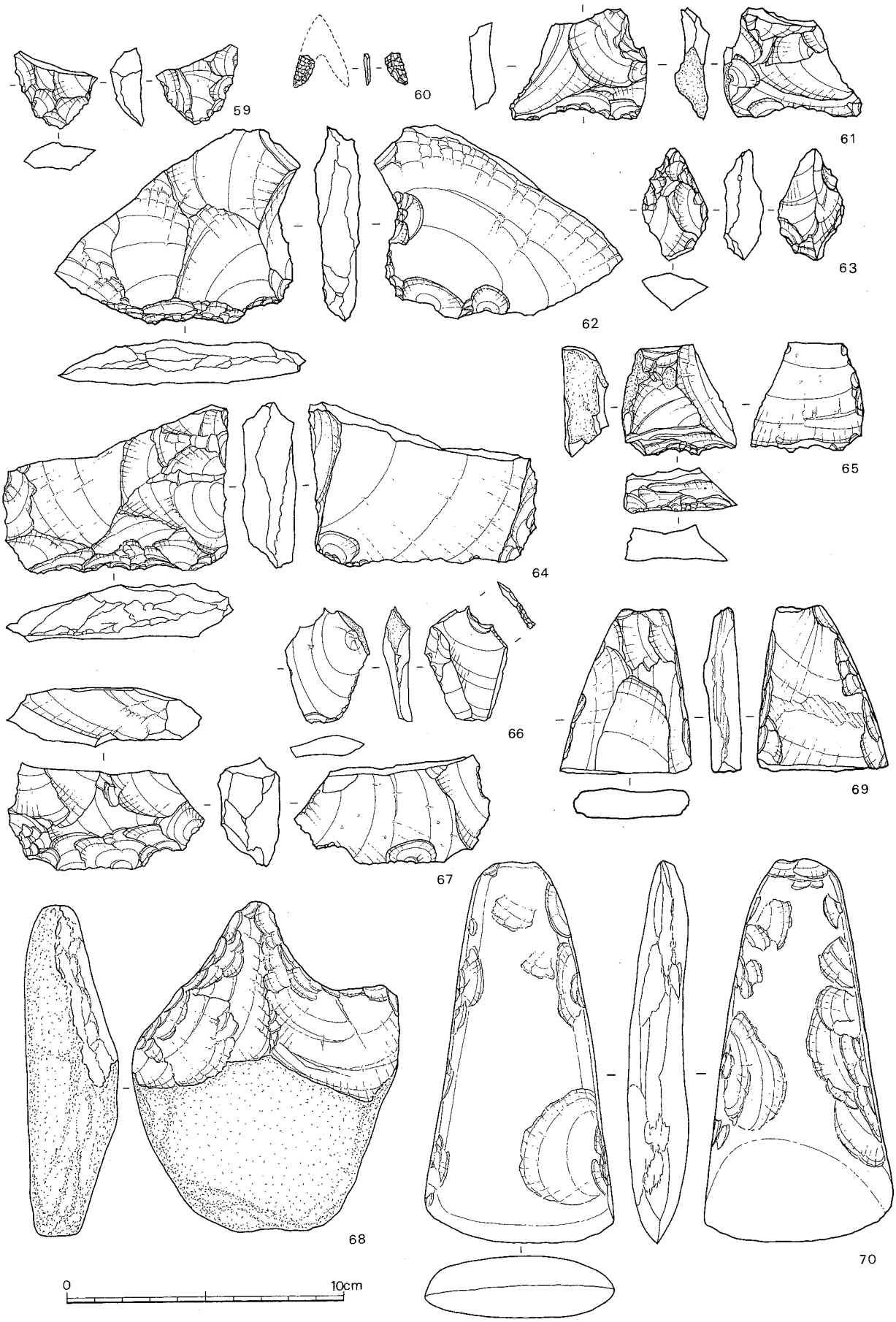
【二次加工を有する剝片（74）】 尾瘤を有する縦長剝片を素材とするもので，尾瘤部の主要剝離面側に横位の樋状剝離を施している。一般的な彫器とは趣を異にするが，頭部にもスクレイパーエッジと思われる二次加工が認められるなど，削器あるいは彫器として利用された可能性が考えられる。表面がわずかに風化しているため石質は判断しにくいが，緻密な堆積岩であろうと思われる。

排土および表面採集の資料（第22図75～79）

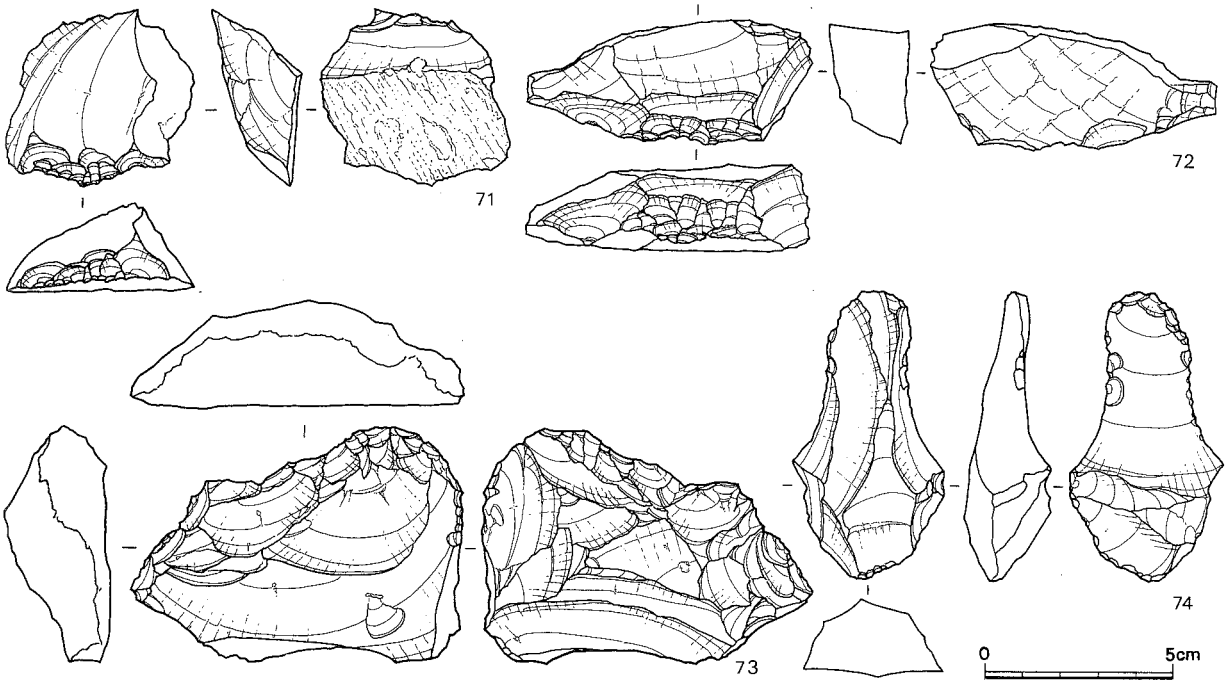
75は二次加工が基部および頭部を主に行われているもので，ほぼ左右対称の形態に仕上げられていることから石銛と思われる。**76**は黒曜石製の石鏃で縦半分を欠失しているが，加工は極めて丁寧である。**77**は石鋸である。**78**は良質な黒曜石製の縦長剝片を素材とした彫器である。主軸に並行するように樋



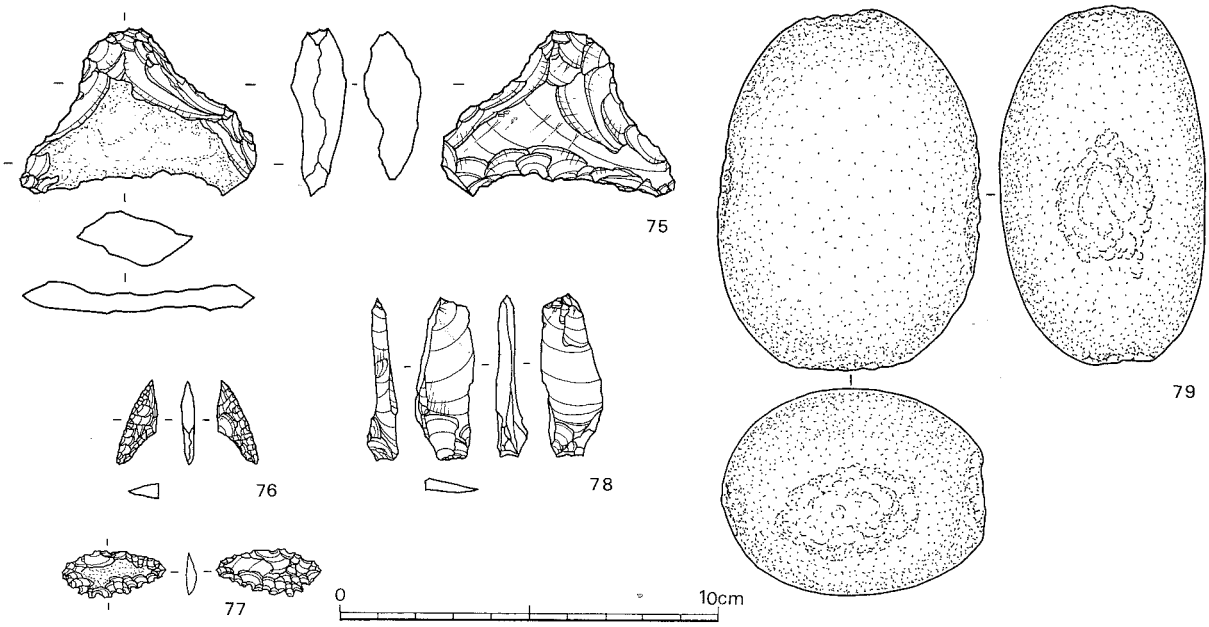
第19図 第5層出土の石器実測図⑤（S＝1/2）



第20図　第６層出土の石器実測図（S＝1/2）



第21図　第７層出土の石器実測図（Ｓ＝1/2）



第22図　排土および表面採集の石器実測図（Ｓ＝1/2）

状剥離が施されており，反対側の側縁には使用痕が観察される。**79**は敲石である。楕円形の水磨礫を素材としており長軸・短軸双方の端部に顕著なダメージが認められる。　（渡邊 康行）

参考文献

横山順・田中良之 1979 「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』№54　九州考古学会

第4表　頭ケ島白浜遺跡出土石器観察表①

図版番号	層位	器　種	石　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
第14図- 1	第4層	削　器	玄武岩	61	84	17	78	
第〃図- 2	第4層	削　器	玄武岩	98	76	19	130	鎌崎型スクレイパー
第15図- 3	第5層	石　鋸	玄武岩	116	64	28	161	
第〃図- 4	第5層	石　鋸	玄武岩	103	49	31	144	
第〃図- 5	第5層	石　鋸	黒曜石	12	23	3	1.1	
第〃図- 6	第5層	石　鋸	黒曜石	10	21	3	0.8	
第〃図- 7	第5層	石　鏃	黒曜石	42	32	11	9.5	大型・鋸頭か？
第〃図- 8	第5層	石　鏃	黒曜石	36	33	4	3.3	大型・鋸頭か？・脚部欠損面に二次加工あり
第〃図- 9	第5層	石　鏃	黒曜石	33	28	8	4.0	やや大型・鋸頭か？
第〃図-10	第5層	石　鏃	黒曜石	18	13	4	0.9	鋸歯状鏃・完形
第〃図-11	第5層	石　鏃	黒曜石	23	18	4	1.2	胴部研磨・ほぼ完形
第〃図-12	第5層	石　鏃	黒曜石	25	22	5	1.7	先端部微欠
第〃図-13	第5層	石　鏃	玄武岩	29	14	4	1.5	半欠
第〃図-14	第5層	石　鏃	黒曜石	20	13	4	0.6	両脚欠損
第〃図-15	第5層	石　鏃	黒曜石	21	17	4	0.9	異形・先端および片脚欠損
第〃図-16	第5層	石　鏃	黒曜石	22	14	3	0.8	片脚欠損
第〃図-17	第5層	石　鏃	黒曜石	22	22	4	2.1	胴部研磨・先端部欠損
第〃図-18	第5層	石　鏃	黒曜石	12	9	4	0.2	脚部片
第〃図-19	第5層	石　匙	サヌカイト質安山岩	81	39	10	27	縦型石匙
第〃図-20	第5層	石　匙	玄武岩	31	52	7	7	横型石匙
第〃図-21	第5層	削　器	玄武岩	72	92	22	142	
第〃図-22	第5層	抉入削器	玄武岩	36	38	13	10	
第〃図-23	第5層	抉入削器	黒曜石	34	38	10	9.5	
第〃図-24	第5層	削　器	玄武岩	38	63	9	17	
第〃図-25	第5層	削　器	サヌカイト質安山岩	46	69	15	33	刃部は粗鋸歯状
第16図-26	第5層	削　器	玄武岩	62	103	12	68	
第〃図-27	第5層	削　器	黒曜石	35	51	10	12	
第〃図-28	第5層	削　器	玄武岩	88	74	22	112	
第〃図-29	第5層	削　器	サヌカイト質安山岩	82	47	22	60	
第〃図-30	第5層	二次加工を有する剝片	黒曜石	37	22	9	5.3	末端部を石錐として利用か？
第〃図-31	第5層	彫　器	黒曜石	35	23	10	6.5	
第〃図-32	第5層	彫　器	黒曜石	42	19	13	8.6	
第〃図-33	第5層	彫　器	黒曜石	25	18	10	3.7	
第〃図-34	第5層	彫　器	黒曜石	49	31	9	8.5	
第〃図-35	第5層	石　核	黒曜石	29	37	29	16	原石は不定形角礫
第〃図-36	第5層	石　核	黒曜石	25	56	24	27	
第〃図-37	第5層	石　核	黒曜石	32	46	14	18	多数のパンチ痕あり
第〃図-38	第5層	石　核	玄武岩	57	98	31	161	
第17図-39A	第5層	石　核	玄武岩	55	83	29	189	素材は水磨礫から剝出された大型厚手剝片
第〃図-39B	第5層	剝　片	玄武岩	30	57	24	34	39Aの石核と剝離面接合
第〃図-40	第5層	石　核	玄武岩	48	79	47	165	素材は水磨円礫
第〃図-41	第5層	使用痕を有する剝片	玄武岩	74	85	20	88	
第〃図-42	第5層	使用痕を有する剝片	玄武岩	72	82	16	96	
第〃図-43	第5層	使用痕を有する剝片	玄武岩	53	72	25	85	
第〃図-44	第5層	使用痕を有する剝片	玄武岩	67	63	22	72	
第〃図-45	第5層	剝　片	黒曜石	46	19	7	2.9	縦長剝片
第〃図-46	第5層	使用痕を有する剝片	黒曜石	42	20	8	4.6	素材は縦長剝片
第〃図-47	第5層	使用痕を有する剝片	玄武岩	86	120	23	177	
第18図-48	第5層	磨製石斧未成品	玄武岩	185	58	48	610	乳棒状石斧の未成品
第〃図-49	第5層	磨製石斧	砂岩？	65	35	19	39	刃部破片？
第〃図-50	第5層	磨製石斧	砂岩？	88	55	15	82	完形・70の石斧と同一石材
第〃図-51	第5層	磨製石斧	蛇紋岩	97	48	28	181	胴部は敲打整形
第〃図-52	第5層	磨製石斧	流紋岩？	85	68	34	225	刃部は破損後の再生？
第〃図-53	第5層	磨製石斧	砂岩？	22	58	7	10	薄手の刃部破片
第〃図-54	第5層	磨製石斧	砂岩？	24	29	13	3.7	破損時のバルブを有する刃部破片
第〃図-55	第5層	磨製石斧	砂岩？	27	42	4	4.4	刃部破片
第〃図-56	第5層	磨製石斧	結晶片岩(緑色)	29	19	12	8.7	石ノミ
第〃図-57	第5層	打製石斧	玄武岩	68	59	16	71	
第19図-58	第5層	礫　器	安山岩？	162	98	37	850	
第20図-59	第6層	尖頭状石器	サヌカイト質安山岩	28	30	12	6.8	基部破片
第〃図-60	第6層	石　鏃	黒曜石	12	8	3	0.1	脚部破片

第5表　頭ケ島白浜遺跡出土石器観察表②

図版番号	層位	器　種	石　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
第〃図-61	第6層	抉入削器	サヌカイト質安山岩	40	50	13	19	素材は水磨円礫？
第〃図-62	第6層	削　器	玄武岩	71	90	17	99	
第〃図-63	第6層	尖頭状石器	サヌカイト質安山岩	40	24	15	10	
第〃図-64	第6層	削　器	玄武岩	60	82	20	98	
第〃図-65	第6層	掻　器	玄武岩	40	41	17	25	
第〃図-66	第6層	二次加工を有する剥片	黒曜石	42	31	10	9.0	
第〃図-67	第6層	石　核	サヌカイト質安山岩	39	72	22	59	
第〃図-68	第6層	礫　器	安山岩？	120	97	34	426	尖頭状礫器
第〃図-69	第6層	磨製石斧	砂岩？	60	47	13	45	基部破片
第〃図-70	第6層	磨製石斧	砂岩？	139	70	22	251	完形・50の石斧と同一石材
第21図-71	第7層	掻　器	玄武岩	46	51	24	37	
第〃図-72	第7層	掻　器	玄武岩	33	75	21	63	
第〃図-73	第7層	石　核	サヌカイト質安山岩	62	87	30	114	
第〃図-74	第7層	二次加工を有する剥片	砂岩？	76	41	23	46	尾瘤部に横位の樋状剥離あり。彫器か？
第〃図-75	表土層	石　銛	サヌカイト質安山岩	43	62	15	26	
第〃図-76	表　採	石　鏃	黒曜石	22	11	4	0.5	
第〃図-77	表　採	石　鋸	黒曜石	13	27	3	1.0	
第〃図-78	表　採	彫　器	黒曜石	43	16	8	3.5	
第〃図-79	表　採	敲　石	安山岩？	95	70	55	530	

3．近世遺物

(1)　陶器（第23図）

縄文土器以外の土器は，近世末から近代の陶磁器を除くと出土数が極めて少ない。弥生土器といえる土器片も数点である。6世紀代の土師器の口縁部や7世紀代の須恵器坏の口縁部片や須恵器甕の胴部片がある。また，近世墓の副葬品としては仏花瓶（第23図）がある。器高4.4cmをはかる。外面は鉄釉を施し，胎土からみて国産のものとは考えにくい(註1)。内部には鉄製品が入れられているが，銹着し製品の種類は不明である。

註1　長崎県教育庁文化課　下川達彌氏より教示をうけた。

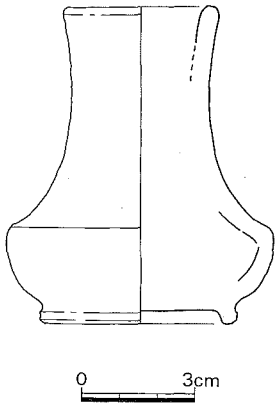
(2)　銭貨（第15図・第6表）

第4層中ならびに近世人骨にともなって45枚の銭貨が出土した。37号人骨はマ頭通を六道銭とするところから，18世紀中頃以降の埋葬と考えられる。　（古門 雅高）

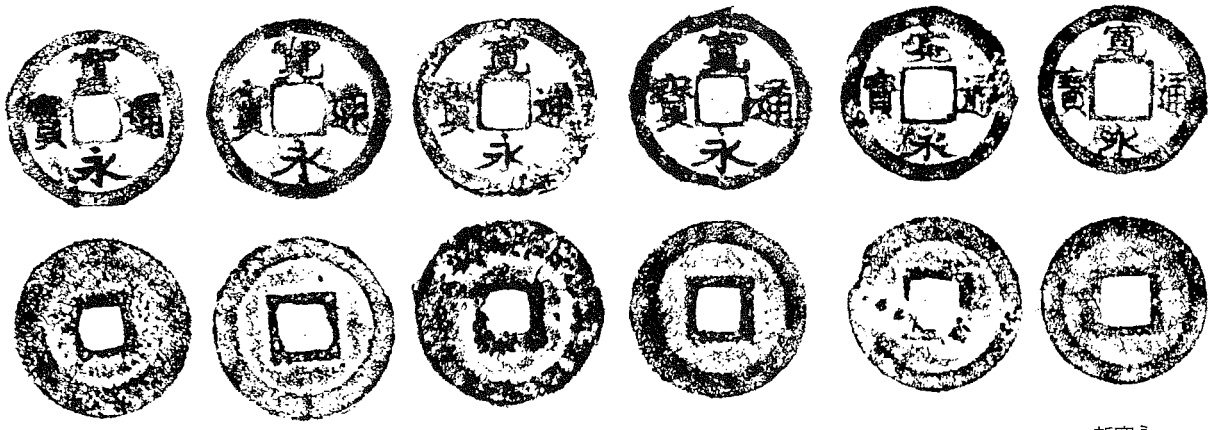
参考文献　櫻木晋一　1991　「九州地域における中・近世の銭貨流通」『九州文化史研究所紀要』第36号

第6表　出土銭貨一覧表

層位	遺　構	総数	渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	鉄銭	不明	近代銭	備　考
	37号人骨棺内	8		1	1	4		2		マ頭通2枚を含む
	39号人骨共伴	6		1	1			4		3枚銹着
	41号人骨共伴	6						6		4枚と2枚に銹着
4　層		7		4		3				背「長」1枚
5層攪乱		15				5		10		
不　明		3		1	1	1				
合　計		45		7	3	13		22		

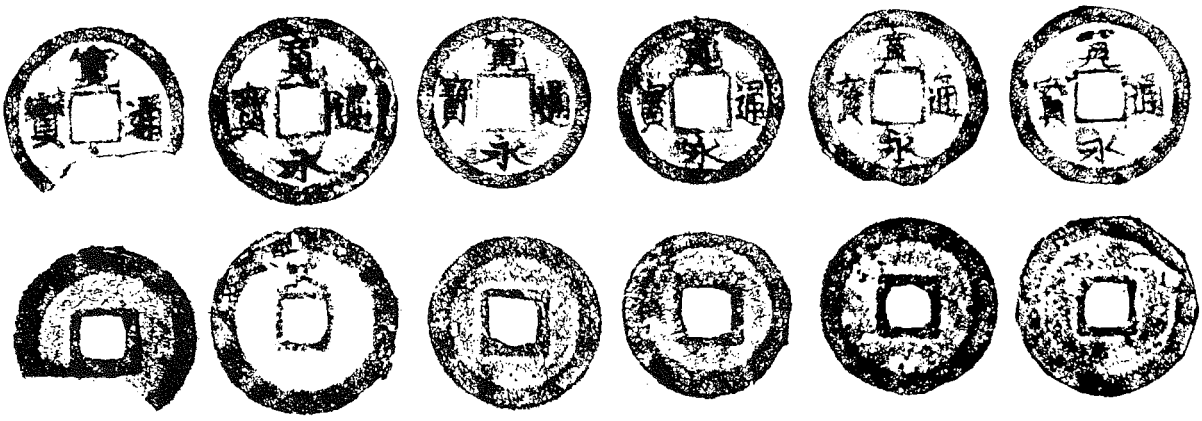


第23図　近世陶器実測図（S＝1/2）



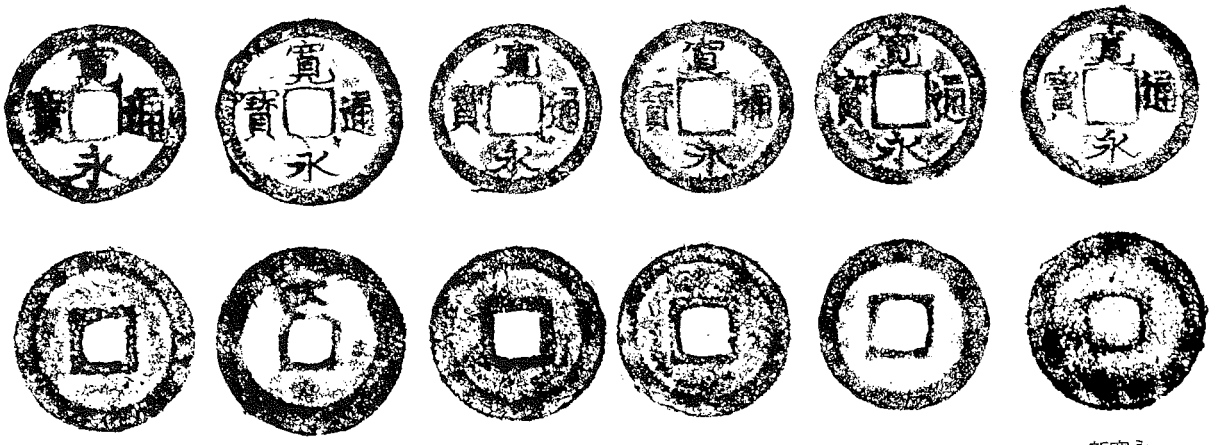
古寛永　古寛永　古寛永　古寛永　新寛永　新寛永

第 4 層



古寛永　文銭　新寛永　新寛永　新寛永（マ頭通）　新寛永（マ頭通）

37号人骨六道銭



古寛永　文銭　新寛永　新寛永　新寛永　新寛永

39号人骨六道銭　　第 5 層（攪乱）

第24図　出土銭貨拓影（S＝1/1）

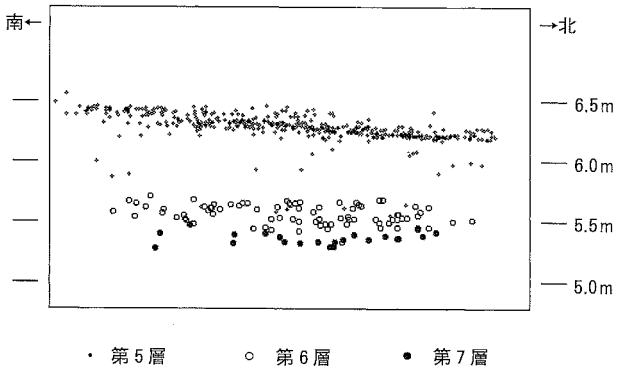
Ⅵ. 考　　察

1．遺物の遺存状況

(1)　層位と遺物の垂直分布について

調査では３か所の精査坑を設定し，そこから出土した遺物はすべて原位置を記録した上で採取した。第25図は，Ｃ－３精査坑における遺物（土器＋石器）の垂直分布を示したものである。図から明らかなように第５層～第７層の遺存状況は極めて整然としており，層位的に安定していることを示している。

以下，層位別の概要を記す。



第25図　Ｃ３精査坑出土遺物の垂直分布

第７層は地山層で粘土層である。本層は岩盤の風化によって生じたと思われ，上面から遺物が検出されたが，量的には少ない。石器は表面に粘土の付着している例が多い。伴出土器は縄文時代前期前半に位置づけられるもので，本遺跡に形成された最初の生活面である。

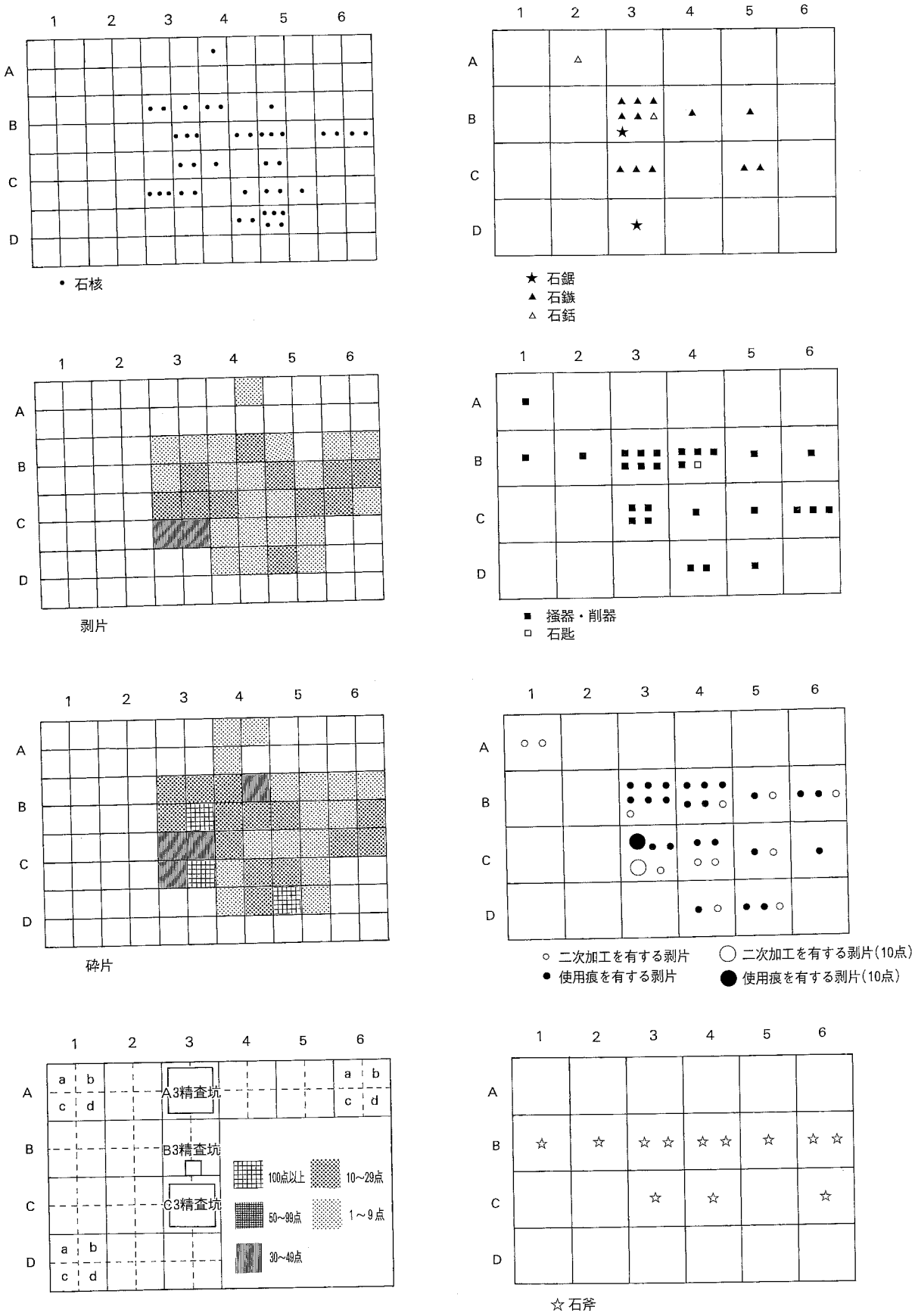
第６層は褐色を呈する粘質砂層である。砂粒を主体とするが第７層の粘土粒子を多く含むため弱粘性を有し，部分的に人頭大以上の円礫～亜角礫を含んでいる。第７層が粘土層であるのに対し，本層は砂層であることから層位的には明確に区別され，垂直分布でも明らかな深度差が認められる。しかし出土土器は第７層と同質であり，縄文時代前期前半の文化層として認定できるものである。

第５層は黄色砂層で層厚70～90cmを測る。粒度は均一で良く淘汰されており，ラミナが認められないことから風成砂と考えられる。本層は頭ヶ島白浜遺跡を代表する包含層で，遺物の出土量は他の層に比べ格段に多い。垂直分布で見ると地形に沿うように緩やかに傾斜しているが，上部では一定の深度幅の中に遺物が集中している状態が認められる。ただ層全体が厚いこともあって標高5.5m付近(第６層のレベル）からも遺物が出土しており，多少の上下動を示唆している可能性がある。土器は縄文時代前期後半～中期の資料で占められており該期の包含層と認定できるが，前期と中期とを明確に分離することはできなかった。

(2)　第５層出土石器の平面分布について

第26図は，第５層における石核・剥片・砕片および石器類の平面分布を概念的に示したものである。石核はＤ５ａ区が５点と最も多く，これに対応するように砕片102点が出土している。しかし剥片は25点と少ない。剥片はＢ３ｄ区とＣ３ｄ区に集中する傾向が見られ，砕片も100点以上出土しているが石核は比較的少ない。剥片剥離作業と二次加工の場の相違を示唆しているのであろうか。石器では石鋸・石鋸・石鏃類がＢ３区～Ｃ３区に集中し，これと重複または取り巻くように掻器・削器類が分布する。二次加工を有する剥片と使用痕を有する剥片も比較的広い範囲から出土しているが，特にＣ３区に集中していることが窺える。石斧類はＢ列・Ｃ列からの出土が見られるが，各グリッドとも１～２点に過ぎず，特定の集中は見られない。

（荒木 伸也・渡邊 康行）



第26図　第5層出土石器の器種別平面分布

2．石材について

石器群の石材としては，①黒曜石，②玄武岩，③サヌカイト質安山岩，④流紋岩，⑤安山岩（凝灰質岩？），⑥砂岩（または頁岩），⑦蛇紋岩，⑧結晶片岩，⑨鉄石英などがある（例言参照）。

【剝片石器の石材】　黒曜石・玄武岩・サヌカイト質安山岩の三者が大半を占め，これに少量の砂岩と鉄石英が加わる。黒曜石は，漆黒色を呈する良質のものから多量の夾雑物を含む粗悪なもの，暗灰色を呈するもの，灰白色を呈するものなど数種類が認められる。外見上は伊万里市腰岳や佐世保市針尾島産のものに類似するが，いずれも正確に原産地を特定することはできない。しかし頭ヶ島内には原産地がないことから，島外から搬入されたことは明らかである。器種的には石鋸・石鏃・掻器・削器・彫器・二次加工を有する剝片などに利用されており，特に石鋸・彫器に関しては全点が，石鏃についても９割以上が黒曜石製であるなど，特定器種との強い結びつきが認められる。玄武岩は量的に最も多く，白浜遺跡での主用石材ということができる。石鋸・尖頭状石器・石匙・掻器・削器・二次加工を有する剝片などでの利用が多く，石鏃は１点に留まっている。基本的には黒曜石では実現できない大きさを満たすための必要条件と，黒曜石に劣る切れ味が許容範囲内にあるという十分条件とのバランスの上に採用された石材ということができようか。原産地については特定できないが黒曜石と同様に島内には存在しない石質であり，他所から持ち込まれたものであることは明白である。近郊の産地としては小値賀島や宇久島があり，そこからの搬入が想定されよう。石核や剝片類に残された自然面は水磨されている例が多く，原石採取が海浜部で行われたことを物語っている。サヌカイト質安山岩は当初，玄武岩と区別し得なかったため集計表上では分離していない。玄武岩に比べ緻密であり班晶の少ない点が特徴的である。この石材は佐賀県有田町を中心として大略25～35km の範囲に分布するとされるが（松本ほか1992），地質図によれば宇久島の北側にも「讃岐岩質安山岩」の分布が記載されていることから，原産地としては宇久島を含む西北九州一帯が想定される。

【礫石器の石材】　礫石器では磨製石斧が玄武岩・流紋岩・蛇紋岩・砂岩（頁岩？）・結晶片岩など変化に富む反面，未成品および打製石斧では玄武岩に限られている。双角状礫器や尖頭状礫器を含む礫器類と敲石は，いずれも安山岩（凝灰質岩？）の水磨円礫を素材としている。礫石器の石材のうち，蛇紋岩と結晶片岩は五島列島には産しないもので，西彼杵半島か野母半島から搬入されたものと考えられる。流紋岩と思われるものは**図18－52**の磨製石斧が唯一で，色調は淡緑灰色を呈する。他の石質の可能性もあるが，流紋岩とすれば最も近い産地としては宇久島がある。砂岩と安山岩(凝灰質岩？)は頭ヶ島の地質を構成する岩石で，遺跡前面の海岸部では両岩の円礫を容易に入手することができる。礫器や敲石の石材は，外見が海岸部の礫に酷似しており現地で調達した石材と考えて大過ないものと思われる。砂岩もまた海岸部で多く見られる岩石である。ただ磨製石斧に採用されている砂岩とは外観が異なるようであり，原石が遺跡周辺で採取されたものかどうかは判断できない。　（渡邊 康行）

参考文献

白木敬一・松尾広昭・松本徑夫・田島俊彦 1992 「長崎県西彼杵半島の後期中新世サヌキトイド」『松本徑夫教授記念論文集』 松本徑夫教授記念事業会

3．石器組成について

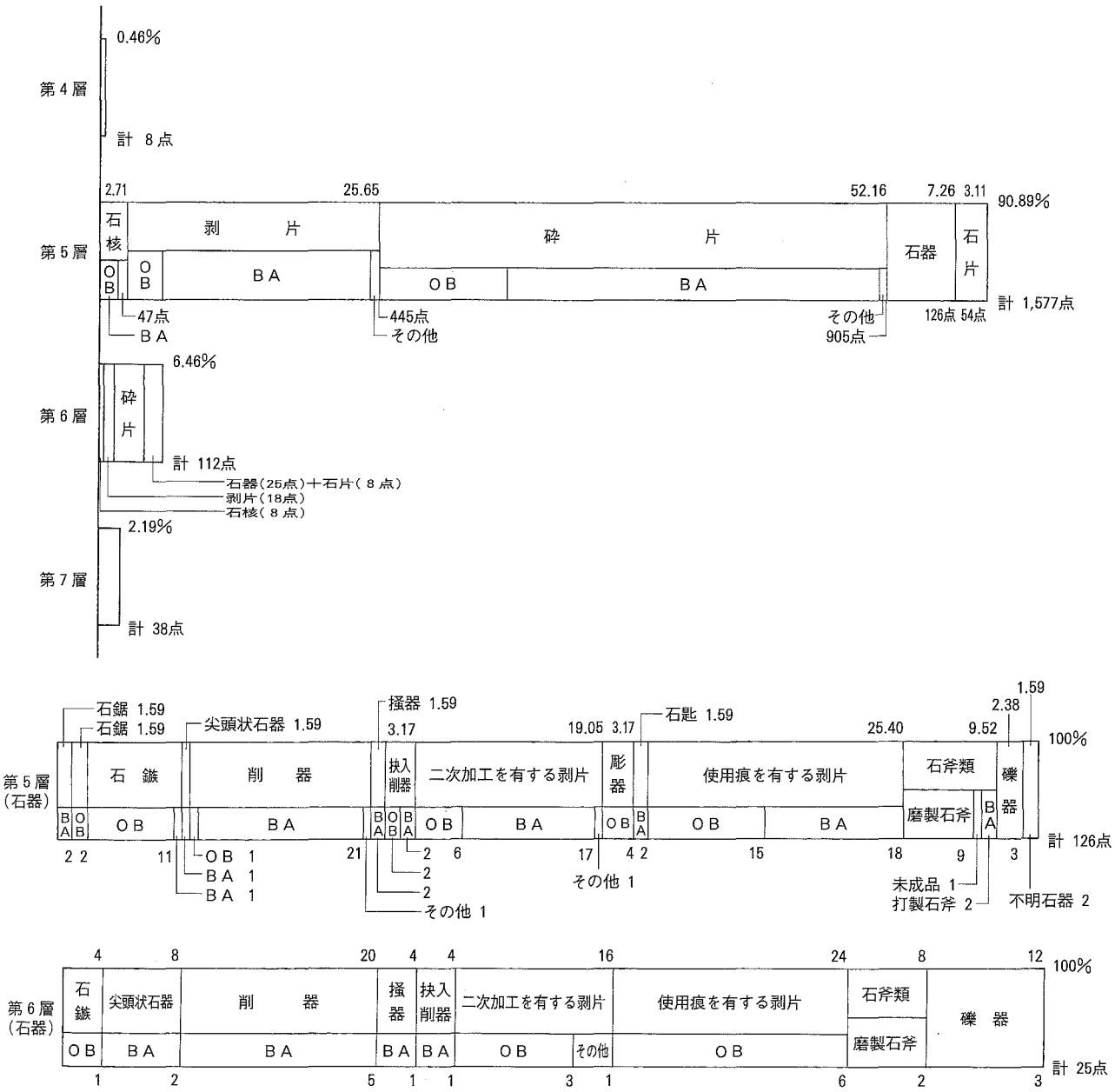
今回の調査では，縄文時代前期前半（第７層・第６層）と前期後半～中期（第５層）の文化層が検出され，多数の石器群を得ることができた。前項でも触れているように，層位は安定しており，遺存状況も良好だったことから，該期の貴重な一括資料と言えよう。ここでは最も多量の資料が出土した第５層を中心に，石器組成の詳細を述べることにしたい。**第27図**は，層位の明確な1735点を母数とし，各層ごとの出土点数から百分率を算出してグラフ化したものである。一見して明らかなように第５層からの出土が圧倒的に多く，全体の約９割に達する。このため第５層・第６層については石核・剥片・砕片・石器・石片に大別し，石材別の比率を示している。また**第27図**下段は石器総数を母数として器種別・石材別の組成を示したものである。いずれも帯グラフの上段には母数に対する百分率を，下段には実数を記している。なお層位別・器種別数量の詳細に関しては**第７表**を参照されたい。

第５層から出土した資料の大半は剥片・砕片で占められ，石器は全体の１割弱に過ぎない。器種的には使用痕を有する剥片が最も多く，掻器・削器類，二次加工を有する剥片が続く。二次加工を有する剥片に分類したものでは，**第16図30**のように石錐の可能性を持つものもあるが，大半は粗製削器とでも呼ぶべき加工を施したもので，機能的には切削を意図したものと考えられる。使用痕を有する剥片としたものは，その一部が偶然の産物である可能性はあるにせよ，基本的には切削作業に供された結果を示していると思われる。このように切削具類の多さが本層石器群の最大の特徴と言えよう。この他，切削に関連する器種としては石匙2点と彫器4点がある。狩猟具・漁撈具類は大型石銛２点と石鋸２点，石鏃12点があるが量的には貧弱で，全体に占める比率は小さい。労働用具では磨製石斧９点と礫器３点がある。磨製石斧は伐採用の大型品から小型の石ノミまでをセットで保有しており 刃部も肉厚なものや極めて薄手のものなど多くのバリエーションが見られ，多様な木材加工が考えられる。

第６，７層の器種構成は，第５層に比べると貧弱である。石鏃・尖頭状石器・掻器・削器・抉入削器・二次加工を有する剥片・磨製石斧・尖頭状礫器などがあるが，石銛や石鋸は見られない。これは当該石器の出現時期にも関わる問題だが，全体量が少ないことから断定は差し控えたい。なお尖頭状礫器に関しては，従来から縄文前期に出現することが指摘されていたが，今回の調査で確実に前期前半まで遡ることを層位的に確認することができた。

次に欠落器種について触れておきたい。ここでの石器組成は，同様の立地環境を有する他の縄文時代遺跡と比べた場合，特に礫石器類の欠落が目立つ。具体的には，礫石錘・砥石・磨石・凹石・石皿などである。もちろん調査における回収率の問題を考慮する必要はあるが，これらの石器類の大きさや外見の特徴から考えて採取エラーが生じたとは思われない。また遺跡前面の海浜部を踏査した結果でも，砂岩や安山岩（凝灰質岩？）の円礫が無数に存在するにも関わらず，石器と認定できるものは発見できなかった。以上の理由から上記の礫石器類は，本質的に欠落している可能性が高いものと思われる。なお敲石についても表面採集資料が１点あるのみで，発掘調査での出土は皆無であった。

（荒木 伸也・渡邊 康行）



第27図　頭ヶ島白浜遺跡出土石器組成グラフ　（OB:黒曜石，BA:玄武岩）

第7表　頭ヶ島白浜遺跡出土石器層位別集計表

層位＼器種	石核	剥片	砕片	石鉞	石鋸	石鏃	尖頭状石器	削器	掻器	抉入削器	二次加工を有する剥片	彫器	石匙	使用痕を有する剥片	磨製石斧	磨製石斧未成品	打製石斧	礫器	石片	不明	敲石	合計
第4層		3	4					1														8
第5層	47	445	905	2	2	12	1	23	2	4	24	4	2	33	9	1	2	3	54	2		1577
第6層	8	18	53			1	2	5	1	1	4			6	2			3	8			112
第7層	1	14	16					1	2		1			1					2			38
小計	56	480	978	2	2	13	3	30	5	5	29	4	2	40	11	1	2	6	64	2		1735
不明				2	1	2		1				1									1	8
全計	56	480	978	4	3	15	3	31	5	5	29	5	2	40	11	1	2	6	64	2	1	1743

4．頭ヶ島白浜遺跡における活動の推定

西北九州の縄文時代遺跡については木村幾多郎による類型化がある（1987・1995他）。そこでは貝塚を伴う遺跡を中心として石器・骨角器および自然遺物から推定される生態系を考慮しつつ四つの類型を設定しており，奥湾立地型をA類型，内湾立地型をB・C類型とし，「背後に砂（泥）性の内湾はもたず，外海に直接，又は外海に開く狭い小湾に面する」外洋性遺跡群をD類型に分類している。D類型に属する遺跡の「漁具は石銛（橘分類A・B類），石鋸，大型剝片石鏃，大型縦長剝片，サヌカイト剝片スクレーパー，鎌崎型スクレーパー，大型結合釣針，ヤス・開窩式回転銛（？）などが出土し，海棲動物もイルカ・クジラ類，アシカや，サメ類，カジキ類等の大型魚，カンダイ・マハタ・イシダイ等が出土し，対馬暖流にのる回遊魚が多い」とされる。

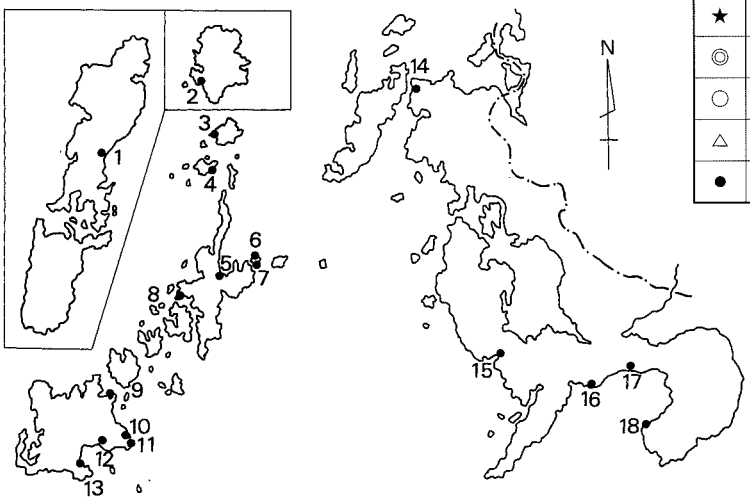
本遺跡は貝塚を伴わないため自然遺物や骨角器での比較はできないが，石器組成は強い共通性を示しており，立地環境の点からもD類型に属すると見なすことができる。この前提に基づいて，D類型遺跡群の調査成果から導き出された一般的特徴を演繹的に援用しつつ，周辺諸遺跡との比較から相異と相似を抽出する作業を進めていけば，頭ヶ島白浜遺跡の性格を推定することも可能であろうと思われる。こうした観点から本稿では，立地環境と石器組成を中心に，頭ヶ島白浜遺跡の在り方を考えてみたい。

長崎県の島嶼・海岸部には外洋性遺跡が多く，豊富な調査例がある。前掲論文(1987)ではD類型に属する遺跡として，福岡県沖の島，長崎県志多留，佐賀，鎌崎，宮下，白浜，深堀，つぐめのはな，殿崎，脇岬，熊本県沖の原，韓国の上老大島貝塚，東三洞貝塚を揚げてあり，このほか県内では中島(福江市)，福江堂崎(福江市)，小浦(上五島町)，西ノ股(新魚目町)，浜泊(有川町)，築崎(飯盛町)，国崎(南串山町)，出津遺跡(外海町)などがある。上記遺跡の石器組成を見ると確かに漁撈具系遺物の出土が目立つが，なかには名切遺跡(郷ノ浦町)や中島遺跡のように堅果類貯蔵施設(ドングリピット)の検出された例があり，植物性資源の利用も活発であったことを物語っている。また佐賀貝塚(峰町)ではキバノロの犬歯を素材にした垂飾品や貝輪が出土しており，西ノ股遺跡では瑪瑙製大珠が，宮下貝塚でもイノシシ形土偶が採集されるなど，生産活動に直結しない遺物を伴う遺跡も少なくない。

このように外洋に面して立地する遺跡といえども保有する装備は漁撈一辺倒ではなく，多岐に亘ることが窺える。外洋性遺跡群における諸装備の有無は前掲の論考(木村1987)に一覧表で示されているが，その後の調査によって新たな資料も蓄積されつつある。そうした事情を踏まえて本稿では，五島列島を中心とする長崎県内の外洋性遺跡から得られた新資料を追加し，遺跡ごとの時期，遺構の有無，各種装備の相対的な出土量を一覧表として示している**(第8表)**。表の作成に際しては各遺跡の報告書を基本資料としたが，出土層位や点数が明記されていないことも多く，その場合には文章記載や図版掲示の比重に従って評価を与えている。このため正確な数値に基づいているとは言い難く，所属時期や器種の認定については考慮すべき問題も少なくない。また石器組成は調査面積や対象地点などにも左右されるため，必ずしも一元的に比較できない部分を含んでいることは否定できないが，大勢を知る上での参考にはなり得るものと考えている。

第8表　長崎県における主要外洋遺跡の遺構・装備一覧

番号	遺跡名	所在地	時期 早期	前期	中期	後期	晩期	遺構 貝層	住居跡	埋葬	貯蔵穴	石鋲	石鋸	打製石鏃	剝片鏃	切削具	石匙	彫器	石錐	打製石斧	磨製石斧	砥石	礫器	礫石錘	凹石	磨石	石皿	敲石	身装品
14	つぐめのはな	田平町	△	◎	●							★	●	◎		★	○		△		○		●	△	●	△	△	○	
9	福江堂崎	福江市		◎	△			前		前		△	●	●		○	●			△	◎		◎	○	△	△	△	△	●
6	頭ケ島白浜	有川町		◎	○	△	△					△	△	○		◎	●	△	●	●	○		△					●	
7	頭ケ島浜泊	有川町		○	○		●					●	●	△		◎							○						
10	江湖	福江市		★				前		前		○		△		★	△	△	△	●	○	●	○	★	●		●	△	●
16	築崎	飯盛町		◎	△	△	○					○		○		◎	△	△	△	○	○	△		○	◎	◎			
2	名切	郷ノ浦町		△	◎	△	○				中	○	●	◎	○	◎	●	○	△	●	○		●	●	○	○	○	●	●
3	宮ノ首	宇久町		○	△	△	△						●	△	●	○					△	●	△	△				●	
5	西ノ股	新魚目町		○	△	△	△					△		△		◎	●		△	○	△		△	△		△		△	●
4	殿崎(2次)	小値賀町			◎	△	●					△	△	◎	○	△		●	●	△	○	△	○	○		○		○	●
18	国崎	南串山町			○	○	△	中		中		△	●	△	●	○					○	◎	△	△	●	○		●	●
17	有喜	諫早市			○	○		後		?		●	●	△	●	◎			△		○	○	○	△	●	○	●	△	△
13	宮下	富江町		△	○	◎		後		後		○	●	○	○	◎		●		○	△		△	○	△	△		△	○
15	出津	外海町		△	△	◎	△	後		?				△	●	◎		△	●	△	◎		○	○	●	○			○
11	白浜	福江市		●	△	◎	◎	晩		晩		○	△	◎	○	◎	△		△	△	○		○	○		△		△	○
12	中島	福江市		●	△	◎	△	後			後	●	●	△		◎				○	◎	△	○	△	△	△	●	◎	●
1	佐賀	峰町			△	◎		後	後	後		△	●	△	◎	○		△		★	★	◎		△	△	△	△	△	◎
4	殿崎(1次)	小値賀町			△	◎							●	△	○	●		△		△	△		△	△					
8	小浦	上五島町				△								○		◎			△	●			●						



記号	出土量	得点
★	極多	50
◎	多	40
○	中	30
△	少	20
●	1～2	10

器種別得点表

器種	合計	遺跡数	平均
切削具	690	19	36.3
磨石斧	520	17	30.6
打石鏃	490	19	25.8
礫器	400	17	23.5
礫石錘	400	16	25.0
石鋲	350	15	23.3
磨石	330	13	25.4
打石斧	310	14	22.1
敲石	280	14	20.0
剝片鏃	230	10	23.0
身装品	220	12	18.3
凹石	200	11	18.2
石錐	190	11	17.3
砥石	190	8	23.8
石鋸	170	14	12.1
彫器	170	9	18.9
石匙	130	8	16.3
石皿	120	7	17.1

【評　価】 評価は，微量・少・中・多・極多の五段階に区分して行った。基準となる母数は縄文土器・剝片石器・礫石器の三種で，それぞれの中での相対的評価を与えている。また各評価に対して微量（10）～極多（50）まで10点刻みの得点を与え，便宜的な数値尺度とした。

【配　列】 遺跡は主体となる時期を基準として古→新の順に配列したが，番号は所在地照合の都合上，対馬→壱岐→五島→県北→県南の順とした。

【時　期】 時期については，各時期の土器の出土量に基づいて五段階に評価した。

【遺　構】 遺構は，貝層・住居跡・埋葬遺構・貯蔵穴に限り，炉址や土坑，溝などは除外した。また縄文時代以外の遺構も対象外とした。

【器　種】
- 鋲先状石器・尖頭状石器・鋸歯鋲先・石槍などは石鋲に含めた。
- 石鋸は鋸歯状加工を有するものに限り，サイドブレイドは除外した。
- 切削具には，掻器・削器類のほか，二次加工を有する剝片，二次加工石器，使用痕を有する剝片を含めた。
- 磨製石斧未成品は磨製石斧に含めた。
- 磨石，凹石，敲石，石皿の区別については報告書の記載に従った。
- 身装品には垂飾品，貝輪などのほか，土偶・土製品類も含めた。
- つまみ形石器や十字形石器など，用途不明石器については原則として対象外とした。

Ⅵ. 考　察

表からは幾つかの事実を指摘することができるが，ここでは詳細に触れず，各器種を以下のように大別して概観したい。なお骨角貝器類については除外し，石器の機能・用途に関しては一般的な解釈[註-1]に基づいている。

① 石銛・石鋸・石鏃・大型削器に代表される動物性資源の採捕・解体処理具

② 磨製石斧・打製石斧などの労働用具

③ 石錐・彫器・掻器・削器・砥石などの加工用具

④ 磨石・凹石・石皿などの植物性資源処理具

⑤ 身装品や土偶などの非生産系遺物

以上の分類のうち，①は石銛や石鋸などを保有している点に外洋性遺跡としての特徴を見い出すことができる。しかし表から明らかなように量的な主体を占めるのは打製石鏃であり，石銛は従的な立場に置かれている。また石鋸については大半の遺跡が1～2点の出土量であって最大でも十数点に留まっていることから，必ずしも漁撈活動の主役ではなかった可能性が考えられる。

②と③については器種ごとに差異があるものの総じて多くの遺跡から出土例がある。むろんこれらの器種は縄文時代全般の普遍的な装備であって，必ずしも外洋性遺跡に固有のものではない。ただ彫器に関しては，石鋸やサイドブレイドとの関連において外洋性遺跡を特徴づける要素と言えよう。

④も②・③と同様に縄文時代に通有な石器である。これは外洋性遺跡にあっても例外ではなく，多くの遺跡から出土していることが鈍重ながら重要な装備であったことを示している。

⑤は比較的多くの例がある。縄文時代後期に急増する貝塚形成と密接な関係があるものと思われるが，前期を主体とする遺跡からの発見例もあり，普遍的な装備であった可能性が考えられる。

さて一覧表では遺跡ごとに各器種の相対的な出土量を評価し，それに得点を与えることで便宜上の数値尺度としている。この合計得点の順位は外洋性遺跡群における特定器種の必要度を知る手がかりになるものと思われる。ここでの最高値は切削具であり[註-2]，以下，磨製石斧，打製石鏃，礫器，礫石錘，石銛，磨石，剝片鏃，身装品などが続く。逆に石鋸は得点が低く，遺跡数で除算した平均値では最下位に位置づけられる。次に，こうした器種構成の在り方を一般的な外洋性遺跡の主要装備と仮定した上で，頭ヶ島白浜遺跡との比較を見てみたい。

別項でも述べたように本遺跡の石器組成は，鎌崎型スクレイパーを含む大型削器類や掻器類，及びそれらの素材となる玄武岩製大型剝片が主体を占めている。採捕具としては石銛・石鋸・打製石鏃・尖頭状石器があるが，量的には少なく最多の石鏃でも15点，石銛・石鋸は3～4点に過ぎない。礫石器では多様な石材を用いた磨製石斧が最も多く，礫器と敲石を伴うが，礫石錘・砥石・凹石・磨石・石皿類は皆無である。また身装品も出土していない。先の大別に従えば保有器種が①・②・③に限定され④・⑤を欠いた組成となっている。これは多くの外洋性遺跡が少なくとも①～④あるいは⑤までを保有しているのに対して本遺跡の大きな特徴になっており，遺跡の性格を推定するに当たって極めて示唆的である。

「縄文時代の生業が，植物および動物性食料の多種多様な利用によって特色づけられ，決して数少ない限定された種類に偏するものではなかった」と小林達雄(1983)が指摘するように，縄文時代における食料獲得が多岐に亘るものであったことは多くの調査成果から実証されている。この点でも磨石や石皿類など植物性資源の処理具と考えられる器種を全く保有していない頭ヶ島白浜遺跡が定着性の強い集落的様相を示しているとは考えにくい。それは遺跡の立地環境を見た場合，さらに明瞭になる。

遺跡が所在する頭ヶ島は東西約2.2km，南北約1.5kmで，最高所の標高は111.4mを測る。周囲はほとんどが岩礁となっており，平坦部は南側の田尻地区と孕瀬戸に面した浜泊地区，そして北側の白浜地区の三か所のみである。現在は白浜と田尻の二か所に集落を構成しているが，歴史は浅く，安政六年(1859)に鯛ノ浦のキリシタンが移住したのが始まりとされる(註-3)。つまり考古学的に確認されるまでは無人島と思われていたわけであり，生活を営むための条件には恵まれなかったことを示している。遺跡は海浜部に形成された砂丘に営まれているが，北側に向かって傾斜しているうえに風当たりが強く，とても居住適地と呼べるような環境ではない。調査では縄文時代の遺物を多数出土したが，住居跡や埋葬施設など明確な遺構は全く検出されず，かろうじて火熱の痕跡を有する石器から焚き火の存在を知る程度である。

以上の諸点を総合的に考慮すれば，本遺跡は一時的な活動を目的とした場であった可能性が強く，それが漁撈活動であったろうことは石器組成の主体から疑う余地がない。採捕の対象や方法については，動物遺存体が出土していないために直接的な証拠として明示できないが，石器組成における特定器種の欠落や寡少性を手がかりにして多少の推測を述べてみたい。

ここでの石器組成が，海洋性資源の採捕・解体具を主体とすることは前述の通りであるが，注目すべき欠落器種が二つある。それは石錘と砥石である。石錘には各種のものがあり，礫の両端を打ち欠いただけの礫石錘が必ずしも漁網錘とは認められないとする見解(渡辺1973)もある。しかし西北九州の海岸部から出土する礫石錘に関しては，遺跡の立地や漁撈具系遺物とセットで発見される場合が多いことから，漁撈活動への関与を想定しても大過ないものと思われる(註-4)。もちろん礫石錘には重量が数十g程度のものから2kgを超えるような超大型石錘まで多様なバリエーションがあり，漁網錘のみならず舟の碇石としての用途も考えられている(註-5)。いずれにせよ外洋性遺跡にあって礫石錘が重要な装備の一員であったことは一覧表からも明らかであるが，素材を容易に入手できる環境にありながら全く発見されない事実は，ここでの活動が石錘を必要としないものであったことを示していると言えよう。

一方，砥石は縄文時代における基本的工具であり，磨製石斧や骨角器，身装品の製作に必須の器種である。本遺跡では砥石を伴わない状態で磨製石斧が出土しているが，これは磨製石斧が「製品」として広く流通していたとする解釈(註-6)によって矛盾なく理解できる。骨角器に関してはどうであろうか。もちろん砥石の欠落のみから骨角器の存否を論じることはできない。本遺跡の場合，前述の理由によって想定される場の特殊性を考慮すれば磨製石斧と同様に製品として持ち込まれた可能性も考えられるからである。しかし骨角製の釣針や離頭銛などの使用には対象物までの長さ以上の糸や索縄を必要とする。それが消耗性の高いものである以上，補修は不可欠であり，糸や索縄の製作には磨石や台石

などが必要になるのではないかと思われる。こうした推測が妥当であれば，石錘の欠落とともに網漁や骨角製離頭銛・釣具類を用いた採捕活動の可能性については否定的にならざるを得ず，少なくとも積極的な活動の証拠を見い出すことはできない。

それでは頭ヶ島白浜遺跡において，具体的にどのような活動が展開されたのであろうか。石器群の中で採捕活動に直接関与すると考えられる器種としては石銛・石鋸・石鏃・尖頭状石器がある。石銛と石鋸は海岸部立地の遺跡に偏在して発見され，貝塚を伴う遺跡からの出土例も少なくないことから漁撈具としての認識が定着しており[註-7]，採捕対象として冒頭で引用したようにクジラ・イルカ類，サメ類，カジキ等の海棲哺乳類や大型魚が想定されている。しかし石銛と石鋸(組み合せ銛)では多くの相違点があり，同一視することはできないとする見解(山崎1988，田島1995)もある。山崎純男は両者の形態差や石材差，時間的先後関係に加えて「組み合せ銛の分布は西北九州全般に広まるものの集中するのは五島列島をはじめとする島嶼部である。これに対して石銛はその主体が九州本土の沿岸部，とくに遺跡前面が瀬戸になった部分に多く，一部は南九州まで延びていてその違いを指摘できる」としたうえで「組み合せ銛の分布地域ではサメ類・サメ歯の製品が多く出土する傾向にあり，石銛の分布地域ではイルカ・アシカなどの海獣が目立つ」と述べており，「石銛がイルカ・クジラ・アシカなどの海獣を対象とし，石鋸に代表される組み合せ銛がサメ類・大型魚類を対象としたもの」とする解釈を示している。これは遺跡の立地条件や動物遺存体との相関から導き出されている点で，高く評価できる。なお石銛と石鋸の分布差の認識に関しては個人的に若干の異議があるが，ここでは触れない。

石鏃については特定の採捕対象と関連づけて論じられることが少ない。縄文時代の代表的な狩猟具であり，広範な対象を想定しうるからであろうが，外洋性遺跡での出土例については大型品の一部が組み合せ銛のヘッドとして用いられた可能性があり，その限りでは石鋸と同等に考えることができる。しかし一般に石鋸の出土量が少なく，むしろ石鋸に数倍する石鏃が出土することは，石鏃が単体で矢柄に装着され弓矢として使用された可能性を示していると思われる。外洋性遺跡から出土する動物遺体にはシカやイノシシなども見られることから，陸獣・海獣・鳥類を問わず広く動物性資源の獲得に利用されたと考えるのが妥当であろう。なお弓矢を用いた漁撈活動について直良信夫(1973)は，イルカ類の「頭蓋骨に石鏃の先端が折れ込んだものや，前肢に漁撈具が突きささったままの状態で遺跡にのこされていた例がしられている。イルカは群をなして移動する場合，瞬間的に，空中に飛び上がる習性をもっている。そういうときに，短弓のようなものでねらいうちをしていたことを，これらの資料からくみとることができる」と述べており，弓矢も重要な漁撈具であったことを示唆している。

以上，先学の研究を引用しつつ述べてきたように，西北九州の外洋性遺跡においては石銛・石鋸・石鏃・尖頭状石器などが海棲哺乳類や大型魚類の採捕に重要な役割を演じていたことは容易に想像できる。もちろん骨角製刺突具も用いられたであろうが，それは主に縄文後期以降の貝塚急増と連動する現象のようである。頭ヶ島白浜のように縄文前期～中期に最盛期を迎え，後期初頭には急速に衰退する遺跡では後期中葉を主体とする遺跡に比べて貝塚を伴う例は格段に少なく，貝塚を形成する遺跡にあっても福江堂崎遺跡や江湖貝塚のように骨角器類は皆無か極めて貧弱であることが多い。骨角製

釣具も佐賀県唐津市菜畑遺跡から縄文前期に属する西北九州型結合釣針が確認されているとはいえ，基本的に九州地方で単式釣針が出現するのは縄文後期以降のこととされる(前川1969a)。こうした事情に加えて，前述したような石錘や砥石，磨石類の欠落を考慮すれば，頭ヶ島白浜遺跡において釣漁や網漁あるいは骨角製刺突具を多用した漁撈活動が展開された可能性は低く，よって対象は大形魚類よりも海棲哺乳類(イルカ・クジラ類)を主体とするものであったと考えるのが妥当であろうと思われる。

イルカ・クジラ類は全国的にも多くの出土例があり，縄文時代における重要な動物性資源であったことが知られている。石川県真脇遺跡では縄文前期～中期の包含層から285個体分のイルカ・クジラ類が出土しており，主体を占めるカマイルカ(約60%)，マイルカ(30数%)，バンドウイルカ(4%前後)のほか，オキゴンドウ，コビレゴンドウ，ハナゴンドウ，アカボウクジラ科やナガスクジラ科の一種が微量認められている。採捕具としては多量の石槍(275点)・石鏃が出土しており，礫石錘も200点と多いことから定置的な網の存在も想定され，積極的かつ大規模な捕獲活動が展開されたものと考えられている(平口1986・1992)。

縄文時代にイルカ漁の行われていたことは真脇遺跡の例から明らかだが，西北九州の外洋性遺跡における漁撈活動が，真脇遺跡と同質・同規模であったとは考えにくい。石鏃はともかく石銛や石鋸の量が決して多くはないからである。発掘調査で60点以上，表面採集資料を含めると210点にも達する膨大な石銛を出土した田平町つぐめのはな遺跡や多量の石鋸が採集されている富江町女亀遺跡など特殊な例を除けば，大半の遺跡での出土量は数点～十数点に留まっている。これは頭ヶ島白浜遺跡でも例外ではなく採捕具よりもむしろ削器や大型剝片など解体処理具と思われる器種の多さが目立っている。採捕具が飛道具である以上，解体処理具とは本質的な機能差や消耗差があり遺跡における遺存率にも影響を及ぼしている可能性はあるが，多少の変動を考慮しても量的な寡少性は否定できない。この点については少なくとも二通りの解釈が可能である。一つは採捕活動が不活発であった可能性であり，他方は石銛・石鋸・石鏃など以外に採捕用具または手段が存在した可能性である。前者は採捕・解体処理が一連の作業であることから考えて，その可能性は低い。むしろ第二の可能性，すなわち通常の遺跡では腐朽してしまうような木製の採捕具を想定する必要もあるのではないかと思われる。本遺跡の石器組成では採捕具や解体処理具に次いで磨製石斧が主要な位置を占めており，これは前掲の一覧表からも明らかなように，外洋性遺跡における必要度の高い器種である。一般に磨製石斧は木製品の素材獲得(伐採)や加工に利用されたと考えられるが，組成中の相対的な多量性はそれを必要とする活動が活発であったと解される。ここでは大型・中型・小型(石ノミ)のセットを保有していることや立地環境の点などから，従来指摘されてきたような丸木舟の建造や補修などの作業(前川1969b)を想定することができるが，それ以外にも棍棒のような木製品の製作に用いられた可能性を考えておきたい。

従来，イルカ・クジラ類の採捕については大別して積極的・能動的な捕鯨活動が行われたとする見解(森1994)と，寄り鯨あるいは流れ鯨(註-8)，迷い鯨と呼ばれるものを対象とした消極的・受動的な獲得レベルを越えるものではないとする見解(立平1995他)がある。大型クジラを対象とした捕鯨活動に関し

ては否定的な見解が支配的であるが，イルカのような小型海獣については真脇遺跡を好例として積極的な採捕活動を想定されることが少なくない。(註−9) しかしイルカ漁といえども多量の採捕具を必要とするのは明らかであり，定置網や丸木舟による追い込みを実現するためには大規模な労働編成と装備に加えて高度な技術も要求されるはずである。そうした協業体制の存在を示唆するような遺跡は別として，頭ヶ島白浜のように石鏃や石銛，石鋸などの絶対数が少ない遺跡における漁撈活動は，寄り鯨や流れ鯨といった偶然の幸運に期待するものであった可能性が高く，イルカの採捕にしても積極的・計画的な漁ではなく，迷い込みや座礁の機会を利用したものではないかと思われる。もちろん石銛・石鋸・石鏃を利用した刺突漁や弓射漁も考えられるが，それは補助的手段のレベルを超えるものではなく，基本的には木製の棍棒や着柄された石斧など，鈍器による撲殺が主体だったのではないかと思われる。

先に引用した山崎論文には，石銛を出土する遺跡の特徴として前面が瀬戸になっている，との指摘があり，これは頭ヶ島白浜遺跡にも当てはまる。潮流の急な瀬戸に面するという立地条件がイルカ・クジラ類の習性とどのように関係するかについては動物生態学や関連諸科学からのアプローチが不可欠だが，おそらくは密接な関わりがあるのであろう。そして縄文時代の人々は経験則によってそれを知り，海獣類の採捕に好適な地として頭ヶ島白浜を選び，諸活動を展開したものと思われる。それは縄文前期初頭から開始され，後期初頭に至るまでの間，季節的あるいは定期的に繰り返されたものと推測される。土器の項でも述べているように，遺跡の継続期間が比較的長期に亘るにも関わらず土器の総量が少なく，型式のバリエーションが豊富な割に個々の型式に属する個体数が少ないのは，こうした事情を物語っているのかも知れない。

以上，立地環境や石器組成を中心に頭ヶ島白浜遺跡の在り方に対する推察を試み，この遺跡が定住的な集落遺跡ではなく，海棲哺乳類を対象とする一時的な採捕・解体の場である可能性を指摘した。もとより貝塚を伴わないため直接証拠としての動物遺存体は皆無である。それだけに石器組成の解釈に大きく依存する結果となったが，それも特定器種の欠落や寡少性といった，いわば負の側面からのアプローチであり，論拠とするには余りにも脆弱な部分を多々含んでいることは否定できない。採捕の方法としては刺突具類の少なさから鈍器による撲殺を想定してみたが，あくまでも仮説の域を出るものではない。鈍器による打撃痕が一般的に認められるのかどうか，遺存骨の検討が必要であろう。

また膨大な量の石銛を出土したつぐめのはな遺跡や多量の石鋸が採集されている女亀遺跡などは，頭ヶ島白浜遺跡とは異なる性格を有していた可能性も高く，こうした遺跡に対する再検討や評価(註−10)を踏まえた上で，外洋性遺跡の実態や多様性に関わる論議が必要であろうと考える。

表で示した遺構・装備一覧にも，本文中で述べたような問題点がある。本来は可能な限り細別された時間幅での石器組成を把握する努力が必要であろうし，器種認定に関しては一定の基準あるいは合意が明示されなければならない。相対的な評価についても，出土総数ではなく単位面積当たりの数値を算出するなど何らかの基準化(数値操作)が不可欠と思われる。本稿では時間的な制約や紙数の都合上，こうした手続きを踏まえないままに終わっている。素描の域を脱しきれなかったことを明記しておきたい。

(渡邊 康行)

註－1　ここでは代表例として以下の２冊を示しておく。
加藤晋平・小林達雄・藤本強 編 1983 『縄文文化の研究 第７巻 道具と技術』　雄山閣
鈴木道之助 1991 『図録・石器入門事典　<縄文>』　柏書房

註－2　切削具類については，凡例でも触れているように二次加工を有する剝片や使用痕を有する剝片を含めたがゆえの高得点であるが，純粋に掻器・削器類に限定しても上位に位置づけられることは確実である。ただ他の器種に比べて著しく消耗性が高かった可能性も考慮しておく必要があろう。

註－3　有川町郷土誌の記載による。

註－4　漁網錘かどうかは別にしても，海岸部から出土する礫石錘が漁撈活動に関与する石器であったことを想定する指摘は少なくない。

註－5　こうした解釈は江湖貝塚の報告（坂田1973）などに見られる。最近の研究としては「超大型礫石錘に関する二，三の考察」（宝珍1990）があり，結論的には「海の活動に関係するものであることは間違いなかろう」としながらも「用途に関しては網の重しや船の碇など諸説があるが，現時点ではどちらとも決め難い」と結んでいる。

註－6　富山県の境Ａ遺跡では35,000点を超える蛇紋岩製磨製石斧の未成品が出土している。反面，未成品や工具類を伴なわず製品のみが出土する集落遺跡が存在することから，原石に恵まれた特定地域で量産された製品が東北･関東を含む広い範囲に流通していた可能性が示されている（山本1991）。筆者も島原半島に所在する弘法原遺跡の資料に基づいて，磨製石斧が製品あるいは半製品の状態で搬入された可能性を示唆したことがあるが（渡辺1992），特に蛇紋岩製磨製石斧に関する同様の指摘は長崎県内においても幾度か行われており（例えば松藤1990），こうした解釈が実態に近いのではないかと考えている。

註－7　多くの論考があるが，最も基本的かつ代表的な論文として橘（1979）を揚げておきたい。

註－8　寄り鯨・流れ鯨については，立平（1995）に詳しい。同氏の文章を引用させて頂き，説明に替えたい。
[寄り鯨]鰯などの餌魚を追って海岸近くや湾内に入ってしまった鯨や鯱などから追われて逃げ場を失った鯨のことをいう。まだ生気はあるが，体力を消耗して弱った状態である。
[流れ鯨]病気や鯱などの天敵に襲われて絶命したものが，海上を漂流している状態の鯨をこのように呼んでいる。他に，入江深くに入ってきたものを「迷い鯨」ということもある。

註－9　たとえば島津（1992）など。

註－10　森浩一氏は，阿高式系土器の底部に見られる鯨骨圧痕から，脊椎骨を供給する遺跡の存在を想定され，その一候補として，つぐめのはな遺跡を揚げておられる（森1994）。

引用・参考文献

有川町郷土誌編集・編纂委員会 1994「第二章 第五節 近世史」『有川町郷土誌』　有川町
アンソニー・マーティン 編著（粕谷俊雄 監訳） 1991『クジラ・イルカ大図鑑』　平凡社
安楽勉　1991『福江・堂崎遺跡 －発掘調査概報－』福江市文化財調査報告書第4集　福江市教育委員会
安楽勉・町田利幸 1992『福江・堂崎遺跡』 福江市文化財調査報告書第5集　福江市教育委員会
安楽勉・藤田和裕 1979「浜泊遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ』　長崎県教育委員会
安楽勉・藤田和裕 1985『名切遺跡 －長崎県壱岐郡郷ノ浦町所在の遺跡－』　長崎県文化財調査報告書第71集　長崎県教育委員会
賀川光夫 1968『宮下遺跡調査報告（図録編）』 長崎県文化財調査報告書第７集　長崎県教育委員会
賀川光夫 1971『宮下遺跡調査報告（解説編）』 長崎県文化財調査報告書第９集　長崎県教育委員会
木村幾多郎 1987「北部九州の漁撈活動」『文明のクロスワード　Museum Kyushu』24
木村幾多郎 1994「貝塚出土遺物にみる縄文人の生活」『九州の貝塚 －貝塚が語る縄文人の生活－』　北九州市立考古博物館 第12回特別展図録
木村幾多郎 1995「自然遺物にみる原始・古代肥前の食生活」『風土記の考古学』 第５巻
久原巻二・藤田和裕 1988『西ノ股遺跡』 新魚目町文化財調査報告書第2集　新魚目町教育委員会
小林達雄 1983「総論 －縄文経済－」『縄文文化の研究』第2巻　雄山閣
坂田邦洋 1973『曽畑式土器に関する研究　江湖貝塚』　縄文文化研究会
正林護・村川逸朗 1987『中島遺跡』福江市埋蔵文化財調査報告書第3集　福江市教育委員会

正林護 1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第9集　峰町教育委員会
正林護・安楽勉 1980『白浜貝塚』　福江市文化財調査報告書 第2集
正林護・村川逸朗 1986『つぐめのはな遺跡』　長崎県文化財調査報告 第82集
島津義昭 1992「鯨の考古学序説 －九州縄文人の広域的性格－」『九州歴史大学講座』7
高野晋司・福田一志 1986『殿崎遺跡』　長崎県文化財調査報告書 第83集
田島龍太 1995「石器について」『徳蔵谷遺跡（2）』 唐津市埋蔵文化財調査報告書 第63集
橋昌信 1979「石銛 －西北九州における縄文時代の石器研究（二）－」『史学論叢』第10号 別府大学史学研究会
立平進 1992「鯨（いさな）をとる －漁撈文化の考古学－」『九州歴史大学講座』7
立平進 1995『西海のくじら捕り －西海捕鯨の歴史と鯨絵巻－』　ろうきんブックレット1
直良信夫 1973「縄文時代の漁撈生活」『どるめん』 第1号
中園成生 1996「捕鯨活動」『考古学による日本歴史』 第2巻 雄山閣
秀島貞康 1984『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書第5集　諫早市教育委員会
平口哲夫 1986「石川県真脇遺跡」『季刊考古学』15
平口哲夫 1992「日本海の古代イルカ漁」『九州歴史大学講座』7
平野敏和 1981『出津遺跡』外海町文化財調査報告書第1集　外海町教育委員会
平野敏和・中村和正 1983『出津遺跡』外海町文化財調査報告書第2集　外海町教育委員会
藤田和裕 1987『小浦遺跡』上五島町文化財調査報告書第1集　上五島町教育委員会
藤田和裕・町田利幸 1990『築崎遺跡』飯盛町文化財調査報告書第1集　飯盛町教育委員会
宝珍伸一郎 1990「超大型礫石錘に関する二，三の考察 －付・有孔石製品－」『伊木力遺跡　－長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査－』同志社大学考古学研究室編　多良見町教育委員会
前川威洋 1969a「縄文後期文化－九州－」『九州縄文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会 昭和54年
前川威洋 1969b「九州における縄文中期研究の現状」『九州縄文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会 昭和54年
松藤和人 1990「伊木力遺跡における石器組成と剝片剝離法の変遷」『伊木力遺跡 －長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査－』同志社大学考古学研究室編　多良見町教育委員会
宮崎貴夫 1991『宮ノ首遺跡』宇久町文化財調査報告書第2集　宇久町教育委員会
宮崎貴夫 1989『国崎遺跡』南串山町文化財調査報告書 第2集　長崎県南串山町教育委員会
森　浩一 1994「鯨漁と鯨骨の加工技術の普及」『考古学と古代日本』　中央公論社
山崎純男 1988「西北九州漁撈文化の特性 ―石製銛頭（石銛）を中心に―」『季刊考古学』25
山本正敏 1991「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」『季刊考古学』35
渡辺　誠 1973『縄文時代の漁業』 雄山閣
渡辺　誠 1985「西北九州の縄文時代漁撈文化」『列島の文化史』2
渡辺　誠 1992「漁撈文化の考古学」『九州歴史大学講座』7
渡邊康行 1992「石器群の石材利用について」『弘法原遺跡』吾妻町の文化財13　長崎県吾妻町教育委員会

5．縄文前期および縄文中期土器について

(1)　はじめに

今回の頭ヶ島白浜遺跡の調査では，部分的に近世墓による攪乱がみられたものの，縄文前期から後期初頭の文化層が良好なかたちで残存していたため，当該期の土器資料を多数発掘することができた。ここでは，本県を中心に縄文前期から後期初頭における土器について検討し，若干の考察を加えたい。

(2)　研究史抄

長崎県における縄文前期土器のまとまった研究は，松浦市姫神社遺跡(水ノ江訳1990)，長崎市深堀遺跡（渡邊1984・加納1984)，西彼杵郡多良見町伊木力遺跡（水ノ江1990ａ）などにおける研究がある。また，良好な出土資料は佐世保市下本山岩陰（麻生1972)，福江市江湖貝塚（坂田1973）などの遺跡で知られている。

姫神社遺跡ではALBERT MOHRと吉崎昌一によって轟式土器と曽畑式土器が層位的に分離され，轟式→曽畑式の前後関係が確認された(注1)。

横山巳貴子は浜田遺跡の報文において曽畑（新）式土器を報告するとともに，県内出土の曽畑式土器の地名表および分布図を掲載した（横山1981)。

一方，深堀遺跡では渡邊康行が轟Ｂ式土器と曽畑Ｉ式土器(注2)をつなぐ深堀第Ⅲ群土器を抽出した(渡邊1984)。渡邊は轟Ｂ式土器を第１種（狭義の轟Ｂ式)，第２種（文様変化型)，第３種（技法変化型）に分類し，第１種→第２種･第３種という時間差と，第２種（東南九州型)，第３種（西北九州型）という地域差を設定したうえで，深堀第Ⅲ群土器が第２種と第３種の接触・交流によって成立したという見解を示した。深堀第Ⅲ群土器はのちに水ノ江和同により「深堀式」の名が冠され，さらに深堀Ｉ式・深堀Ⅱ式という二型式に細分され，氏による「野口式」の直前に位置づけられた（水ノ江1988)。

また深堀遺跡では帯状列点文を施した土器が第Ⅷ群土器として抽出され(加納1984)，これものちに水ノ江により熊本県玉名郡尾田貝塚出土土器（坂田1974）を標式として尾田式土器と命名され，曽畑式土器に後続する土器型式として位置づけられた（水ノ江1990ａ･1990ｂ)。さらに深堀遺跡では平板実測によるドットマップをオフセットに置換し，土器属性の出現頻度を深度ごとのセリエーショングラムを作成することによって，曽畑Ｉ式土器における口縁部列点文の施文が「当初外面施文だけだったのが，ある時期に内面刺突を施すものが出現し，さらに刺突＋沈線に変化しながらも並行して外面だけの施文が存続していた」ことを解明し，曽畑Ｉ式土器の古相，新相の編年に型式学的根拠を与えた。

一方，伊木力遺跡出土の縄文土器に関する考察は長崎県の枠を越え，九州における編年の整備という観点から行われた。水ノ江和同は伊木力遺跡から出土した曽畑式土器を検討し，氏の編年による曽畑Ｉ式新段階から曽畑Ⅱ式新段階までの土器を確認している。さらに水ノ江は前述の尾田式土器に伊木力遺跡第４群土器をあてた（水ノ江1990ａ)。

近年では安楽勉が五島列島の福江市堂崎遺跡の報文のなかで，出土した轟式土器を第Ｉ類から第Ⅵ類に分けて報告し，「総括」では近年の轟式土器の研究成果を盛り込んだまとめをおこなっている（安楽・町田1992)。

さらに安楽は五島列島出土の曽畑式土器の集成も行っている（安楽1993）。

次に本県における縄文中期の土器研究に関してであるが，1925（大正14）年に諫早市有喜貝塚において，京都大学の浜田耕作による学史的に著名な調査研究があったにもかかわらず，その後はまとまった研究もわずかで，整備された報告書も少ないといえる(注3)。そういう中で秀島貞康は有喜貝塚の報文において，前述の京大調査資料も取り込みながら精緻な出土土器の分析をおこなった(秀島1984)。また，高野晋司は北松浦郡小値賀町殿崎（とんざき）遺跡の報文において，県内の縄文中期から後期中葉までの遺跡地名表を掲載し，当該期の土器の変遷について概観している(高野1986)。一方，先述の伊木力遺跡の報文では，中期の土器として船元式系土器，並木式土器が報告され，川崎保が阿高式系土器について考察した(川崎1990)。氏は中期阿高式土器の編年案を示すとともに，伊木力遺跡第９群土器を佐賀県坂の下遺跡出土土器に併行するものとし，あわせて京都大学が所蔵する有喜貝塚出土の土器資料を報告した。

また近年注目された資料として，南高来郡国見町百花台遺跡より出土した船元式系統の土器や船元式古段階の鷹島式土器の存在がある。100点あまりの破片が出土しており，中期における瀬戸内系土器の流入が強力であったことが判明し（安楽1994），九州の縄文中期土器研究に一石を投じた。

(3)　研究の現状

九州の縄文前期を代表する轟式土器と曽畑式土器については，両者の中間的な土器群を介して轟式土器から曽畑式土器へ移行するという学説がいまや定説となった感がある(注4)。また，高橋信武や宮本一夫によって熊本県轟貝塚出土資料が再検討され，いままで不明確であった轟式土器の内容はかなり整理されてきた(注5)。さらに轟Ｂ式土器が九州・山陰・韓国南部にまで分布を広げていることは，研究者の共通した認識となっており，韓国隆起文土器と轟Ｂ式土器との関係がいっそう注目されている。また国内ではアカホヤ火山灰直下において条痕文や隆起文を施した土器の出土が確認され，その実態および轟Ｂ式土器との関係が追求されている(注6)。

一方，曽畑式土器については水ノ江和同の精力的な研究により，曽畑式土器の内容や分布，さらには前後の土器型式の様相が，徐々に判明してきている。しかし，轟式・曽畑式のいずれも，その出自や系譜・系統・編年などといった細部の問題では依然として研究者間に見解の相違があることも事実である。

次に，九州における縄文中期土器については，従来の土器編年そのものが再検討を迫られている状況といえよう。これまで九州の縄文中期土器の編年は前半に並木式土器，後半は阿高式土器と考えられていた。前川威洋や田中良之による部分的な修正はあったものの，基本的には今日まで九州の研究者が踏襲してきた編年観といえる。しかし近年新たな見解が提起されている。すなわち九州の縄文中期前半は在地化した船元式系土器で占められ，並木式土器の成立は中期中葉以降で，阿高式土器は後期に近い時期に編年できるという学説である（東1994・徳永1994・矢野1995）。この新しい編年観は南九州の春日式土器の研究成果や並木式土器の放射性炭素を使用した年代測定などが根拠となっており，層位的な裏付けもあるようである。九州の縄文早期・前期の土器編年が1980年代に大きく動いたことは周知の事実であるが，ここにきて中期についても再検討が迫られている状況といえよう(注7)。

(4) 若干の考察

① 第Ⅰ群土器（轟B式系土器）について

本遺跡で出土した第Ⅰ群土器のうち第7図1の個体資料および第7図2の個体資料は轟B式土器のなかでも「長頸を有し腹部の張った深鉢形土器」といわれるものの範疇で捉えられるであろう(注8)。ここでは「屈曲型」と称する。

長崎県においては，近年多良見町伊木力遺跡において「屈曲型」でも比較的新しい時期とされる土器が報告され（報文では51頁図2－8），福江市堂崎遺跡においても破片資料であるが「屈曲型」の轟B式土器の報告がなされている（安楽・町田1992）。第7図2の土器は横走する隆帯に刻目を施し，隆帯間はS字状の垂下隆帯でつないでいるなど装飾性に富む資料が出土した。鹿児島県荘貝塚出土8類土器などに類似しているといえよう（池永ほか1979）。また本遺跡の轟B式土器の文化層からは型式不明の厚手の土器が出土している。第8図5の資料は南九州における早期貝殻文系土器との関連を想起させ，第8図6の資料は器形など細部は異なるものの鹿児島県阿多貝塚出土土器（報文では第33図167）の施文などと共通するものかもしれない。継続的な資料検索が必要な土器である。

② 頭ヶ島白浜遺跡出土の韓国隆起文系土器について

本遺跡では，轟B式土器の文化層において韓国隆起文土器の第Ⅲ段階の土器片が出土した(注9)。広瀬雄一によると隆起文Ⅲは，胴部文様が沈線化する段階で，胴部文様が沈線を主体とする段階であるという（広瀬1985）。また本遺跡出土資料と酷似する資料が釜山の凡方貝塚で出土している（報文では138頁図面17図18）（河ほか1993）(注10)。本県における韓国隆起文土器の出土は対馬の上県町越高遺跡（坂田1978）および同町越高尾崎遺跡（坂田1979）にみられるように，対馬での発見例が多かったが，今回の発見により韓国隆起文土器が五島列島にまで流入していることが判明した(注11)。

③ 第Ⅱ～Ⅳ群土器（曽畑式系土器）について

頭ヶ島白浜遺跡の第B4・B5グリッド第5層下位から出土した第Ⅱ群第1類および第2類の曽畑式系の土器は，口唇部に刺突列点文があり，外面の文様が口縁部付近の一条の刺突列点文と，整然とした組帯文系沈線文であること，胎土に滑石を含み薄手で，焼成は良好であることなどの特徴がみられる。これらの特徴は曽畑式土器の古相の特徴といってよい。本県出土資料から深堀Ⅳ群土器・下本山岩陰出土時・江湖貝塚出土土器の段階と考える(注12)。しかし，第Ⅱ群第3類の土器は沈線の間隔に乱れが生じており，色調も若干異なり，第1・2類に後出するものと考えている。

次に第Ⅳ群の土器群は，沈線が太くなり，胎土に滑石は含まないことなどから，深堀Ⅴ群土器・伊木力3群3類土器の段階とすることができよう(注13)。

また，第Ⅳ群とした第10図69の土器は口縁部がやや外反し，施文は細い短沈線を多用した綾杉文を描いているが，施文方法や文様構成が粗雑化しており，胎土には滑石も含まず，内外面に条痕をのこしていることなどから，曽畑式土器の最終段階と考えられる。深堀Ⅶ群土器の段階に比定できるであろう。

④ 第Ⅴ群土器（尾田式系土器）について

第Ⅴ群土器とした第10図70の土器は水ノ江和同が設定した尾田式土器と判断した(注14)。本資料の文

様モチーフは福岡県野口遺跡や長崎県深堀遺跡・佐賀県菜畑遺跡から出土し，「プロト曽畑」とされた土器群（田島1982）や「野口・阿多式」とされた土器群（中村1982）に施された胴部文様に類似している。しかし，連続した弧線文が複線ではなく単線である点が，先行するプロト曽畑などの一群や，曽畑式土器の弧線文（水ノ江1990ａ）とは異なると判断した(注15)。また，胎土が尾田式土器のものに類似することや，口縁部が外反しそうな点，さらに曽畑式古相の土器よりも上位の土層から出土したことも，この土器を尾田式土器とする根拠となっている（出土層位は第２図）。

⑤　第Ⅶ群土器（春日式系土器）について

第Ⅶ群とした第11図73の土器は南九州の中期前半の土器である春日式土器ではないかと考えられる(注16)。五島列島と南九州の交流は福江市大板部洞窟より塞ノ神式土器が出土し（橘1986），早期にさかのぼる交流が知られているが，本遺跡の春日式類似の土器によって縄文中期における南九州との交流の事実があきらかとなった。なお，春日式土器と共伴した並木式土器（第12図76）は鹿児島県中尾田遺跡出土の並木式土器（新東ほか1981）に類似するという(注17)。なお，本遺跡に近接する新魚目町西ノ股遺跡でも，春日式土器ないし大平式に類似する資料が出土している（報文では第６図34）（藤田1988）(注18)。

キャリパー形で，内湾する口縁部を肥厚させ，隆帯を施し，隆帯の上から刻目をいれている。胎土には滑石が混入されている。

⑥　第ＩＸ群土器（瀬戸内系中期土器）について

九州で縄文中期に出土する瀬戸内系の土器群については，田中良之や東和幸が船元式系土器の変遷を示している(注19)。第11図75の瀬戸内系土器は口縁部内面に縄文を施しており熊本県岡田遺跡（江本1993）のⅢ－Ｃ類に類似する。船元式系土器でも古相に位置づけられよう。

個体資料第10図72の土器は，器形はキャリパー型であるが地文は条痕であり，口縁内部は粘土帯を貼り付け肥厚させている。瀬戸内地方では里木Ⅱ式段階から地文が縄文地から条痕地になるとされるが(泉1990)，南九州では中期前半より条痕を地文とする春日式土器が分布している。72の資料については中期末から後期初頭の土器ではないかと考えてはいるが，この土器の系譜と時期については，継続的に検討する必要がある。

［註］

註１　姫神社遺跡の轟式期の土器については，報告者は「プロト曽畑」式土器と認識しており，訳者である水ノ江和同は，氏のいう「中間土器群」の中の「深堀式土器」とした。

註２　『深堀遺跡』の報文における曽畑式土器の編年は杉村彰一による編年（杉村1962・1965）が用いられている。

註３　横山順と田中良之が発表した壱岐郡郷ノ浦町鎌崎海岸遺跡の縄文前期から後期前半の土器・石器を分析した論文は，表採資料という制約にも関わらず西北九州の漁労文化の一端を復元した労作であった（横山・田中1979）。

註４　しかしながら，福岡県柿原野田遺跡や同県杷木町天園遺跡（中間1996）でみられた轟Ｂ式土器と曽畑式土器との同一遺構での共伴のごとき事実は両土器の関係が時間的にも空間的にも複雑であることを示している。

註５　高橋は松本雅明と富樫卯三郎の土器編年の基礎資料となった1958年の轟貝塚調査資料（熊本大学蔵）を再検討し（高橋1989），宮本は1919年に京都大学が調査した同貝塚資料の再検討をおこなった（宮本1990）

註６　高橋信武は長崎県福江市大板部（おおいたべ）洞窟出土の轟式系土器（大板部洞窟の報文では轟Ｂ式系統の土器としている）や，長崎県田平町つぐめのはな遺跡第Ⅵ層出土の轟式系土器をアカホヤ火山灰直下の土器と認定している（高橋による轟２式）（高橋1989），このことは李相均も追認している（李による轟Ａ類）（李1994）。

註７　九州の縄文中期土器の編年については佐賀県教育委員会の徳永貞紹氏より教示をうけ，文献についても便宜をはかっていただいた。

註８　山口信義は「張胴」や「屈折する胴」と呼び，後続する「底すぼまりの単純な深鉢」とは同系統ながら，時間差を有する土器群とした（山口1987）。高橋信武は「九州では単純な深鉢形の大部分は，塞ノ神式の系統の中で一貫した流れを辿ることができる」としたうえで「屈曲型」の土器を「山陰系突帯文土器」と呼び，山陰地域の在来土器から出現するとした（高橋1989）。宮本一夫は「屈曲型」をⅡ・Ⅲ・Ⅳ類と山陰地方に分布する志高タイプのものに分類し，単純な円筒形のⅠ類とは別系統のものとしている（宮本1989・1990）。また，轟Ｂ式土器の最新の研究成果である李相均の研究によると，九州・山陰・山陽・韓国南部における轟Ｂ式段階の土器群は，それぞれ在地系土器（第Ⅰ群）と広域に展開する「屈曲型」の土器（第Ⅱ群）とに分類できるという。第Ⅱ群土器はアカホヤ堆積後の中九州沿岸で成立し，五島列島を介して山陰・韓国南部へと拡大していったことを論証している。そこでは九州・山陰・韓国南部の三地域の交流に果たしたであろう，五島列島の重要性が指摘されている。李は「屈曲形」の出自については九州自生説をとり，手向山式土器との関係を示唆しつつ「山陰起源説は可能性が薄い」とした（李1994）。

註９　渡邊康行氏が発見した後，正林護・広瀬雄一両氏から確認していただき，さらに正林氏が韓国で開催された嶺南考古学会に土器を持参し，学会に参加した日韓両国の新石器研究者に披瀝したところ大方の追認をうけたとのことである。韓国隆起文土器の編年については広瀬雄一氏より教示をえた。

註10　渡邊康行氏の教示による。

註11　長崎県北松浦郡小値賀町殿崎遺跡の坂田邦洋氏の試掘調査において韓国櫛目文土器が多く出土したらしいが，新聞発表（昭和54年5月4日付け長崎新聞）のみで，未確認である（高野1986）。

註12　最近の曽畑式土器の編年では，これまで最古型式と考えられていた福江市江湖貝塚・佐賀県西唐津海底出土の曽畑式土器は第２段階以降に編年されてきている（木村1989・水ノ江1990ａ）。しかしながら本遺跡出土の曽畑式系土器を報告するにあたっては，本県出土の資料により，深堀Ⅳ群土器・下本山岩陰・江湖貝塚出土土器の段階→深堀Ⅴ群土器・伊木力３群第３類土器の段階→深堀Ⅶ群土器の段階という変遷を想定し，本遺跡出土土器との比較をおこなった。最新の研究成果を取り込めなかった点は，今後の課題としたい。

註13　福江市堂崎遺跡より曽畑式土器が出土している（報文の第16図94）。報文では曽畑式土器の新しい型式としている（安楽・町田1992）。深堀Ⅴ群・伊木力第３群第３類・本遺跡Ⅲ群土器と同じ段階としてよいのではなかろうか。

註14　尾田式土器は水ノ江和同が松本・富樫編年による「轟Ｄ２・轟Ｄ３」を再設定したものである（水ノ江1990ａ・1990ｂ）。長崎県では北松浦郡宇久町宮ノ首遺跡などで出土している（宮崎1991）。

註15　広瀬雄一・渡邊康行・久留米市教育委員会　富永直樹の各氏より教示をえた。

註16　鹿児島県埋文センターの東和幸氏より，春日式土器のなかでも新しいほう（轟木ヶ追段階か南宮島段階）だと考えられるとの教示をえた。また，同センターの堂込秀人氏からは春日式土器に関する文献について便宜をはかっていただいた。長崎県においては，これまで確実な春日式土器の報告例がない。福江市堂崎遺跡において安楽勉が指摘した資料（報文では第14図72）があるのみであろう。本遺跡の資料と類似した資料としては長崎市深堀遺跡報文中のFig41-91の土器がある。

註17　鹿児島県埋文センター東和幸氏より教示をえた。中尾田遺跡報文では第Ⅲ層出土第Ⅰ類土器が並木式土器である。

註18　渡邊康行氏より指摘をうけた。

註19　田中良之は船元式土器の変化を五段階に整理したうえで，新延貝塚出土の中期土器の報告をおこなった（田中1980）。東和幸は九州より出土する船元系土器を三段階に分類した（東1991）。

引用・参考文献

麻生優 1972 『下本山岩陰』佐世保市教育委員会
安楽勉・町田利幸 1992 『福江・堂崎遺跡』福江市文化財調査報告書第5集　福江市教育委員会
安楽勉 1993 「五島列島の曽畑式土器」『考古学ジャーナル』365　ニューサイエンス社
安楽勉 1994 「土器」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会　長崎県文化財調査報告書第116集
李相均 1994 「縄文前期前半期における轟Ｂ式土器群の様相」『東京大学文学部考古学研究紀要』第12号　東京大学文学部考古学研究室
池永寛治 1979 『荘貝塚』出水市文化財調査報告書1　出水市教育委員会
泉拓良 1990 「船元・里木様式」『縄文土器大観』小学館
江本直 編 1993 「岡田 －県営菊池うてな台地地区畑地帯総合改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－」熊本県文化財

調査報告第135集　熊本県教育委員会
加納梓 1984 「轟Ｃ－Ｄ式と第Ⅷ群土器について」『長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎市教育委員会
川崎保 1990 「７　阿高式系土器の編年と伊木力遺跡第９群土器の評価」『伊木力遺跡　長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査』多良見町教育委員会　同志社大学考古学研究室
坂田邦洋 1973 『曽畑式土器に関する研究　江湖貝塚』縄文文化研究会
坂田邦洋 1974 『曽畑式土器に関する研究　尾田貝塚』縄文文化研究会
坂田邦洋 1978 『韓国隆起文土器の研究』　昭和堂印刷出版事業部
坂田邦洋 1979 『対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究』別府大学考古学研究室報告第三冊　広雅堂書店
正林護 1986 『つぐめのはな遺跡－北松浦郡田平町所在－』長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅸ　長崎県文化財調査報告書第82集　長崎県教育委員会
新東晃一・中島哲郎・井ノ上秀文 1981 『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ　中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書　鹿児島県教育委員会
杉村彰一 1962 「曽畑式土器文化に関する一考察」『熊本史学』23
杉村彰一 1965 「曽畑式土器論考」『九州考古学』24　九州考古学会
高野晋司 1986 「Ⅲ総括」『殿崎遺跡』長崎県文化財調査報告書第83集　長崎県教育委員会
高橋信武 1989 「轟式土器再考」『考古学雑誌』第75巻第1号　日本考古学会
田島龍太 1982 「４　菜畑遺跡縄文時代前～中期の土器群の編年と様相」『菜畑』唐津市文化財調査報告5　唐津市教育委員会
橘昌信 1986 『五島大板部洞窟の調査―縄文時代の水中貝塚―』大板部洞窟調査団
田中良之 1980 「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚　福岡県鞍手郡鞍手町新延所在縄文時代貝塚の調査』　鞍手町埋蔵文化財調査会
徳永貞紹 1993 「(2) 下層の遺構と遺物」『平原遺跡Ⅱ　本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書2』佐賀県文化財調査報告書　佐賀県教育委員会
徳永貞紹 1994 「並木式土器の成立とその前夜」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会
冨永直樹 1981 『久留米東バイパス関係埋蔵文化財調査報告』久留米市文化財調査報告書第28集久留米市教育委員会
中間研志 1996 「轟Ｂ式・曽畑式土器」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告42　福岡県教育委員会
中村慶 1982 「曽畑式土器」『縄文文化の研究３　縄文土器Ⅰ』雄山閣
河仁秀・李海蓮・李賢珠 1993 『凡方貝塚Ⅰ』　釜山直轄市立博物館
東和幸 1991 「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』№５　南九州縄文研究会
東和幸 1994 「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」『南九州縄文通信』№８　南九州縄文研究会
秀島貞康 1984 『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書第５集　諫早市教育委員会
広瀬雄一 1985 「櫛目文土器の研究－韓国南岸地域における編年を中心として－」『伽倻通信』第13・14号合輯號－新石器時代特集－　伽倻通信編輯部
藤田和裕 1988 「土器」『西ノ股遺跡』新魚目町文化財調査報告書第２集　新魚目町教育委員会
水ノ江和同訳 1990 ALBERT MOHR・吉崎昌一「西九州における文化の変遷」『古文化談叢』第22集　九州古文化研究会
水ノ江和同 1988 「曽畑式土器の出現－東アジアにおける先史時代の交流－」『古代学研究』117　古代学研究会
水ノ江和同 1990ａ 「６　西北九州の曽畑式土器」『伊木力遺跡　長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査』多良見町教育委員会　同志社大学考古学研究室
水ノ江和同 1990ｂ 「中・南九州の曽畑式土器」『肥後考古』第7号　肥後考古学会
宮崎貴夫 1991 「２．縄文土器」『宮ノ首遺跡』宇久町文化財調査報告書第2集　宇久町教育委員会
宮本一夫 1989 「轟式土器様式」『縄文土器大観１』小学館
宮本一夫 1990 「轟式土器の再検討－京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に－」『肥後考古』第7号　肥後考古学会
山口信義 1987 「隆帯文（轟Ｂ式）土器研究ノート」『研究紀要』創刊号　財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
矢野健一 1995 「並木式・阿高式の編年観変更の意義」『日本考古学協会第61回総会研究発表要旨』日本考古学協会
横山順・田中良之 1979 「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』NO54　九州考古学会
横山巳貴子 1981 「土器」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第54集　長崎県教育委員会
渡邊康行 1984 「第Ⅲ群土器について」『長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎市教育委員会

6．頭ヶ島白浜遺跡出土　韓国系彩色土器　断想

河　仁秀　（釜山広域市立博物館　福泉分館）
廣瀬　雄一 訳（佐賀県立名護屋城博物館）

海を隔てた韓日両地域は，古くから「人」の移動による多くの交流活動が行われており，このような事実は，考古学上の発掘資料により，証明されようとしている。最近，韓日両国の考古学上の調査・研究で，少なくても旧石器時代後期からの文化的な交流を暗示する資料が，両地域から発見されている。しかし旧石器時代には，当時の社会構造・自然環境・生活条件の制約下で，「人」の移動や文化の伝播が後の時代に比べてそれほど多くなかったのは，明らかな事である。韓日両地域の文化交流の実像がより具体的に提示されるのは新石器時代からの事で，この時代に関する具体的な研究や資料は，日々蓄積されてきたといえる。

ところで，今回調査された長崎県頭ヶ島白浜遺跡の韓国系櫛文土器は，既存の韓日交流史を具体的に説明する資料としての役割のみならず，これまで韓日の考古学界で，盛んに論議されてきた新石器時代の編年問題や交流のルートと地域を明らかにする上で，わずか一片の破片に過ぎないとはいえ，この土器片のもつ歴史的・文化的な意味は，計り知れないものであると考える。

頭ヶ島遺跡出土の櫛文系土器は，土器の胎土・成形方法・文様の施文，特に沈線に区画された空間を丹で彩色する点などでは，共伴する縄文土器の轟B式土器とは，明確に区別される。少なくても，この土器が韓半島南部からの搬入品である可能性を示していると考える。今日まで，このような特徴をもつ土器は，韓半島の南海岸地域の貝塚から集中的に出土しており，分布状況から韓国南海岸地域の特徴的な土器型式であるとみなせる。

頭ヶ島白浜遺跡から出土の櫛文系土器と同一型式の土器は，釜山凡方（ボンバン）貝塚[註1]，慶尚南道新岩里（シナムリ）遺跡[註2]，南海岸の煙台島（ヨンデド）貝塚[註3]，松島（ソンド）貝塚[註4]，上老大島（サンノテド）貝塚[註5]などから出土している。これらの遺跡から出土している彩色土器は，平底と推定され，鉢形もしくは壷形の器形に隆起文と沈線が複合して一つの文様帯を構成しており，沈線で区画された菱形文の間に丹塗して彩色している。

このような形態的な属性をもつ彩色土器は文様の形態により，大きく２種類に区分することができると考える。

第１類は，頭ヶ島白浜遺跡出土櫛文系土器と同様に，胴部に２本の平行する沈線で菱形に連続的に区画し，沈線内を平行短沈線で充塡し，平行短沈線を充塡していない空白部分を彩色している[註6]。第２類は，胴部に平行沈線文を連続して施文し，一定の間隔をあけ沈線文の間を平行短斜線で充塡する。短斜線を充塡しない空白部分を彩色する[註7]。第２類は文様構成において頭ヶ島白浜遺跡出土の櫛文系土器とは異なるが，施文手法の基本的な部分においては，同一の特徴をもっていると判断してもよいと考える。

このような形態の特徴をもつ彩色土器は，現在までの調査資料からみると，韓半島南海岸早期の隆起文様式段階に属すると考えられる。このことは最近良好な層位的堆積状況を示している凡方貝塚の発掘成果と，それ以外の遺跡からの共伴遺物の性格から見れば明らかなことである。

しかし彩色土器が隆起文土器様式のどの段階に属し，また，この土器が隆起文土器様式の中でどのように位置づけられるかなど，不透明な点もみられる。少なくても隆起文土器の変遷過程をある程度，把握することのできる凡方貝塚の分析結果によれば，頭ヶ島白浜遺跡出土櫛文系土器を含む南海岸の彩色土器は，早期櫛文系土器の中でも，古式に属するものであると判断される(註8)。

一方，頭ヶ島白浜遺跡出土櫛文土器が，轟B式系土器と共伴して，南海岸地域では，隆起文段階に轟B式系土器と推定されるいわゆる屈曲型土器(註9)が伴っている事実は，韓半島の隆起文土器と轟B式土器が非常に密接な関係を持っていたことを反映しているとみても無理がないと考える。

今日まで何名かの研究者が主張してきた両土器の関連性は(註10)，頭ヶ島白浜遺跡の調査により明らかになったと言えよう。そして，今回の頭ヶ島白浜遺跡の調査が，韓日の新石器時代のクロス編年の整合において有益な資料を提供している点は明らかであるが，韓半島の隆起文土器と日本の轟B式土器とは，具体的にどのような関係をもっているのか，また，韓半島の隆起文土器の成立，轟B式段階に盛行する隆起文土器はどのような意味をもっていたかなど，これから解決して行かなければならない問題であるといえる。

これらの問題の中で，筆者が現在考えている事について簡単に述べてみたい。与えられた紙面の関係上から結論部分だけを紹介したい。

韓半島の隆起文土器は鄭澄元教授が指摘しているように，中国東北地域の隆起文土器文化の影響で成立したと考えられる(註11)。特に南海岸の隆起文土器は，韓半島東北地方を経由して東海岸沿いに南下したと推定される。

このようにして成立した隆起文土器は，梧津里(オジンニ)遺跡(註12)の4層式土器と同様に，丸底ないし尖底を主要な形態として，凡方Ⅰ式土器から隆起文と区別される細沈線文を基本とする在地系土器と共存しながら，平底の隆起文土器が主体となるいわゆる早期の隆起文土器文化を成立させる。そして，この時，隆起文土器の一部が海を越えて九州地域に渡り，轟式土器に影響を与えながら，それ以前には全く見られなかった隆起文を主要な文様要素に採用する轟B式土器が盛行したのではないかと考える。

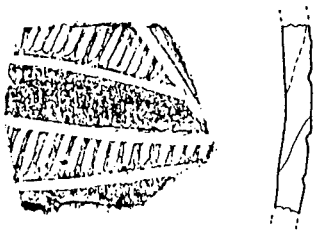
このような文化伝播の結果，反対に九州地域の轟B式土器の一部の要素が南海岸地域に影響をあたえ，いわゆる屈曲型土器を出現させたと考えられる。

いずれにせよ，長崎県の頭ヶ島白浜遺跡出土の櫛文系彩色土器のもつ意味は，これまで不明であった韓日新石器文化のいくつかの問題をより具体的に追求することができる契機と根拠を整えてくれた点から，この土器が持つ意味は非常に重要であるといえる。

［註］

註1　河仁秀他　『凡方貝塚』Ⅰ　釜山直轄市立博物館 1993
註2　国立中央博物館　『新岩里』Ⅰ 1988
註3　韓永熙　任鶴鍾　『煙台島』Ⅰ　国立晋州博物館 1933
註4　国立光州博物館　『突山松島』Ⅰ・Ⅱ 1989・1990
註5　孫寶基　「上老大島の先史時代の人々」 1982

註６　凡方貝塚　図面17－18，8－37，35－14　新岩里遺跡　図面６－８　煙台島貝塚　図面36－439などの資料
註７　凡方貝塚　図面17－17，28－10　煙台島貝塚　図面32－385などの資料
註８　河仁秀他　『凡方貝塚』Ⅰ　釜山直轄市立博物館　1993
註９　廣瀬　雄一　「隆起文土器の諸問題」『考古学の世界』６　1990
註10　廣瀬　雄一　「韓国隆起文土器の系譜と年代」『異貌』12　1986
　　宮本　一夫　「海峡を挟む二つの地域」『考古学研究』37－2　1990
　　李相均　「新石器時代における韓国南海岸と九州地方の文化交流」『東京大学院博士　論文』
註11　鄭澄元　「中国東北地方の隆起文土器」『韓国考古学報』26　1991
註12　鄭澄元他　『清道梧津里岩陰遺跡』釜山大学校博物館　1994



第28図　凡方貝塚出土彩色土器
（河仁秀ほか1993より転載Ｓ＝1/2）

訳者後記

廣　瀬　雄　一

河仁秀氏は，韓国先史時代の研究の最先端で活躍しており，韓国新石器時代の土器編年の基幹となる釜山凡方貝塚の調査を担当し韓国新石器時代に関する数々の重要な論文を発表し，韓国新石器時代の研究の牽引車の役割を果たしている。

今後は，彩色土器の位置づけと隆起文土器の段階の在地系土器の変遷を把握し，隆起文土器との関係を追求する一方で，河仁秀氏の提唱するように日本の轟Ｂ式土器との関係をより一層追求していく必要がある。河仁秀氏は日本の轟Ｂ式土器の文様を構成する隆起文の起源を朝鮮半島に求め，屈曲型の隆起文土器の出現を隆起文土器の九州への伝播の反流であると指摘している点で注目される。

最近の韓国の南部地域の新石器時代編年における最大の成果は，河仁秀氏の論考にも登場する清道梧津里の４層から出土した丸底の条痕文系の土器である。木棒状工具で条痕を施文する点で日本の貝殻条痕文系土器とは本質的に異なっている。梧津里遺跡では平底の隆起文土器が３層から出土しているので条痕文系土器の方が隆起文土器に先行することになる。

条痕文系土器と隆起文様式の土器の関係は，まだ結論を下せる状況にはないが，条痕文系土器の発見は，朝鮮半島南部地域の隆起文土器様式の成立問題に一石を投じている。梧津里４層の条痕文系土器が早期前半，隆起文土器が早期後半に編年される考えは，今後定着をみるだろう。

また，隆起文土器が朝鮮半島東海岸沿いに南下して，南部地域の隆起文土器を成立させたとする考えは相当な説得力をもって受け入れられる。

Ⅶ. 総　　括

1. まとめ

頭ヶ島では縄文海進後の海退に伴って砂丘が形成され，縄文時代前期から後期初頭を中心に人々の生活の場として利用された。発掘によって発見された新石器時代の文化層は縄文前期前半の第7層・第6層と縄文前期後半から後期初頭にかけて形成された第5層がある。遺構は検出されず貝塚も形成されていないため，骨角器や動物遺存体は出土しなかった。

土器は第6・7層から轟B式系土器が出土し，これに伴って韓国隆起文土器が発見された。長崎県内では過去に対馬の越高遺跡や越高尾崎遺跡から隆起文土器が発見されているが，五島列島では初例で，広範な交流を物語る貴重な資料となった。第5層からは主に曽畑式系土器・尾田式土器・船元式系土器・春日式土器・並木式土器・阿高式系土器・坂の下式土器などが出土した。春日式土器は南九州に分布の中心をもつ縄文中期前半の土器で，長崎県での出土例はきわめて少ない。本遺跡出土の春日式土器は全体の器形が窺え，また五島列島と南九州との交流を示す格好の資料である。

石器は第5層を中心に石銛・石鋸・石鏃などの漁労具と大型の掻器・削器類および石斧類が出土しているが，海岸部に立地する遺跡としては石錘を伴わず，植物性資源の処理具と考えられる磨石や石皿類も皆無であった。剝片石器の石材は黒曜石や玄武岩が多用されているが，両石材とも頭ヶ島内には産地がなく，五島列島の宇久島・小値賀島や長崎県本土部から搬入されたものと考えられる。

この遺跡は北面する砂丘上に営まれており，居住適地とは考えにくいことに加えて，石器組成の主体が漁労具や解体処理具に偏っていることなどから，海棲哺乳類（主にイルカ・クジラ類）の捕獲・解体の場であろうと推定した。近世以降，捕鯨基地として発展した有川町の原風景をみる想いである。

縄文時代以降の遺構や遺物としては，第4層を中心に45体の近世人骨が出土した。土壙墓・木棺墓・甕棺墓など葬法はさまざまで，被葬者も成人男女から小児も含まれる。第37号人骨は六道銭を副葬し，11号人骨は木製の数珠を副葬していた。現在頭ヶ島に住む人々は1859年（安政6）に迫害により移住してきたキリスト教信者の末裔であるが，これら近世墓にはキリスト教的要素がみられないため，島外からこの地に埋葬された人々と考えられる。しかし，埋葬の契機や被葬者の出自については不明である。

【謝　辞】　最後に，本書が多くの方々の協力によって刊行されたことを明記しておきたい。特に韓国隆起文土器のコメントを書いていただいた河仁秀氏，要旨をハングルに翻訳していただいた廣瀬雄一・尹美暻夫妻，土器を韓国まで持参していただいた正林護氏に対しては，深く感謝の意を表するものである。第Ⅵ章4の執筆に際しては，立平進氏，川道寛氏，荒木伸也氏，片山巳貴子氏に多大なる御教示と御協力を賜ることができた。さらに昭和堂印刷の原口正行氏には，気長に原稿を待っていただいた。あわせて御礼を申し上げる次第である。

（古門 雅高・渡邊 康行）

2. ま と め (ハングル版)

頭ケ島白浜遺跡은,九州島 西端의 五島列島北部에 位置한다. 五島列島는 大小 약 141의 島으로 구성되어, 遺跡이 所在한 장서는 頭ケ島라고 하는 작은 섬이다. 日本의 行政区分에서는 長崎県南松浦郡有川町로 属한다. 北緯33度、東経129度、부산에서 남쪽으로 약 230km, 제주에서 동쪽으로 약 250km해상으로 있는 面積 1,639㎡의 섬이다. 周圍는 大部分이 岩礁으로 둘러쌓여 있고, 平坦部는 3군데에 불과하다. 遺跡은 섬의 北部에 의지하고 外洋에 北面된 立地이다. 물가 에서의 距離는 十数미터이며, 標高는 약 5미터前後이다. 冬은 北西의 季節風이 강하고, 居住適地라고 말할 수 없다. 文献에서는 19世紀中쯤 까지 無人島 였다고 기재 되었다.

頭ケ島에서는 縄文海進後의 海退에의해 상반된 砂丘이 形成되어, 縄文時代前期에서 後期初頭를中心으로 사람들의 生活의 장소로서 利用되었다. 発掘에 의해서 発見된 新石器時代의 文化層은 縄文前期前半의 第7層・第6層과 縄文前期後半에서 後期初頭에 걸쳐서 形成된 第5層이다. 遺構는 検出되지 않고, 貝塚도 形成되지 않기 때문에, 骨角器나 動物遺存体는 出土되지 않았다.

土器는 第6・7層에서 轟B式系土器가 出土되고, 이것에 상반되고 隆起文土器(第7図-3)가 発見되었다. 長崎県内어서는 過去에 対馬도에 있는 越高遺跡이나 越高尾崎遺跡에서도 隆起文土器가 発見되었 있지만, 五島列島에서는 첫번째로, 広範한 交流를 말한 貴重한 資料가 되었다.

第5層에서는 主로 曽畑式系土器・尾田式土器・船元式系土器・春日式土器・並木式土器・阿高式系土器・坂の下式土器등이 出土되었다. 春日式土器는 南九州에 分布의 中心을 가진 縄文中期前半의 土器이며, 長崎県에서는 出土例가 극히 작다. 本遺跡出土의 春日式土器는 全体의 器形이 추정되고, 또 五島列島와 南九州와의 交流를 가리킨 좋은 資料이다.

石器는 第5層을 中心으로 石銛・石鋸・石鏃등의 漁労具와 大型의 掻器・削器類 및 石斧類가 出土되고 있지만, 海岸部에 立地하는 遺跡으러서는 石錘가 없고, 植物性資源의 処理具라고 생각되는 磨石이나 石皿類도 전혀 出土되지 않았다. 剥片石器의 石材는 黒曜石이나 玄武岩이 多用되고 있지만, 両石材와도 頭ケ島内에는 産地가 없고, 五島列島의 宇久島・小値賀島나, 長崎県本土部에서 搬入된 것이라고 추정된다.

이 遺跡은 北面한 砂丘上에 영위되고 있고, 居住適地라고 생각하기 어려운 것에 가해,石器組成의 主体가 漁労具나 解体処理具에 치우쳐있는 것등을 생각할때, 海棲哺乳類 (主로 돌고래, 고래류) 의 捕獲・解体의 장소였다고 추장 할 수 있다.

縄文時代以降의 遺構나 遺物로서는, 第4層을 中心으로 45体의 人骨이 出土되었다.

土壙墓・木棺墓・甕棺墓등의 葬法도 다영하고,被葬者들도 成人男女부터 小児까지 포한되고 있었다.

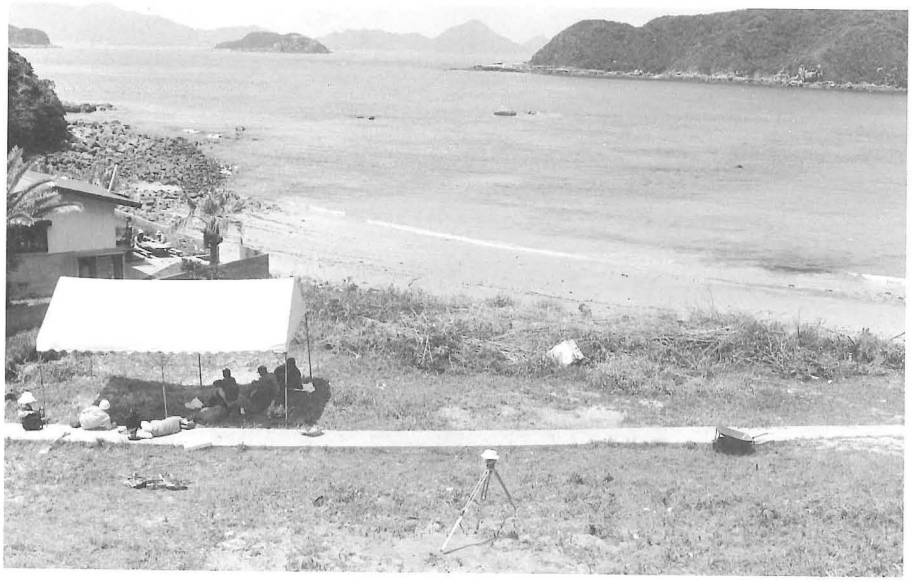
18世紀에서 19世紀 (日本의 江戸時代) 에 属한, 第37号人骨은 六道銭이 副葬되고, 11号人骨은 木製의 数珠가 副葬되고 있었다. 現在, 頭ケ島에 살고있는 사람들은 1859年 (安政6) 에 迫害에의해 移住해서온 크리스트교의 信者의 末裔이지만, 이 近世墓들 에는 크리스트교적 要素가 볼 수 없기 때문에, 島外에서 그 땅에 埋葬된 사람들 라고 생각된다.

그러나, 埋葬의 契機나 被葬者의 出自에 관해서는 不明이다.

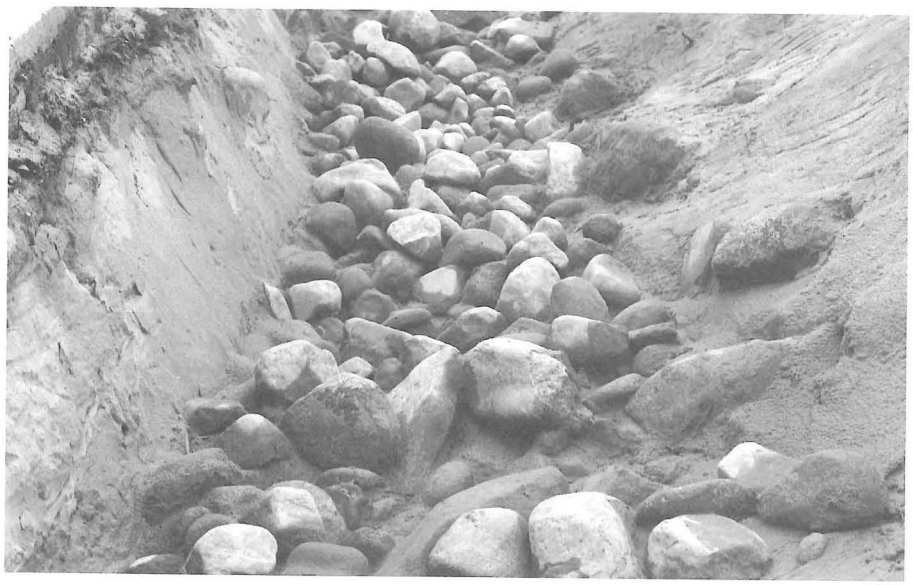
(文責：古門雅高, 訳：廣瀬雄一)

図　　版

図版①　遺跡近景・旧汀線付近の打上礫・韓国隆起文土器



南東から



西から

韓国隆起文土器

付　　編

長崎県有川町頭ヶ島白浜遺跡出土の近世人骨

松　下　孝　幸*

【キーワード】：長崎県，近世人骨，土壙墓，木棺墓，長頭型，低・広顔，高・狭顔

はじめに

長崎県南松浦郡有川町白浜(頭ヶ島)に所在する白浜遺跡の発掘調査が1995年に行なわれ，古人骨が45体発掘された。この遺跡は以前から縄文時代の遺跡として知られていたが，今回出土した人骨はすべて近世に属する人骨である。以前の調査では縄文時代人骨が出土したことになっているが，今回の調査結果から推測すると，どうやらその際の人骨も近世人骨の可能性が強くなった。

保存状態はきわめて良好で，西北九州地域の貴重な近世の標準人骨になりうるであろう。

人骨の人類学的観察と計測を行ない，興味ある所見が得られたので，その結果を報告しておきたい。

資　　料

今回の調査によって本遺跡から出土した近世人骨は合計45体で，表1に示すとおり，そのうちの38体が成人骨で，残りの7体は幼小児骨である。幼小児骨の占める割合は15.6%である。成人骨のうち，男性骨は22体，女性骨は16体であった。なお，各人骨の性別・年令は表2のとおりである。

表1　資料数
(Table 1. Number of materials)

成人		幼小児	合計
男性	女性		
22	16	7	45

遺構が砂丘上に営まれていたこともあって，人骨の保存状態はきわめて良好である。

この45体の人骨は，考古学的所見より，近世に属する人骨群である。

計測方法は，Martin-Saller (1957) によったが，脛骨の横径はオリビエの方法で計測し，鼻根部については鈴木(1963)と松下ら(1983)の方法で，歯は藤田(1949)の方法で小山田常一(長崎大学歯学部口腔第一解剖)が計測し，齲歯の観察も小山田が行なった。

なお，性判別については寛骨を優先し，寛骨のないものは頭蓋で推測した。年齢に関しては表3の基準に従った。

＊Takayuki MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

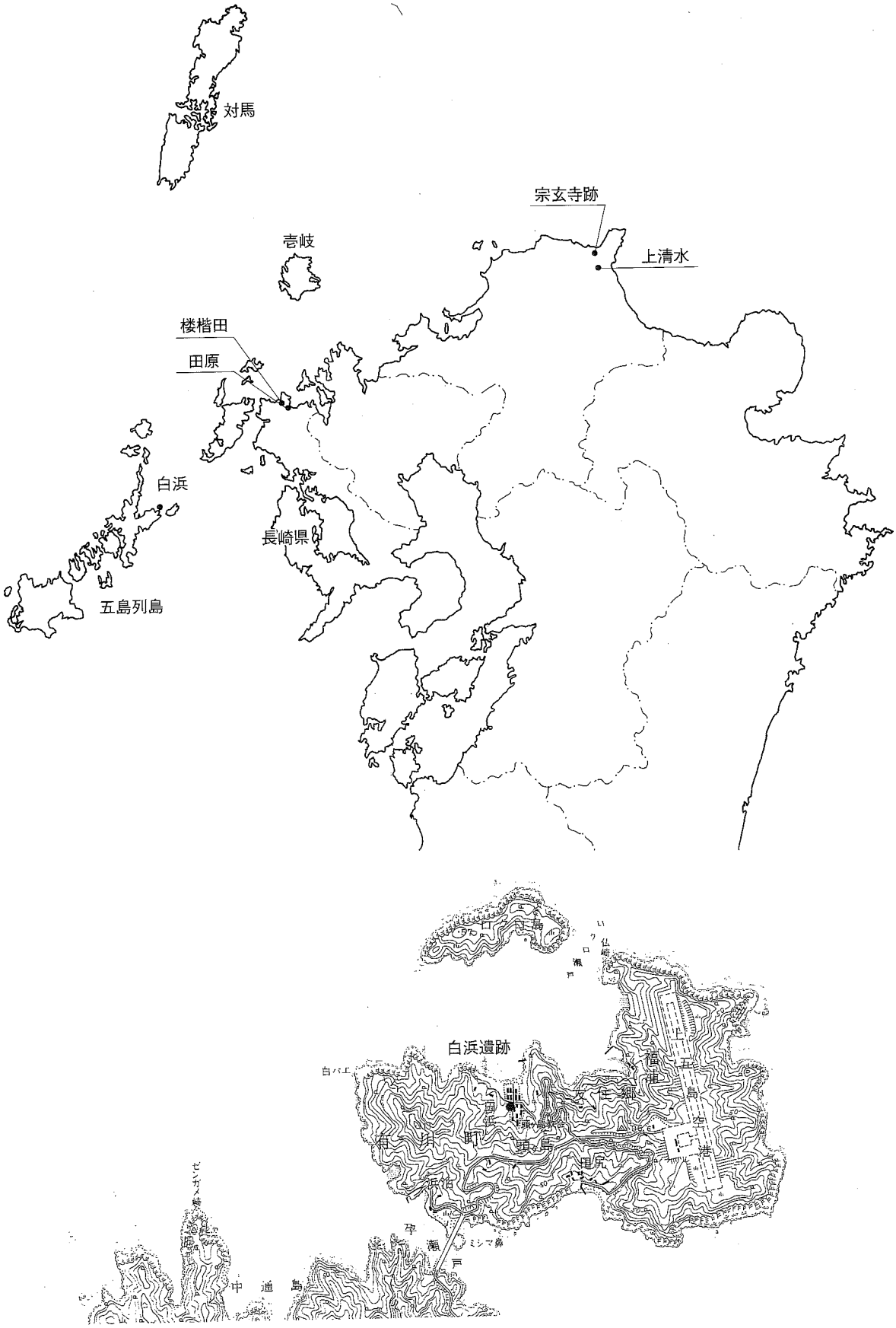


図1　遺跡の位置（Fig.1. Location of the Shirahama site, Arikawa cho, Nagasaki Prefecture）

表 2　出土人骨一覧　(Table 2. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	推定身長値
1	男性	熟年	161.96cm
2	男性	熟年	158.76cm
3	女性	壮年	152.20cm
4	女性	熟年	—
5	女性	不明	150.84cm
6	男性	熟年	160.64cm
7	男性	熟年	—
8	男性	熟年	—
9	女性	壮年	142.28cm
10	男性	熟年	—
11	女性	熟年	143.45cm
12	女性	熟年	142.09cm
13	女性	壮年	148.12cm
14	女性	壮年	151.03cm
15	男性	熟年	164.03cm
16	男性	壮年	158.76cm
17-1	男性	熟年	160.83cm
17-2	女性	壮年	—
18	女性	壮年	—
19	—	小児（12歳前後）	—
20	男性	壮年	166.66cm
21	女性	不明	—
22	—	小児（15歳前後）	—
23	男性	壮年	158.95cm
24	男性	不明	—
25	女性	壮年	148.12cm
26	男性	壮年	159.51cm
27	—	小児（10歳前後）	—
29	男性	不明	—
30	男性	不明	—
31	男性	熟年	156.51cm
32	男性	壮年	—
33	男性	熟年	—
34	女性	不明	—
35	男性	不明	—
36	女性	壮年	150.84cm
37	男性	壮年	152.56cm
38	—	小児（12歳前後）	—
39	—	幼児（4歳前後）	—
40	—	幼児（4.5歳前後）	—
41	女性	老年	—
42	女性	壮年	152.20cm
43	—	幼児（1歳前後）	—
44	男性	不明	—
45	男性	不明	160.08cm

(28は欠番，推定身長値は Pearson 式を用いて大腿骨最大長から算出)

表 3　年齢区分　(Table 3. Division of age)

年齢区分		年　齢	備　　考
未成人	乳児	1歳未満	
	幼児	1歳～5歳	(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳	(第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳	(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成　人	壮年	21歳～39歳	(40歳未満)
	熟年	40歳～59歳	(60歳未満)
	老年	60歳以上	

なお，年齢の詳細については，土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(松下，1996)を参照していただきたい。

なお，今回の報告書では比較資料として，北九州市の上清水(松下・他，1992)，同じく宗玄寺跡(松下，1995)と普済院跡（松下，1996)，福岡市の天福寺(中橋，1987)の各遺跡から出土した近世人骨と西北九州の近・現代人を用いた。

所　　見

各骨の計測値およびその平均値は文末に一括して掲げた。

Ⅰ．男性

1．頭蓋

(1)　脳頭蓋

脳頭蓋の計測値は，頭蓋最大長が185.88mm（16例)，頭蓋最大幅は134.69mm（16例)，バジオン・ブレグマ高は136.57mm（14例）である。頭蓋長幅示数は72.55（16例)，頭蓋長高示数は73.65（14例)，頭蓋幅高示数は101.38（14例）となり，頭型は dolicho-，ortho-，akrokran（長，中，尖頭）に属している。また，頭蓋水平周は519.94mm（16例)，横弧長は308.88mm（16例)，正中矢状弧長は380.50mm（14例）である。

(2)　顔面頭蓋

顔面頭蓋の計測値は，顔長が96.40mm（10例)，頬骨弓幅は137.22mm（9例)，中顔幅は100.75mm（12例)，顔高は119.00mm（10例)，上顔高は66.44mm（9例）で，顔示数は86.83（K）（6例)，117.90（V）（8例)，上顔示数は48.65（K）（6例)，67.47（V）（8例）となり，顔面には低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は44.62mm（右）（13例)，43.00mm（左）（13例)，眼窩高は34.64mm（右）（11例)，34.93mm（左）（14例）で，眼窩示数は77.52（右）（11例)，80.72（左）（12例）となり，両側とも mesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は25.67mm（12例)，鼻高は53.38mm（13例）で，鼻示数は48.54（11例）となり，mesorrhin（中

鼻）に属している。

鼻根部の計測値は，前眼窩間幅が16.64mm（14例），鼻根横弧長は21.08mm（12例），鼻根彎曲示数は79.84（12例）となり，鼻根部は扁平ではない。両眼窩幅は98.92mm（12例）で，眼窩間示数は17.12（12例）となり，眼窩間幅は狭い。鼻骨最小幅は8.21mm（14例）で，前頭突起水平傾斜角は79.08度（13例）を示し，前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は136.75度（4例），鼻根陥凹示数は18.46（4例）で，鼻頬骨角は144.93度（14例）である。

側面角は，全側面角が86.00度（10例），鼻側面角が88.27度（11例），歯槽側面角は76.20度（10例）で，歯槽性突顎の傾向はきわめて弱い。

2．四肢骨

(1)　上肢骨

①上腕骨

計測値は，最大長が292.75mm（右）（8例），289.50mm（左）（8例），骨体最小周は63.00mm（右）（18例），63.07mm（左）（15例），中央周は66.89mm（右）（18例），66.73mm（左）（15例）で，長厚示数は21.70（右）（8例），21.57（左）（8例）である。また，中央最大径は22.28mm（右）（18例），22.33mm（左）（15例），中央最小径は17.39mm（右）（18例），17.67mm（左）（15例）で，骨体断面示数は78.24（右）（18例），79.26（左）（15例）となり，骨体の扁平性はあまり強くない。

(2)　下肢骨

①大腿骨

計測値は，最大長が418.25mm（右）（12例），413.00mm（左）（9例），骨体中央周は84.88mm（右）（16例），85.13mm（左）（15例）で，長厚示数は20.78（右）（12例），21.00（左）（9例）となり，骨体は頑丈ではない。骨体中央矢状径は27.50mm（右）（16例），27.60mm（左）（15例），横径は26.19mm（右）（16例），26.40mm（左）（15例）で，骨体中央断面示数は105.25（右）（16例），104.78（左）（15例）となり，粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。また，上骨体断面示数は75.53（右）（16例），75.68（左）（15例）となり，骨体上部は扁平である。

②脛骨

計測値は，脛骨最大長が341.75mm（右）（8例），336.75mm（左）（8例），骨体周は79.81mm（右）（16例），79.88mm（左）（16例），最小周は72.73mm（右）（15例），72.87mm（左）（15例）で，骨体は細く，長厚示数は22.23（右）（8例），21.96（左）（8例）である。中央最大径は29.19mm（右）（16例），29.19mm（左）（16例），中央横径は21.38mm（右）（16例），21.25mm（左）（16例）で，中央断面示数は73.29（右）（16例），73.05（左）（16例）となり，骨体には扁平性は認められない。

II．女性

1．頭蓋

(1)　脳頭蓋

脳頭蓋の計測値は，頭蓋最大長が178.83mm（12例），頭蓋最大幅は128.73mm（11例），バジオン・ブレグマ高は130.91mm（11例）である。頭蓋長幅示数は72.24（11例），頭蓋長高示数は73.43（11例），頭蓋幅高示数は101.73（11例）となり，頭型は dolicho-，ortho-，akrokran（長，中，尖頭）に属している。また，頭蓋水平周は496.30mm（10例），横弧長は294.91mm（11例），正中矢状弧長は365.45mm（11例）である。

(2)　顔面頭蓋

顔面頭蓋の計測値は，顔長が97.78mm（9例），頬骨弓幅は125.83mm（6例），中顔幅は92.89mm（9例），顔高は114.78mm（9例），上顔高は65.22mm（9例）で，顔示数は92.59（K）（5例），122.69（V）（8例），上顔示数は53.12（K）（6例），70.27（V）（9例）となり，顔面には高・狭顔傾向が認められる。

眼窩幅は41.40mm（右）（10例），40.67mm（左）（9例），眼窩高は34.67mm（右）（9例），34.43mm（左）（7例）で，眼窩示数は84.13（右）（9例），84.59（左）（7例）となり，両側とも mesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は24.30mm（10例），鼻高は49.22mm（9例）で，鼻示数は49.55（9例）となり，mesorrhin（中鼻）に属している。

鼻根部の計測値は，前眼窩間幅が17.30mm（10例），鼻根横弧長は19.56mm（9例），鼻根彎曲示数は88.70（9例）となり，鼻根部はやや扁平である。両眼窩幅は93.22mm（9例）で，眼窩間示数は18.22（9例）となり，眼窩間幅は狭い。鼻骨最小幅は8.56mm（9例）で，前頭突起水平傾斜角は82.43度（7例）を示し，前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は138.00度（6例），鼻根陥凹示数は11.40（5例）で，鼻頬骨角は145.67度（9例）である。

側面角は，全側面角が83.38度（8例），鼻側面角が87.13度（8例），歯槽側面角は71.75度（8例）で，歯槽性突顎の傾向は弱い。

2．四肢骨

(1)　上肢骨

①上腕骨

計測値は，最大長が281.33mm（右）（6例），273.63mm（左）（8例），骨体最小周は55.27mm（右）（11例），55.60mm（左）（10例），中央周は58.75mm（右）（12例），58.60mm（左）（10例）で，長厚示数は20.20（右）（6例），20.76（左）（8例）である。また，中央最大径は20.64mm（右）（11例），19.82mm（左）（11例），中央最小径は14.73mm（右）（11例），14.82mm（左）（11例）で，骨体断面示数は71.52（右）（11例），74.93（左）（11例）となり，骨体は扁平である。

(2)　下肢骨

①大腿骨

計測値は，最大長が386.29mm（右）（7例），387.67mm（左）（9例），骨体中央周は75.00mm（右）（13例），75.69mm（左）（13例）で，長厚示数は19.90（右）（7例），19.72（左）（8例）となり，骨体はきゃしゃである。骨体中央矢状径は24.77mm（右）（13例），24.62mm（左）（13例），横径は22.77mm（右）（13例），23.54mm（左）（13例）で，骨体中央断面示数は108.99（右）（13例），104.73（左）（13例）となり，粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。また，上骨体断面示数は76.74（右）（12例），75.15（左）（12例）となり，骨体上部は扁平である。

②脛骨

計測値は，脛骨最大長が309.57mm（右）（7例），310.00mm（左）（7例），骨体周は72.83mm（右）（12例），73.36mm（左）（11例），最小周は66.67mm（右）（12例），66.55mm（左）（11例）で，骨体は細く，長厚示数は22.17（右）（7例），21.95（左）（7例）である。中央最大径は26.17mm（右）（12例），26.73mm（左）（11例），中央横径は19.67mm（右）（12例），19.55mm（左）（11例）で，中央断面示数は75.61（右）（12例），73.13（左）（11例）となり，骨体には扁平性は認められない。

Ⅲ．推定身長値

各四肢骨の最大長などからPearsonと藤井の公式を算出し，平均値を出したものが表32である。

Pearsonの公式を用いて大腿骨最大長から推定身長値を算出してみると，男性の平均値は159.94cm（12例），女性では148.12cm（10例）となり，男性は160cm以下，女性は150cm以下で，ともに低身長ではあるが，男性はほぼ160cmだし，女性も西北九州弥生人なみで，身長はけっして低くはない。

Ⅳ．形態小変異

頭蓋の形態小変異と上腕骨の滑車上孔の出現頻度を表33に示した。

考　　察

1．頭蓋

まず，頭型を検討してみたい。男女とも頭蓋長幅示数は75.00よりも小さく，長頭型に属している。周辺地域の近世人との比較を表4と5で行なってみた。同じ近世人でも頭蓋長幅示数に違いがあることがわかる。長頭型に属しているのは男女とも白浜，上清水，桑島，松之尾で，中頭型なのは宗玄寺，天福寺，古市，湯島である。後者は北九州市，福岡市，東広島市，東京都で，当時としても都市化した地域である。一方，前者は五島列島，北九州市の南部，天草，川内市という列島の辺縁部である。男女ともにまったく同じ傾向を示していることは，非常に興味深い。長頭性が強まるのは中世であるが，この長頭性が列島周辺部では長く残る傾向にあることを示唆している。

次に，顔面頭蓋を検討してみたい。表6は男性の比較表であるが，これをみると，顔高が120mmを超

え，上顔高が70mmを超える高顔グループ(宗玄寺，天福寺，桑島，湯島)と120mm以下か，ぎりぎり120mmで，上顔高が70mm以下の低顔グループ（白浜，上清水，松之尾，古市）の二グループに分かれることがわかる。これはそのまま顔示数や上顔示数が大きいものと小さいものになり，顔面の形態では，高顔と低顔にはっきり二分される。白浜近世人は低顔グループに属しているのである。

ところが，女性では表７に示すように，白浜近世人の顔高は約115mmで，上顔高は65mmを超え，顔示数(V)は120を，上顔示数(V)も70を超え，高顔グループに属しており，男性とは異なる結果となった。

鼻根部は，男性はあまり扁平ではないが，女性では扁平性が強く(表８，９)，前頭突起の向きは男女ともやや矢状方向を呈している。

２．四肢骨

上腕骨は男性の長さは宗玄寺の次に短く(表10)，中央周は宗玄寺や上清水と大差なく，それほど太くないし，扁平性も弱い。一方，女性の上腕骨は長さがもっとも長く(表11)，太さもそれほど太くないが，扁平である。

大腿骨は，男性の長さは古市の次に長く(表12)，周径は小さい方で，宗玄寺や田原に近い。骨体中央断面示数は100を超えるが，大きい値ではない。骨体上部は扁平である。女性の大腿骨の長さは桑島の次に長く，周径は宗玄寺にもっとも近く，それほど太くない。骨体中央断面示数は近世人にしてはやや大きく，骨体上部は扁平である（表13)。

脛骨は，男性の長さは古市の次に長い(表14)。骨体の太さは古市と田原より小さく，その他とは大差ない。女性の長さは短く，骨体の太さは桑島に次いで大きい(表15)。男性の中央断面示数については，男性は宗玄寺と上清水および白浜は他と比較して小さく，女性はこの三近世人の値はやや大きい。

３．推定身長値

大腿骨から算出した身長値（Pearson 式）を検討してみた（表16)。男性は12例の平均値が159.94cmで，約160cmである。古市が162.33cmで，もっとも高く，本例は天福寺の159.4cmにもっとも近い値を示しており，宗玄寺よりも高く，近世人としては高い方である。一方，女性（表17）の10例の平均値は148.12cmとなり，この値は西北九州弥生人なみの値で，宗玄寺や上清水よりも高く，女性も近世人としては背が高い方である。

要　　約

長崎県南松浦郡有川町頭ヶ島に所在する白浜遺跡の発掘調査が1995年に行なわれ，近世人骨45体が発掘された。墓地が砂丘上に営まれていたために保存状態はきわめて良好である。西北九州地域の近世人の貴重な資料であり，今後の近世人の研究にとって欠かすことのできない資料となるものと考えられる。人類学的観察と計測を行ない，次の結果を得た。

1．今回の調査で検出し，取り上げた人骨は合計45体で，そのうちの38体が成人骨で，残りの7体（15.6%）は幼小児骨である。成人骨のうち，男性骨は22体，女性骨は16体であった。

2．頭蓋長幅示数は，男性が72.55（16例），女性は72.24（11例）となり，男女ともに頭型は長頭型に属している。

3．男性の顔面は低・広顔であるが，女性の顔面には高・狭顔傾向が認められる。

4．眼窩，鼻部は男女ともに高径が高い。

5．歯槽性突顎の傾向は男女とも弱い。

6．男女とも四肢骨の長さは長いが，周径はそれほど太くない。

7．大腿骨からの推定身長は，男性が159.94cm（12例），女性は148.12cm（10例）となり，男女とも著しい低身長値ではない。

8．近世人骨の出土例は関東地方が多かったが，近年，九州・山口でも数が増えてきた。しかし，一度に発掘される数はまだ多くはない。北九州市では近世遺跡の考古学的な調査が行なわれているので，出土例数が多くなってきたが，数が多くなっただけではなく，被葬者の所属階層も次第に明確になりつつある。

今回白浜遺跡で出土した人骨は北部九州だけに片寄っていた資料の空白部分を埋める意味からも重要である。同じ近世でも都市化が進んだ地域とそれが遅れた地方との差が次第に明らかになってきたようである。白浜近世人の場合，女性の顔面に高・狭顔傾向が認められたことが気になっている。本報告では平均値だけの検討しかできなかったが，個々に取り上げておくべき個体が存在することも指摘しておきたい。この地に埋葬された人々がどのような人たちであったのかを，文献資料などでできる限り調査して，形質的特徴をそれに重ね合わせていかなければ，彼らの全体像はわからないが，それはまた別の機会にしたい。

謝　　辞

擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育庁文化課および有川町教育委員会の諸先生方に感謝いたします。

参考文献

1．栄田和行，1967：西北九州人大腿骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌，42：313-324.
2．藤田恒太郎，1949：歯の計測規準について。人類学雑誌，61：27-32.
3．藤田恒太郎，1965：歯の話。岩波書店。東京：57-98.
4．久松巌，1969：西北九州人脛骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌，44：718-728.
5．金田義夫，1957：日本人永久歯における歯根完成時期の研究。歯科月報，30：165-172.
6．Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag, Stuttugart：429-597.
7．松下孝幸，1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨。松之尾遺跡（枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)）：215-228.
8．松下孝幸，石田肇，佐熊正史，用丸英博，1983a：成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨。成岡・西ノ平・上ノ

原遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書28）：355-382.
9．松下孝幸，分部哲秋，石田肇，内藤芳篤，永井昌文，1983b：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第７次調査概報（豊北町埋蔵文化財調査報告２）：19-30.
10．松下孝幸，分部哲秋，中谷昭二，1985：長崎県松浦市楼階田遺跡出土の近世人骨。楼階田遺跡―松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―（長崎県文化財調査報告書第76集）：191-196.
11．松下孝幸，佐伯和信，1992a：北九州市上清水遺跡出土の近世人骨。上清水遺跡Ⅴ区（奈良時代以降編）（北九州市埋蔵文化財調査報告書第117集）：416-441.
12．松下孝幸，分部哲秋，佐伯和信，太田純二，折原義行，小山田常一，1992b：東広島市古市遺跡出土の近世人骨。西城第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ（東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集）：105-126.
13．松下孝幸，1995：北九州市宗玄寺跡出土の近世人骨。宗玄寺跡（北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集）502-542.
14．松下孝幸，1996：北九州市普済院跡出土の近世人骨。（印刷中）
15．松下孝幸，1996：土井ヶ浜遺跡第14次調査出土の中世・弥生時代人骨。土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書：24-50.
16．森田茂，河越逸行，1960：湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究補遺。人類誌，67：38-55.
17．中橋孝博，1987：福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨。人類誌，95：89-106.
18．佐伯和信，松下孝幸，小山田常一，分部哲秋，折原義行，1991：長崎県松浦市田原遺跡出土の近世人骨。田原遺跡（竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）（松浦市文化財調査報告書第10集）：37-49. 70-71.
19．鈴木尚，1963：日本人の骨。岩波書店，東京。
20．立志悟朗，1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人上腕骨の人類学的研究。熊本医学会雑誌，44：1137-1150.
21．立志悟朗，1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究。第１　大腿骨について。熊本医学会雑誌，44：1092-1115.
22．立志悟朗，1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究。第２　下腿骨について。熊本医学会雑誌，44：1116-1129.
23．脇達也，1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究。熊本医学会雑誌，44：1031-1091.
24．八木治，1970：西北九州人上腕骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌，45：22-33.

表 4　脳頭蓋計測値（男性，mm）（Table 4. Comparison of male calvarial measurements and indices）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人 (松下)		上清水 近世人 (松下・他)		天福寺 近世人 (中橋)		桑島 近世人 (脇)		松之尾 中・近世人 (松下)		古市 近世人 (松下・他)		湯島 近世人 (森田・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	16	185.88	37	180.92	7	181.43	38	182.6	13	180.13	11	185.18	1	188	92	183.5
8.	頭蓋最大幅	16	134.69	45	140.49	6	132.50	38	138.6	13	131.02	12	138.42	1	144	92	141.1
17.	バジオン・ブレグマ高	14	136.57	32	141.03	3	134.33	33	139.2	11	135.88	7	137.43	1	124	91	138.5
8/1	頭蓋長幅示数	16	72.55	36	78.20	5	73.64	37	76.0	13	72.74	11	74.91	1	76.60	92	77.0
17/1	頭蓋長高示数	14	73.65	26	78.15	3	75.02	33	76.2	11	75.48	6	74.91	1	65.96	91	75.6
17/8	頭蓋幅高示数	14	101.38	29	100.51	3	100.35	33	100.8	11	104.62	7	97.78	1	86.11	91	98.2
1+8+17/3	頭蓋モズルス	14	152.26	25	154.52	3	149.22		—		—	7	153.57	1	152.00		—
23.	頭蓋水平周	16	519.94	31	518.61	3	507.00	38	519.1	12	507.75	10	527.10	1	532	91	522.2
24.	横弧長	16	308.88	36	321.25	3	304.33	37	313.8	13	307.80	8	310.75	1	307	91	324.9
25.	正中矢状弧長	14	380.50	24	380.00	1	372	33	380.6	8	371.97	7	382.29	1	370	91	377.3

表 5　脳頭蓋計測値（女性，mm）（Table 5. Comparison of female calvarial measurements and indices）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人 (松下)		上清水 近世人 (松下・他)		天福寺 近世人 (中橋)		桑島 近世人 (脇)		松之尾 中・近世人 (松下)		湯島 近世人 (森田・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	12	178.83	35	172.71	7	176.57	38	174.7	4	172.60	2	180.00	60	173.2
8.	頭蓋最大幅	11	128.73	36	136.50	8	131.50	38	133.5	4	128.50	2	134.50	60	136.8
17.	バジオン・ブレグマ高	11	130.91	27	136.33	5	128.00	35	132.7	4	132.02	1	129	59	134.1
8/1	頭蓋長幅示数	11	72.24	33	79.40	4	73.50	38	76.5	4	74.42	2	74.74	60	79.0
17/1	頭蓋長高示数	11	73.43	25	78.48	4	74.53	35	76.1	4	76.48	1	71.27	59	77.5
17/8	頭蓋幅高示数	11	101.73	27	99.61	3	97.73	35	99.4	4	102.90	1	97.73	59	98.1
1+8+17/3	頭蓋モズルス	11	145.97	25	149.07	3	144.00		—		—	1	147.33		—
23.	頭蓋水平周	10	496.30	32	498.97	1	493	36	497.4	4	492.57	1	508	60	497.3
24.	横弧長	11	294.91	34	309.03	3	295.00	35	303.0	4	294.02	1	287	60	315.1
25.	正中矢状弧長	11	365.45	25	364.48	2	352.00	34	364.2	4	356.17	1	369	58	359.9

表 6　顔面頭蓋計測値（男性，mm，度）（Table 6. Comparison of male facial measurements and indices）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人 (松下)		上清水 近世人 (松下・他)		天福寺 近世人 (中橋)		桑島 近世人 (脇)		松之尾 中・近世人 (松下)		古市 近世人 (松下・他)		湯島 近世人 (森田・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
40.	顔長	10	96.40	17	97.06	2	103.00	17	101.8	6	96.75	8	96.00	1	99	69	98.5
45.	頬骨弓幅	9	137.22	18	135.89	1	136	25	136.4	5	126.32	5	133.40	1	147	81	136.4
46.	中顔幅	12	100.75	31	98.97	3	101.00	24	101.8	7	101.14	10	100.40	1	102	91	101.6
47.	顔高	10	119.00	18	128.94	2	115.00	14	126.9	4	122.40	11	120.27	1	120	4	123.5
48.	上顔高	9	66.44	17	73.29	3	66.33	18	74.5	7	70.54	8	66.75	1	68	65	71.8
47/45	顔示数(K)	6	86.83	10	93.31		—	13	93.2	2	93.65	5	87.93	1	81.63	4	91.7
48/45	上顔示数(K)	6	48.65	8	54.41		—	17	54.4	5	55.40	3	48.74	1	46.26	56	53.0
47/46	顔示数(V)	8	117.90	17	130.13	1	107.69	13	123.9	3	115.80	10	120.04	1	117.65		—
48/46	上顔示数(V)	8	67.47	16	73.51	2	66.14	17	73.1	7	70.15	7	67.50	1	66.67	64	70.9
40+45+47/3	顔面モズルス	6	118.17	6	123.50		—		—		—	4	115.84	1	122.00		—
50.	前眼窩間幅	14	16.64	27	17.67	7	17.71		—	6	20.48	9	17.11	1	17		—
44.	両眼窩幅	12	98.92	25	99.32	5	98.80		—	6	97.70	8	96.38	1	106		—
50/44	眼窩間示数	12	17.12	25	17.96	5	18.24		—	5	20.64	8	17.63	1	16.04		—
51.	眼窩幅(左)	13	43.00	29	43.72	6	43.00	24	42.6	7	40.90	9	42.89	1	48	95	43.3
52.	眼窩高(左)	14	34.93	34	36.09	6	32.83	24	34.1	8	34.38	9	33.67	1	37	95	35.1
52/51	眼窩示数(左)	12	80.72	29	83.09	6	76.51	23	80.9	6	83.60	9	78.58	1	77.08	95	81.6
54.	鼻幅	12	25.67	28	25.43	4	26.25	24	26.5	8	25.90	11	25.73	1	25	93	25.1
55.	鼻高	13	53.38	31	55.45	4	48.50	24	52.9	8	50.52	12	52.83	1	50	93	53.6
54/55	鼻示数	11	48.54	28	45.86	4	54.19	24	50.1	8	51.34	11	48.81	1	50.00	91	48.7
72.	全側面角	10	86.00	12	83.00	2	81.50	16	83.2	7	80.41	9	83.11	1	89	71	85.1
73.	鼻側面角	11	88.27	27	86.85	3	83.33		—	6	86.36	10	86.50	1	93		—
74.	歯槽側面角	10	76.20	12	77.83	2	71.00	16	67.0	8	64.53	9	70.78	1	79	71	68.4

表 7　顔面頭蓋計測値（女性，mm，度）（Table 7. Comparison of female facial measurements and indices）

		白浜 近世人		普済院 近世人 (松下)		宗玄寺 近世人 (松下)		上清水 近世人 (松下・他)		天福寺 近世人 (中橋)		桑島 近世人 (脇)		松之尾 中・近世人 (松下)		湯島 近世人 (森田・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
40.	顔長	9	97.78		—	13	93.92	6	94.33	20	95.1	2	102.00		—	38	92.5
45.	頬骨弓幅	6	125.83		—	16	125.19		—	30	126.5		—		—	44	125.9
46.	中顔幅	9	92.89	1	〔94〕	21	93.00	4	90.50	25	95.5	2	91.55	2	91.50	54	95.1
47.	顔高	9	114.78		—	15	116.07	4	109.25	15	115.9	2	117.65	2	107.00	3	119.0
48.	上顔高	9	65.22		—	15	65.73	6	61.33	22	68.8	2	71.40	1	59	38	68.3
47/45	顔示数(K)	5	92.59		—	8	94.67		—	15	91.1		—		—		—
48/45	上顔示数(K)	6	53.12		—	10	53.47		—	22	54.3		—		—	32	54.5
47/46	顔示数(V)	8	122.69		—	12	126.75	4	120.90	15	120.9	2	128.58	2	117.53		—
48/46	上顔示数(V)	9	70.27		—	13	72.02	4	67.98	22	71.8	2	78.04		—	35	72.3
40+45+47/3	顔面モズルス	5	114.67		—	7	110.57		—		—		—		—		—
50.	前眼窩間幅	10	17.30		—	27	16.00	7	15.71		—	2	17.95	1	16		—
44.	両眼窩幅	9	93.22		—	23	93.96	4	93.25		—	2	93.05		—		—
50/44	眼窩間示数	9	18.22		—	23	16.93	4	17.93		—	2	19.15		—		—
51.	眼窩幅(左)	9	40.67	1	39(右)	27	41.74	6	41.00	30	40.5	2	39.75	1	41	54	41.9
52.	眼窩高(左)	7	34.43	1	32(右)	27	35.22	6	32.33	30	34.3	2	34.70	1	34	54	35.3
52/51	眼窩示数(左)	7	84.59	1	82.05(右)	26	84.31	6	78.87	29	84.8	2	87.29	1	82.93	54	84.7
54.	鼻幅	10	24.30		—	26	24.46	5	25.60	26	25.3	2	24.15	2	23.50	52	24.6
55.	鼻高	9	49.22		—	26	50.19	6	45.83	28	49.9	2	49.90	2	48.00	52	50.4
54/55	鼻示数	9	49.55		—	26	48.84	5	55.78	26	51.0	2	48.36	2	48.92	50	49.2
72.	全側面角	8	83.38		—	17	83.47	6	84.17	18	82.5	2	76.90	2	80.50	46	83.7
73.	鼻側面角	8	87.13		—	24	87.04	6	89.00		—	2	83.10	2	86.00		—
74.	歯槽側面角	8	71.75		—	16	72.63	6	68.83	17	65.0	2	63.70	2	58.00	46	67.1

表 8　鼻根部計測値（男性，mm，度）（Table 8. Comparison of male nasal root measurements and indices）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人（松下）		上清水 近世人（松下・他）		松之尾 中・近世人（松下）		古市 近世人（松下・他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
50.	前眼窩間幅	14	16.64	26	17.62	7	17.71	9	17.11	1	17
50A	鼻根横弧長	12	21.08	24	21.25	7	19.71	8	18.75	1	19
50/50A	鼻根彎曲示数	12	79.84	24	82.96	7	90.01	8	91.43	1	89.47
57.	鼻骨最小幅	14	8.21	26	7.38	8	7.00	9	7.11	1	8
44.	両眼窩幅	12	98.92	24	99.29	5	98.80	8	96.38	1	106
50/44	眼窩間示数	12	17.12	24	17.92	5	18.24	8	17.63	1	16.04
a.	前頭突起上幅（右）	13	10.54	21	9.43	8	10.13	11	9.73	1	12
	（左）	13	10.00	23	9.30	8	10.50	10	9.60	1	11
b.	前頭突起水平傾斜角	13	79.08	20	98.50	4	99.00	8	81.25	1	95
c.	G－N投影距離	15	2.67	21	2.33	4	2.75	9	2.89	1	4
d.	鼻根角	4	136.75	14	138.29	3	141.67	3	138.00	1	152
e.	G－R距離	4	34.25	14	34.36	3	28.33	3	29.67	1	41
f.	垂線高	4	6.25	13	5.85	3	4.67	2	3.50	1	5
f/e	鼻根陥凹示数	4	18.46	12	16.24	3	16.90	2	12.25	1	12.20
77	鼻頬骨角	14	144.93	23	147.22		—		—		—
	顔面扁平示数	12	14.94	23	14.64		—		—		—

表 9　鼻根部計測値（女性，mm，度）
（Table 9. Comparison of female nasal root measurements and indices）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人（松下）		上清水 近世人（松下・他）		桑島 近世人（脇）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
50.	前眼窩間幅	10	17.30	26	16.12	7	15.71	2	17.95
50A	鼻根横弧長	9	19.56	25	19.20	7	17.71		—
50/50A	鼻根彎曲示数	9	88.70	24	84.69	7	88.97		—
57.	鼻骨最小幅	9	8.56	24	7.29	8	7.50	2	6.95
44.	両眼窩幅	9	93.22	24	94.21	4	93.25	2	93.05
50/44	眼窩間示数	9	18.22	24	17.01	4	17.93	2	19.15
a.	前頭突起上幅（右）	9	9.44	26	9.23	7	8.86		—
	（左）	9	8.44	26	12.65	7	9.00		—
b.	前頭突起水平傾斜角	7	82.43	23	88.48	6	87.17		—
c.	G－N投影距離	9	2.00	25	1.28	6	1.17		—
d.	鼻根角	6	138.00	14	144.79	3	149.33		—
e.	G－R距離	5	33.60	13	35.08	3	28.67		—
f.	垂線高	5	3.80	13	4.54	3	3.33		—
f/e	鼻根陥凹示数	5	11.40	13	13.01	3	11.73		—
77	鼻頬骨角	9	145.67	22	147.32		—		—
	顔面扁平示数	9	15.03	22	13.98		—		—

表10　上腕骨計測値（男性，右，mm）（Table 10. Comparison of measurements and indices of male right humeri）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人（松下）		上清水 近世人（松下・他）		古市 近世人（松下・他）		桑島 近世人（脇）		松之尾 中・近世人（松下）		西北九州 近・現代人（八木）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	8	292.75	23	290.61	1	(301)	1	310	11	293.17	6	299.83	72	296.35
5.	中央最大径	18	22.28	57	22.05	11	22.91	1	24	16	22.00	6	21.33	72	23.56
6.	中央最小径	18	17.39	57	17.16	11	17.00	1	19	16	16.69	6	15.83	72	17.68
7.	骨体最小周	18	63.00	49	61.84	8	61.25	1	69	15	66.22	17	60.24	72	65.53
7(a).	中央周	18	66.89	57	65.74	11	66.91	1	71	15	71.28	6	62.00	72	68.78
6/5	骨体断面示数	18	78.24	57	78.01	11	74.32	1	79.17	16	75.90	6	74.44	72	75.06
7/1	長厚示数	8	21.70	18	21.39	1	(20.60)	1	22.26	10	22.39	6	19.32	72	22.10

表11　上腕骨計測値（女性，右，mm）（Table 11. Comparison of measurements and indices of female right humeri）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人（松下）		上清水 近世人（松下・他）		松之尾 中・近世人（松下）		桑島 近世人（立志）		西北九州 近・現代人（八木）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	6	281.33	12	269.83	1	262		—	6	274.9	44	273.35
5.	中央最大径	11	20.64	44	19.80	14	20.93	4	19.75	6	18.5	44	20.20
6.	中央最小径	11	14.73	44	14.66	14	14.71	4	14.50	6	14.4	44	14.91
7.	骨体最小周	11	55.27	36	54.47	8	55.50	4	54.25	6	57.7	44	55.93
7(a).	中央周	12	58.75	44	57.64	14	60.07	4	57.75	6	60.9	44	58.48
6/5	骨体断面示数	11	71.52	44	74.27	14	70.49	4	73.49	6	78.27	44	73.84
7/1	長厚示数	6	20.20	9	20.20	1	16.41		—	6	21.00	44	20.47

表12　大腿骨計測値（男性，右，mm）（Table 12. Comparison of measurements and indices of male right femora）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人 (松下)		上清水 近世人 (松下・他)		古市 近世人 (松下・他)		田原 近世人 (佐伯・他)		桑島 近世人 (立志)		松之尾 中・近世人 (松下)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		西北九州 近・現代人 (栄田)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	最大長	12	418.25	23	407.83		—	1	431		—	10	412.18	11	411.73		—	52	412.75
2.	自然位全長	12	415.25	24	401.75		—	1	425		—	10	407.12	11	408.00		—	52	409.02
6.	骨体中央矢状径	16	27.50	45	26.78	8	26.63	1	29	1	28	14	26.29	11	26.55	3	28.00	52	27.79
7.	骨体中央横径	16	26.19	45	25.93	8	29.38	1	34	1	26	14	24.66	11	25.64	4	29.00	52	25.81
8.	骨体中央周	16	84.88	44	83.41	8	88.50	1	101	1	84	14	80.61	11	82.64	3	90.33	52	83.46
9.	骨体上横径	16	32.31	47	31.28	9	33.56	1	40	1	31	14	29.58		—	4	33.25	52	28.21
10.	骨体上矢状径	16	24.38	47	24.49	9	24.11	1	26	1	23	15	23.01		—	2	26.00	52	27.02
8/2	長厚示数	12	20.78	16	20.87		—	1	23.76		—	10	20.12	11	20.28		—	52	20.43
6/7	骨体中央断面示数	16	105.25	45	103.32	8	91.51	1	85.29	1	107.69	14	107.09	11	104.03	3	98.12	52	108.04
10/9	上骨体断面示数	16	75.53	47	78.57	9	72.65	1	65.00	1	74.19	14	77.60	14	77.35	2	79.08	52	96.54

表13　大腿骨計測値（女性，右，mm）（Table 13. Measurements and indices of female right femora）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人 (松下)		上清水 近世人 (松下・他)		松之尾 中・近世人 (松下)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		桑島 近世人 (立志)		西北九州 近・現代人 (栄田)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	最大長	7	386.29	15	370.93	3	371.67		—		—	5	398.48	29	375.30
2.	自然位全長	7	383.14	14	367.64	1	362		—		—	5	393.98	29	371.42
6.	骨体中央矢状径	13	24.77	49	23.22	17	22.24	3	22.67	1	23	7	24.27	30	24.23
7.	骨体中央横径	13	22.77	49	23.86	17	25.76	3	23.67	1	27	7	22.79	30	22.93
8.	骨体中央周	13	75.00	49	74.18	17	76.88	3	73.67	1	81	7	76.59	30	73.13
9.	骨体上横径	12	28.50	51	27.88	17	29.59		—		—	6	27.02	30	24.67
10.	骨体上矢状径	12	21.83	50	21.36	17	20.76		—		—	6	21.37	30	24.67
8/2	長厚示数	7	19.90	6	20.54	1	19.89		—		—	5	19.70	29	19.73
6/7	骨体中央断面示数	13	108.99	49	97.57	17	86.56	3	96.25	1	85.19	7	107.13	30	106.07
10/9	上骨体断面示数	12	76.74	50	77.34	17	70.42	3	73.73		—	6	78.97	30	100.74

表14　脛骨計測値（男性，右，mm）（Table 14. Comparison of measurements and indices of male right tibiae）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人 (松下)		上清水 近世人 (松下・他)		古市 近世人 (松下・他)		田原 近世人 (佐伯・他)		桑島 近世人 (立志)		松之尾 中・近世人 (松下)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		西北九州 近・現代人 (久松)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	8	336.88	21	326.19	1	346	1	352		—	14	336.47	7	317.14		—	72	331.88
1a.	脛骨最大長	8	341.75	22	332.55	2	(339.50)	1	360		—	15	340.42	7	324.57		—	72	339.12
8.	中央最大径	16	29.19	43	28.02	10	28.90	1	32	1	31	19	27.02		—	1	29(左)	72	28.52
8a.	栄養孔位最大径	15	33.07	41	32.00	7	32.71	1	35		—		—		—	1	31(左)	72	31.02
9.	中央横径	16	21.38	43	20.51	10	20.60	1	25	1	20	19	20.18		—	1	23(左)	72	21.55
9a.	栄養孔位横径	15	23.80	43	22.74	8	22.50	1	27		—		—		—	1	24(左)	72	24.71
10.	骨体周	16	79.81	43	77.02	10	79.40	1	91	1	85	19	80.36		—	1	81(左)	72	80.45
10a.	栄養孔位周	15	89.53	41	87.10	7	90.00	1	99		—	19	88.95		—	1	88(左)	72	89.10
10b.	最小周	15	72.73	43	70.00	7	70.71	1	79		—	18	73.47		—	1	70(左)	72	71.64
9/8	中央断面示数	16	73.29	43	73.31	10	71.49	1	78.13	1	64.52	19	74.89		—	1	79.31(左)	72	75.76
9a/8a	栄養孔位断面示数	15	72.40	41	71.44	7	70.11	1	77.14		—		—		—	1	77.42(左)	72	79.81
10b/1	長厚示数	8	22.23	15	21.68	1	20.23	1	22.44		—	14	22.04		—		—	72	21.76

表15　脛骨計測値（女性，右，mm）（Table 15. Comparison of measurements and indices of female right tibiae）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人 (松下)		上清水 近世人 (松下・他)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		桑島 近世人 (立志)		西北九州 近・現代人 (久松)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	7	303.00	9	305.67	1	280		—	4	321.65	40	301.89
1a.	脛骨最大長	7	309.57	11	312.55	3	306.33		—	4	326.05	40	309.02
8.	中央最大径	12	26.17	34	24.03	12	24.50	2	26.50	5	25.66	40	25.02
8a.	栄養孔位最大径	11	29.27	32	27.81	11	28.55	2	31.00		—	40	28.22
9.	中央横径	12	19.67	34	17.68	12	18.42	2	18.50	5	18.54	40	19.68
9a.	栄養孔位横径	11	21.73	32	19.53	11	20.36	2	21.50		—	40	21.66
10.	骨体周	12	72.83	34	66.65	12	69.25	1	70	5	75.76	40	70.11
10a.	栄養孔位周	11	79.82	32	75.38	11	79.09	2	82.50	5	82.08	40	79.03
10b.	最小周	12	66.67	34	61.12	8	63.88	1	66	5	69.06	40	63.61
9/8	中央断面示数	12	75.61	34	73.69	12	75.19	2	70.36	5	72.50	40	78.72
9a/8a	栄養孔位断面示数	11	74.32	32	70.49	11	71.59	2	69.96		—	40	76.90
10b/1	長厚示数	7	22.17	8	20.11	1	21.79		—	4	21.79	40	21.17

表16　推定身長値（男性，cm）（Table 16. Comparison of estimated male statures）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人		上清水 近世人 (松下・他)		古市 近世人 (松下・他)		天福寺 近世人 (中橋)		松之尾 中・近世人 (松下)		土井ケ浜 弥生人 (財津)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearson の式	上腕骨	10	155.44	32	155.79	1	(157.75)	1	160.36		—		—	16	157.50
	橈骨	9	160.14	35	157.85		—	1	166.06		—		—	23	162.73
	大腿骨	12	159.94	29	157.82		—	1	162.33	24	159.4	11	158.71	18	162.81
	脛骨	11	158.43	25	156.84	1	160.87	1	164.20		—		—	10	162.05

表17　推定身長値（女性，cm）
（Table 17. Comparison of estimated female statures）

		白浜 近世人		宗玄寺 近世人		上清水 近世人 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M
Pearson の式	上腕骨	8	147.62	17	145.72	1	143.63
	橈骨	9	149.20	21	146.95		—
	大腿骨	10	148.12	19	145.22	4	145.15
	脛骨	7	146.04	13	146.22	2	143.45

表18　白浜一脳頭蓋計測値（mm）（Calvaria）

		男性				女性			
		平均			Max.—Min.	平均			Max.—Min.
		n	M	σ		n	M	σ	
1.	頭蓋最大長	16	185.88	6.77	199 —174	12	178.83	4.67	187 —171
8.	頭蓋最大幅	16	134.69	4.51	142 —125	11	128.73	2.76	133 —125
17.	バジオン・ブレグマ高	14	136.57	7.05	149 —124	11	130.91	4.68	143 —126
8/1	頭蓋長幅示数	16	72.55	3.65	78.45— 66.83	11	72.24	2.27	77.19— 69.02
17/1	頭蓋長高示数	14	73.65	1.94	76.84— 70.17	11	73.43	1.62	76.47— 71.19
17/8	頭蓋幅高示数	14	101.38	6.24	112.03— 91.37	11	101.73	3.93	108.33— 96.21
1+8+17/3	頭蓋モズルス	14	152.26	4.71	160.33—141.00	11	145.97	3.13	154.00—143.00
5.	頭蓋底長	14	103.21	3.96	111 — 97	11	98.45	5.15	103 — 85
9.	最小前頭幅	15	95.20	4.33	102 — 86	10	90.60	3.72	97 — 85
10	最大前頭幅	14	113.29	5.20	121 —102	9	105.33	3.81	112 —100
11.	両耳幅	16	125.94	4.71	134 —119	11	118.36	4.23	124 —112
12.	最大後頭幅	14	110.21	5.59	123 —102	11	105.55	2.91	109 —101
13.	乳突幅	14	102.79	4.37	112 — 97	10	95.20	4.29	100 — 88
7.	大後頭孔長	13	35.69	2.50	41 — 32	11	33.45	2.84	38 — 29
16.	大後頭孔幅	10	29.50	2.84	34 — 24	10	28.60	2.80	32 — 22
16/7	大後頭示数	10	83.86	9.97	106.25— 72.73	10	84.73	6.94	93.75— 72.97
23.	頭蓋水平周	16	519.94	14.06	544 —487	10	496.30	10.22	518 —485
24.	横弧長	16	308.88	11.83	325 —280	11	294.91	8.80	312 —282
25.	正中矢状弧長	14	380.50	17.03	407 —342	11	365.45	13.89	395 —343
26.	正中矢状前頭弧長	15	127.47	7.48	137 —110	11	124.36	7.17	134 —110
27.	正中矢状頭頂弧長	15	132.60	7.91	146 —117	11	125.55	8.10	135 —111
28.	正中矢状後頭弧長	14	120.36	8.71	136 —107	11	116.64	8.81	129 —103
29.	正中矢状前頭弦長	16	112.63	5.77	125 —101	11	108.64	4.78	117 —100
30.	正中矢状頭頂弦長	15	117.67	6.75	128 —106	11	113.27	5.61	120 —102
31.	正中矢状後頭弦長	14	98.29	6.32	109 — 88	11	96.00	6.28	107 — 85
29/26	矢状前頭示数	15	87.81	2.45	91.82— 82.22	11	87.43	1.94	90.91— 85.38
30/27	矢状頭頂示数	15	88.77	1.98	91.67— 84.67	11	90.36	3.63	100.00— 86.57
31/28	矢状後頭示数	14	81.72	2.04	85.05— 77.94	11	82.40	2.81	86.61— 76.19

表19　白浜一顔面頭蓋計測値（mm，度）（Facial skeleton）

		男性				女性			
		平均			Max.—Min.	平均			Max.—Min.
		n	M	σ		n	M	σ	
40.	顔　長	10	96.40	6.35	108 — 85	9	97.78	5.12	104 — 88
41.	側顔長	13	71.62	4.23	80 — 65	9	68.33	2.65	73 — 65
42.	下顔長	10	104.70	6.06	113 — 95	9	120.00	3.64	106 — 96
43.	上顔幅	14	105.00	3.35	110 —100	10	98.10	3.81	104 — 94
45.	頬骨弓幅	9	137.22	3.31	142 —133	6	125.83	4.71	132 —120
46.	中顔幅	12	100.75	4.05	108 — 95	9	92.89	3.82	99 — 86
47.	顔　高	10	119.00	6.32	128 —109	9	114.78	5.65	124 —106
48.	上顔高	9	66.44	2.35	70 — 63	9	65.22	4.29	72 — 57
47/45	顔示数(K)	6	86.83	4.70	94.07— 81.34	5	92.59	3.45	96.88— 88.64
48/45	上顔示数(K)	6	48.65	0.61	49.26— 47.76	6	53.12	2.11	56.25— 50.00
47/46	顔示数(V)	8	117.90	4.56	123.23—112.37	8	122.69	5.61	127.17—113.68
48/46	上顔示数(V)	8	67.47	1.17	69.07— 65.69	9	70.27	4.53	75.58— 61.29
40+45+47/3	顔面モズルス	6	118.17	4.38	124.67—111.67	5	114.67	3.82	117.33—108.00
50.	前眼窩間幅	14	16.64	1.55	20 — 14	10	17.30	1.49	20 — 15
44.	両眼窩幅	12	98.92	3.60	106 — 95	9	93.22	1.86	96 — 91
50/44	眼窩間示数	12	17.12	1.60	20.83— 15.53	9	18.22	1.03	19.79— 16.30
51.	眼窩幅(右)	13	44.62	1.76	47 — 42	10	41.40	0.84	43 — 40
	(左)	13	43.00	1.96	45 — 40	9	40.67	1.00	42 — 39
52.	眼窩高(右)	11	34.64	1.50	37 — 32	9	34.67	2.24	39 — 32
	(左)	14	34.93	1.77	38 — 32	7	34.43	1.62	37 — 33
52/51	眼窩示数(右)	11	77.52	3.70	83.33— 70.21	9	84.13	5.73	95.12— 76.19
	(左)	12	80.72	3.81	85.71— 73.33	7	84.59	4.02	90.00— 80.49
54.	鼻　幅	12	25.67	0.89	27 — 25	10	24.30	1.49	28 — 23
55.	鼻　高	13	53.38	2.72	59 — 50	9	49.22	2.68	54 — 46
54/55	鼻示数	11	48.54	2.44	52.00— 45.76	9	49.55	3.95	57.14— 44.44
55(1).	梨状口高	4	33.50	2.65	36 — 30	5	27.40	1.14	29 — 26
56.	鼻骨長	4	23.00	4.83	27 — 16	5	23.00	2.24	26 — 20
57.	鼻骨最小幅	14	8.21	1.97	11 — 4	9	8.56	2.24	12 — 4
57(1).	鼻骨最大幅	3	16.33	1.53	18 — 15	4	16.25	0.96	17 — 15
60.	上顎歯槽長	8	51.88	3.40	57 — 48	7	54.29	2.29	57 — 51
61.	上顎歯槽幅	11	64.55	3.36	68 — 57	7	59.57	4.35	62 — 50
62.	口蓋長	6	44.17	3.06	48 — 40	7	45.43	3.15	50 — 42
63.	口蓋幅	5	40.80	3.35	46 — 38	5	38.80	2.86	41 — 34
64.	口蓋高	6	13.83	2.04	18 — 13	5	20.80	14.75	47 — 12
61/60	上顎歯槽示数	8	123.60	7.34	136.73—114.55	7	109.73	6.80	119 — 98
63/62	口蓋示数	2	91.67	—	100.00— 83.33	3	86.26	—	95 — 78
64/63	口蓋高示数	5	34.20	3.07	39.13— 30.95	4	37.67	7.93	47 — 29
72.	全側面角	10	86.00	3.43	91 — 80	8	83.38	1.85	86 — 80
73.	鼻側面角	11	88.27	2.69	92 — 83	8	87.13	2.59	92 — 85
74.	歯槽側面角	10	76.20	7.60	89 — 64	8	71.75	5.52	81 — 65

表20　白浜—鼻根部計測値（mm，度）（Nasal root）

		男性				女性			
		平均			Max.—Min.	平均			Max.—Min.
		n	M	σ		n	M	σ	
50.	前眼窩間幅	14	16.64	1.55	20 — 14	10	17.30	1.49	20 — 15
50A	鼻根横弧長	12	21.08	2.19	24 — 18	9	19.56	1.88	23 — 18
50/50A	鼻根彎曲示数	12	79.84	6.41	88.89— 66.67	9	88.70	3.05	94.44— 83.33
57.	鼻骨最小幅	14	8.21	1.97	11 — 4	9	8.56	2.24	12 — 4
44.	両眼窩幅	12	98.92	3.60	106 — 95	9	93.22	1.86	96 — 91
50/44	眼窩間示数	12	17.12	1.60	20.83— 15.53	9	18.22	1.03	19.79— 16.30
a.	前頭突起上幅(右)	13	10.54	2.15	14 — 8	9	9.44	1.94	13 — 7
	(左)	13	10.00	1.91	13 — 7	9	8.44	1.51	10 — 6
b.	前頭突起水平傾斜角	13	79.08	18.12	110 — 49	7	82.43	16.14	103 — 63
c.	G—N投影距離	15	2.67	1.40	5 — 1	9	2.00	0.87	3 — 1
d.	鼻根角	4	136.75	3.59	140 —132	6	138.00	32.65	157 — 72
e.	G—R距離	4	34.25	3.30	38 — 30	5	33.60	3.21	38 — 29
f.	垂線高	4	6.25	0.96	7 — 5	5	3.80	0.45	4 — 3
f/e	鼻根陥凹示数	4	18.46	3.97	23.33— 14.71	5	11.40	1.86	13.79— 8.82
77	鼻頬骨角	14	144.93	6.55	153 —125	9	145.67	3.67	157 —140
	顔面扁平示数	12	14.94	1.34	18.37— 13.40	9	15.03	2.08	18.48— 11.70

表21　白浜—下顎骨計測値（mm，度）（Mandible）

		男性				女性			
		平均			Max.—Min.	平均			Max.—Min.
		n	M	σ		n	M	σ	
65.	下顎関節突起幅	6	121.83	7.25	129 —110	6	117.00	6.10	126 —109
65(1).	下顎筋突起幅	9	100.44	4.10	108 — 97	9	90.89	3.10	96 — 87
66.	下顎角幅	12	99.00	5.41	108 — 92	8	95.38	3.93	102 — 90
67.	前下顎幅	15	47.60	2.32	53 — 44	9	46.00	1.73	49 — 44
68.	下顎長	12	72.17	4.95	80 — 65	8	65.25	3.01	69 — 62
68(1).	下顎長	10	104.30	6.70	113 — 90	9	103.00	2.87	107 — 98
69.	オトガイ高	11	34.18	3.68	39 — 28	10	33.40	2.72	37 — 28
69(1).	下顎体高(右)	13	32.54	3.07	36 — 27	7	31.71	2.69	35 — 28
	(左)	13	31.62	3.40	37 — 27	6	31.67	2.50	35 — 28
69(2).	下顎体高(右)	9	29.00	3.04	34 — 24	6	26.00	2.19	29 — 23
	(左)	10	27.70	3.16	34 — 22	6	26.50	3.27	30 — 22
70.	枝　高(右)	12	59.92	5.23	67 — 52	8	55.00	2.51	58 — 50
	(左)	13	60.15	4.51	67 — 54	10	55.60	4.38	63 — 50
70(1).	前枝高(右)	12	65.00	5.03	73 — 57	9	56.89	6.13	68 — 47
	(左)	12	64.75	4.39	71 — 56	10	56.60	6.29	70 — 47
70(2).	最小枝高(右)	14	50.43	2.68	56 — 47	10	47.00	4.11	53 — 41
	(左)	15	49.13	3.23	55 — 44	10	45.50	3.50	52 — 40
70(3).	下顎切痕高(右)	10	15.30	1.89	19 — 13	8	13.25	1.28	15 — 11
	(左)	11	14.82	1.08	17 — 13	10	13.10	2.18	17 — 10
71.	枝　幅(右)	15	34.73	3.08	40 — 28	10	32.90	2.96	37 — 29
	(左)	15	34.33	3.35	40 — 27	10	32.80	2.20	36 — 30
71a.	最小枝幅(右)	15	34.13	3.16	40 — 27	10	32.40	2.67	36 — 29
	(左)	15	34.00	3.59	40 — 27	10	32.70	2.06	36 — 30
71(1).	下顎切痕幅(右)	10	36.90	5.34	47 — 31	8	34.75	3.28	39 — 31
	(左)	11	36.27	4.41	45 — 30	10	34.80	1.69	39 — 33
79.	下顎枝角(右)	11	122.64	7.86	131 —106	9	130.33	4.18	138 —125
	(左)	13	125.38	9.33	140 —108	10	128.50	6.15	137 —117
66/65	下顎幅示数	6	80.35	5.10	84.62— 71.32	4	79.74	4.64	85.71— 74.38
68/65	幅長示数	6	59.40	2.47	61.54— 55.74	4	55.99	3.80	59.82— 51.24
68(1)/65	幅長示数	5	85.23	3.43	90.40— 82.03	5	87.89	5.35	92.86— 80.99
69(2)/69	下顎高示数(右)	8	90.00	8.25	103.03— 74.36	6	77.63	4.67	81.82— 69.70
	(左)	8	87.10	9.84	103.03— 74.36	6	79.17	9.44	93.75— 66.67
71/70	下顎枝示数(右)	12	59.33	4.71	68.97— 50.75	8	60.71	4.96	66.07— 51.72
	(左)	13	57.71	7.24	70.18— 42.86	10	59.26	5.51	68.00— 51.61
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	14	67.88	5.99	79.59— 56.25	10	69.45	8.62	83.33— 56.60
	(左)	15	69.44	8.18	85.11— 52.94	10	72.20	6.53	81.82— 63.46
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	10	42.08	7.02	54.84— 32.56	8	38.23	3.12	42.42— 33.33
	(左)	11	41.41	5.92	51.52— 33.33	10	37.77	6.84	50.00— 28.57

表22　白浜—鎖骨計測値（mm）（Clavicle）

		男性				女性			
		平均			Max.—Min.	平均			Max.—Min.
		n	M	σ		n	M	σ	
1.	鎖骨最大長 (右)	6	138.50	6.09	145 —129	5	119.60	9.21	131 —111
	(左)	6	143.83	5.78	149 —134	4	130.50	7.77	136 —119
2a.	骨体彎曲高 (右)	8	31.50	2.07	35 — 29	10	27.20	3.16	33 — 23
	(左)	8	30.75	1.98	33 — 28	7	26.71	2.93	30 — 22
2(1).	肩峰端彎曲高 (右)	6	30.33	1.63	32 — 28	6	27.83	2.79	33 — 25
	(左)	6	30.33	1.97	33 — 28	4	26.25	2.99	33 — 23
4.	中央垂直径 (右)	15	10.60	1.80	14 — 7	12	9.83	1.40	12 — 8
	(左)	14	10.79	1.31	14 — 9	10	9.60	1.35	11 — 8
5.	中央矢状径 (右)	15	12.33	1.45	15 — 10	12	11.00	1.65	15 — 9
	(左)	14	12.57	1.91	17 — 9	10	11.40	1.35	14 — 9
6.	中央周 (右)	15	38.27	3.94	46 — 32	12	35.42	3.06	42 — 31
	(左)	14	38.79	4.28	46 — 30	10	34.60	3.53	43 — 30
6/1	長厚示数 (右)	6	27.31	1.14	28.36— 25.58	5	28.72	2.64	32.43— 25.95
	(左)	6	26.65	0.96	27.86— 25.52	4	25.10	1.00	26.32— 23.88
2a/1	彎曲示数 (右)	6	22.66	1.92	24.63— 20.42	5	24.11	2.38	27.03— 22.87
	(左)	6	21.83	1.85	24.63— 18.92	4	20.62	1.61	22.06— 18.49
4/5	鎖骨断面示数 (右)	15	86.12	12.06	107.69— 63.64	12	91.52	21.26	133.33— 66.67
	(左)	14	87.45	16.14	122.22— 64.71	10	85.28	16.47	122.22— 66.67

表23 白浜一上腕骨計測値（mm）（Humerus）

			男性 平均 n	M	σ	Max.—Min.	女性 平均 n	M	σ	Max.—Min.
1.	上腕骨最大長	(右)	8	292.75	13.46	307 —268	6	281.33	11.45	294 —261
		(左)	8	289.50	12.15	302 —265	8	273.63	14.48	288 —245
2.	上腕骨全長	(右)	10	291.80	15.13	320 —262	7	273.14	15.28	290 —248
		(左)	9	284.89	12.30	298 —259	8	270.38	14.01	284 —242
3.	上端幅	(右)	6	46.83	2.93	49 — 41	5	41.60	2.70	46 — 39
		(左)	8	45.75	2.25	48 — 41	3	41.33	—	45 — 39
3(1).	横上径	(右)	7	50.14	2.91	53 — 44	5	43.60	3.13	49 — 41
		(左)	8	49.63	2.56	53 — 44	4	44.75	3.50	49 — 41
4.	下端幅	(右)	9	60.33	4.58	67 — 50	6	51.00	3.41	55 — 45
		(左)	9	58.56	3.84	63 — 52	7	52.00	3.61	56 — 45
5.	中央最大径	(右)	18	22.28	1.90	26 — 19	11	20.64	1.50	23 — 19
		(左)	15	22.33	1.76	25 — 20	11	19.82	1.33	22 — 18
6.	中央最小径	(右)	18	17.39	1.42	20 — 15	11	14.73	1.10	17 — 13
		(左)	15	17.67	1.35	20 — 15	11	14.82	1.33	17 — 13
7.	骨体最小周	(右)	18	63.00	4.51	71 — 55	11	55.27	3.80	63 — 49
		(左)	15	63.07	4.70	70 — 55	10	55.60	4.03	63 — 51
7(a).	中央周	(右)	18	66.89	4.78	75 — 60	12	58.75	3.79	65 — 53
		(左)	15	66.73	4.77	74 — 60	10	58.60	4.30	65 — 52
8.	頭周	(右)	8	135.00	8.30	143 —117	4	113.75	5.19	120 —109
		(左)	9	133.56	8.52	143 —115	4	120.25	10.59	132 —109
9.	頭最大横径	(右)	9	41.44	2.79	44 — 35	4	34.00	1.41	36 — 33
		(左)	9	40.89	2.71	44 — 35	5	36.40	2.61	39 — 33
10.	頭最大矢状径	(右)	9	44.11	2.62	47 — 38	6	39.50	3.08	44 — 36
		(左)	9	43.56	2.30	47 — 39	8	38.50	3.12	44 — 35
11.	滑車幅	(右)	8	22.25	2.05	25 — 19	10	18.30	1.64	21 — 16
		(左)	7	21.57	2.23	24 — 17	8	18.38	1.41	20 — 16
12.	小頭幅	(右)	10	16.70	0.95	18 — 15	8	14.38	0.74	15 — 13
		(左)	7	16.71	0.95	18 — 15	7	15.00	0.82	16 — 14
12(a).	滑車幅および小頭幅	(右)	7	44.86	2.54	48 — 42	8	38.38	2.83	42 — 34
		(左)	6	44.00	4.56	47 — 35	7	38.71	2.63	43 — 36
13.	滑車深	(右)	8	24.88	2.17	28 — 23	8	22.50	1.77	25 — 20
		(左)	6	24.83	2.14	27 — 21	7	22.29	2.14	25 — 19
14.	肘頭窩幅	(右)	11	26.55	0.93	28 — 25	8	22.00	2.88	24 — 15
		(左)	11	27.00	1.41	29 — 24	10	22.80	2.78	26 — 16
15.	肘頭窩深	(右)	11	13.27	1.42	16 — 12	7	12.14	1.07	13 — 10
		(左)	11	13.27	1.56	15 — 11	9	12.11	1.36	14 — 10
6/5	骨体断面示数	(右)	18	78.24	5.20	85.71— 68.18	11	71.52	4.96	78.95— 63.64
		(左)	15	79.26	4.96	86.96— 71.43	11	74.93	6.65	84.21— 65.00
7/1	長厚示数	(右)	8	21.70	0.94	23.65— 20.33	6	20.20	1.05	21.72— 18.73
		(左)	8	21.57	1.68	24.14— 19.10	8	20.76	1.21	22.45— 18.64
9/10	頭断面示数	(右)	9	93.93	2.01	95.65— 90.70	4	90.10	2.33	91.89— 86.64
		(左)	9	93.84	2.73	97.73— 89.74	5	93.02	3.68	97.30— 88.64
11/4	滑車上顆示数	(右)	7	37.92	1.42	40.00— 35.59	6	35.90	1.39	38.18— 34.00
		(左)	6	35.78	2.26	38.71— 32.08	6	36.37	0.96	37.78— 35.29

表24 白浜一橈骨計測値（mm）（Radius）

			男性 平均 n	M	σ	Max.—Min.	女性 平均 n	M	σ	Max.—Min.
1.	最大長	(右)	7	227.71	8.60	236 —214	8	202.88	12.01	218 —185
		(左)	8	225.50	7.80	235 —213	6	200.00	12.96	213 —180
1b.	平行長	(右)	7	226.00	8.72	234 —212	8	201.00	11.81	216 —183
		(左)	8	223.63	7.74	232 —211	6	198.50	12.42	210 —179
2.	機能長	(右)	9	214.44	8.38	223 —198	9	190.33	10.69	205 —174
		(左)	10	212.50	7.43	222 —198	8	186.00	11.95	198 —170
3.	最小周	(右)	16	42.38	3.12	47 — 37	11	36.82	2.52	41 — 33
		(左)	16	42.25	2.98	47 — 36	11	36.00	2.19	39 — 32
4.	骨体横径	(右)	17	17.12	1.36	20 — 15	12	15.17	1.47	18 — 13
		(左)	15	16.73	1.39	19 — 14	11	14.55	1.37	16 — 12
4a.	骨体中央横径	(右)	17	16.24	1.20	19 — 15	12	14.42	1.44	17 — 12
		(左)	16	15.75	1.13	17 — 14	11	14.09	1.64	16 — 12
4(1).	小頭横径	(右)	6	22.33	1.51	25 — 21	3	18.67	—	19 — 18
		(左)	6	21.67	1.97	25 — 19	5	19.20	1.10	21 — 18
4(2).	頸横径	(右)	12	14.00	0.74	15 — 13	12	12.00	1.65	16 — 10
		(左)	11	13.73	1.42	17 — 12	11	11.82	1.66	16 — 10
5.	骨体矢状径	(右)	17	11.76	1.25	14 — 9	12	10.00	0.85	12 — 9
		(左)	15	12.33	1.05	14 — 11	11	10.36	1.03	12 — 9
5a.	骨体中央矢状径	(右)	17	11.94	1.34	14 — 9	12	10.08	0.79	12 — 9
		(左)	16	12.25	1.39	14 — 10	11	10.27	1.10	12 — 9
5(1).	小頭矢状径	(右)	5	22.60	1.14	24 — 21	4	19.75	1.71	22 — 18
		(左)	4	21.75	2.22	24 — 19	5	20.00	1.22	22 — 19
5(2).	頸矢状径	(右)	12	16.00	2.92	24 — 13	12	13.17	1.75	17 — 11
		(左)	11	15.55	1.21	17 — 13	11	13.55	1.63	17 — 12
5(3).	小頭周	(右)	4	71.25	3.20	74 — 68	3	61.33	—	63 — 60
		(左)	2	67.00	—	73 — 61	5	63.80	3.77	70 — 60
5(4).	頸周	(右)	12	46.17	2.86	51 — 42	12	40.08	4.83	51 — 35
		(左)	11	47.18	3.89	53 — 41	11	40.82	5.10	52 — 35
5(5).	骨体中央周	(右)	17	45.18	3.19	50 — 40	12	40.00	3.16	45 — 34
		(左)	16	44.75	2.77	49 — 40	11	39.55	3.30	44 — 34
5(6).	骨下端幅	(右)	8	31.88	2.70	36 — 27	6	29.17	4.26	37 — 26
		(左)	10	32.20	2.39	35 — 27	3	27.33	—	29 — 26
3/2	長厚示数	(右)	9	20.25	0.94	21.46— 18.55	9	19.36	1.21	21.26— 17.35
		(左)	10	19.72	1.17	21.20— 17.65	8	19.52	1.17	21.71— 18.04
5/4	骨体断面示数	(右)	17	68.80	6.13	82.35— 58.82	12	66.23	5.81	78.57— 55.56
		(左)	15	73.91	5.91	87.50— 66.67	11	71.73	4.65	80.00— 66.67
5a/4a	中央断面示数	(右)	17	73.54	6.28	82.35— 60.00	12	70.25	5.14	76.92— 62.50
		(左)	16	77.70	5.95	86.67— 66.67	11	73.18	5.61	83.33— 62.50

表25　白浜―尺骨計測値（mm）　(Ulna)

			男性					女性				
			平均			Max.―Min.		平均			Max.―Min.	
			n	M	σ			n	M	σ		
1.	最大長	(右)	7	248.00	7.98	256	―232	6	221.17	10.34	232	―206
		(左)	5	244.00	12.23	257	―229	3	219.00	―	228	―209
2.	機能長	(右)	12	215.25	8.50	226	―201	8	192.13	11.23	205	―177
		(左)	10	214.10	7.56	224	―202	6	191.00	11.35	202	―172
2(1).	肘頭尺骨頭長	(右)	11	240.91	9.90	253	―225	7	218.57	9.78	229	―202
		(左)	10	240.50	9.42	253	―225	5	219.20	7.92	225	―206
3.	最小周	(右)	12	37.75	2.70	42	― 34	11	35.00	3.32	41	― 29
		(左)	13	37.23	2.42	41	― 33	9	34.44	3.28	39	― 30
6.	肘頭幅	(右)	9	26.22	1.86	28	― 23	7	22.14	1.21	24	― 20
		(左)	8	25.88	1.25	28	― 24	7	22.00	1.73	25	― 20
6(1)	上幅	(右)	9	33.22	1.56	35	― 30	8	29.00	2.67	33	― 24
		(左)	8	31.75	2.12	34	― 27	8	29.75	2.55	33	― 25
7.	肘頭深	(右)	11	25.09	2.66	31	― 23	8	22.25	1.49	25	― 21
		(左)	10	24.40	2.27	28	― 22	7	22.71	1.80	26	― 21
8.	肘頭高	(右)	11	21.18	1.40	23	― 18	8	19.00	1.41	21	― 17
		(左)	11	20.82	1.47	23	― 18	7	18.86	2.04	22	― 16
11.	尺骨矢状径	(右)	15	13.33	1.11	15	― 11	12	11.25	1.14	13	― 10
		(左)	14	13.64	1.08	15	― 11	11	11.27	1.10	13	― 10
12.	尺骨横径	(右)	15	16.53	1.55	19	― 14	12	14.67	1.15	16	― 13
		(左)	14	16.29	1.44	19	― 14	11	14.45	0.82	16	― 13
S	中央最小径	(右)	15	12.80	1.01	14	― 11	12	10.83	0.94	13	― 10
		(左)	14	12.71	0.83	14	― 11	11	10.82	1.08	13	― 10
L	中央最大径	(右)	15	16.87	1.19	19	― 15	12	15.00	1.21	17	― 13
		(左)	14	16.79	1.48	19	― 14	11	15.00	1.18	17	― 13
C	中央周	(右)	15	49.27	3.47	56	― 43	12	42.58	3.03	47	― 39
		(左)	14	49.00	3.57	54	― 42	11	42.73	3.13	48	― 38
3/2	長厚示数	(右)	12	17.54	1.09	19.09―	15.49	8	18.58	1.51	20.60―	16.10
		(左)	10	17.24	1.03	18.55―	15.45	6	18.25	1.57	20.10―	16.08
11/12	骨体断面示数	(右)	15	80.96	6.69	93.75―	70.59	12	77.02	9.01	100.00―	66.67
		(左)	14	84.09	7.06	93.75―	73.33	11	77.93	5.30	86.67―	71.43
S/L	中央断面示数	(右)	15	75.95	4.34	86.67―	68.75	12	72.45	6.24	84.62―	64.71
		(左)	14	76.18	7.31	92.86―	68.42	11	72.28	6.30	81.25―	58.82

表26　白浜―大腿骨計測値（mm）　(Femur)

			男性					女性				
			平均			Max.―Min.		平均			Max.―Min.	
			n	M	σ			n	M	σ		
1.	最大長	(右)	12	418.25	18.80	454	―379	7	386.29	19.98	408	―356
		(左)	9	413.00	17.22	439	―377	9	387.67	21.84	408	―356
2.	自然位全長	(右)	12	415.25	18.41	450	―377	7	383.14	19.87	403	― 52
		(左)	9	409.33	16.54	434	―375	8	380.38	25.53	405	― 46
3.	最大転子長	(右)	10	399.60	15.95	419	―368	6	371.50	22.47	395	― 38
		(左)	8	401.38	16.12	418	―367	6	377.83	20.19	396	― 39
4.	自然位転子長	(右)	10	388.80	14.59	407	―361	6	361.00	22.79	383	― 26
		(左)	8	388.38	15.00	405	―359	5	367.00	24.44	387	― 26
6.	骨体中央矢状径	(右)	16	27.50	2.28	33	― 23	13	24.77	1.88	28	― 22
		(左)	15	27.60	2.26	33	― 24	13	24.62	2.33	28	― 1
7.	骨体中央横径	(右)	16	26.19	1.72	29	― 23	13	22.77	1.54	25	― 19
		(左)	15	26.40	1.64	28	― 23	13	23.54	1.61	28	― 21
8.	骨体中央周	(右)	16	84.88	4.92	95	― 78	13	75.00	4.47	81	― 65
		(左)	15	85.13	4.49	94	― 78	13	75.69	5.11	84	― 67
9.	骨体上横径	(右)	16	32.31	2.12	36	― 30	12	28.50	1.98	32	― 24
		(左)	15	32.07	2.15	36	― 29	12	29.58	2.31	33	― 26
10.	骨体上矢状径	(右)	16	24.38	2.16	28	― 21	12	21.83	1.34	24	― 19
		(左)	15	24.20	1.86	27	― 21	12	22.17	1.64	25	― 20
15.	頸垂直径	(右)	11	33.55	3.11	38	― 27	11	29.00	1.84	31	― 25
		(左)	9	33.78	2.82	38	― 29	10	27.80	1.75	31	― 25
16.	頸矢状径	(右)	11	24.64	2.73	29	― 19	11	21.91	2.39	26	― 18
		(左)	9	24.89	2.57	28	― 20	10	21.00	2.62	26	― 18
17.	頸周	(右)	11	96.82	9.25	109	― 78	10	84.40	6.54	92	― 72
		(左)	9	98.22	8.83	109	― 84	10	82.40	6.74	93	― 74
18.	頭垂直径	(右)	10	45.70	2.91	49	― 39	10	40.00	2.36	44	― 37
		(左)	8	45.00	2.14	48	― 41	9	39.78	2.28	44	― 37
19.	頭横径	(右)	10	45.40	2.59	48	― 39	9	39.78	2.17	44	― 37
		(左)	8	44.63	2.62	48	― 39	9	39.44	2.19	44	― 37
20.	頭周	(右)	10	145.70	7.90	154	―127	9	127.33	6.76	142	―119
		(左)	8	143.25	8.03	155	―127	9	126.78	6.32	141	―120
21.	上顆幅	(右)	5	77.00	6.96	83	― 68	7	69.43	4.35	74	― 65
		(左)	5	78.80	4.60	83	― 71	3	66.00	―	67	― 65
8/2	長厚示数	(右)	12	20.78	0.90	22.02―	19.27	7	19.90	1.01	21.33―	18.59
		(左)	9	21.00	0.74	21.90―	19.59	8	19.72	1.17	21.91―	17.87
6/7	骨体中央断面示数	(右)	16	105.25	8.79	122.22―	85.19	13	108.99	7.69	121.74―	95.83
		(左)	15	104.78	9.04	121.74―	88.89	13	104.73	9.37	121.74―	92.86
10/9	上骨体断面示数	(右)	16	75.53	6.04	86.67―	65.63	12	76.74	4.04	82.14―	68.75
		(左)	15	75.68	6.58	86.67―	63.64	12	75.15	5.76	88.89―	68.97
16/15	頸横断面示数	(右)	11	73.42	4.16	80.56―	69.44	11	75.44	5.20	86.67―	67.86
		(左)	9	73.65	4.09	80.00―	68.97	10	75.41	6.55	89.66―	67.86
19/18	頭横断面示数	(右)	10	99.39	1.38	100.00―	95.92	9	100.31	1.99	102.70―	97.44
		(左)	8	99.12	1.78	100.00―	95.12	9	99.19	2.13	102.56―	95.24

表27 白浜—脛骨計測値（mm）（Tibia）

			男性				女性			
			平均			Max.—Min.	平均			Max.—Min.
			n	M	σ		n	M	σ	
1.	脛骨全長	(右)	8	336.88	16.37	356 —308	7	303.00	22.21	333 —271
		(左)	8	331.38	13.52	351 —304	7	305.43	20.99	339 —279
1a.	脛骨最大長	(右)	8	341.75	16.58	364 —317	7	309.57	20.18	337 —282
		(左)	8	336.75	14.45	357 —312	7	310.00	21.25	343 —281
1b.	脛骨長	(右)	8	330.88	15.69	350 —305	7	301.00	20.86	330 —272
		(左)	8	326.38	13.86	345 —298	7	300.29	21.45	333 —271
2.	顆距間距離	(右)	9	314.22	15.61	337 —287	7	287.43	19.22	314 —261
		(左)	11	309.45	13.06	329 —280	7	286.86	20.12	317 —260
3.	最大上端幅	(右)	4	76.00	1.83	78 — 74	2	64.50	—	66 — 63
		(左)	5	75.00	2.35	77 — 71	2	64.00	—	65 — 63
3a.	上内関節面幅	(右)	5	31.40	1.14	33 — 30	4	26.75	0.96	28 — 26
		(左)	7	30.14	2.54	34 — 27	4	28.00	1.41	30 — 27
3b.	上外関節面幅	(右)	4	31.50	3.70	34 — 26	2	27.50	—	28 — 27
		(左)	4	32.00	2.31	34 — 30	2	26.00	—	26 — 26
4a.	上内関節面深	(右)	5	49.00	2.12	52 — 47	4	42.25	2.87	46 — 39
		(左)	5	48.40	4.16	53 — 44	3	43.67	—	45 — 43
4b.	上外関節面深	(右)	5	42.20	2.05	44 — 39	3	35.33	—	37 — 34
		(左)	5	40.80	3.19	43 — 36	3	36.00	—	39 — 34
6.	最大下端幅	(右)	8	52.38	3.20	59 — 49	5	45.80	3.11	51 — 43
		(左)	8	52.13	2.10	54 — 48	5	46.80	3.56	53 — 44
7.	下端矢状径	(右)	8	37.00	2.83	40 — 32	5	31.60	3.13	37 — 29
		(左)	9	36.89	2.15	40 — 34	6	31.67	2.80	37 — 29
8.	中央最大径	(右)	16	29.19	2.10	33 — 26	12	26.17	2.29	30 — 22
		(左)	16	29.19	2.43	32 — 25	11	26.73	1.85	29 — 23
8a.	栄養孔位最大径	(右)	15	33.07	3.53	40 — 28	11	29.27	2.37	33 — 26
		(左)	16	33.00	2.99	38 — 29	10	30.00	2.49	34 — 25
9.	中央横径	(右)	16	21.38	1.93	25 — 17	12	19.67	2.10	25 — 17
		(左)	16	21.25	1.65	24 — 19	11	19.55	2.42	25 — 17
9a.	栄養孔位横径	(右)	15	23.80	1.61	26 — 21	11	21.73	2.33	25 — 19
		(左)	16	23.88	1.36	26 — 22	10	21.40	2.63	25 — 18
10.	骨、体周	(右)	16	79.81	5.54	90 — 70	12	72.83	5.24	83 — 66
		(左)	16	79.88	5.78	90 — 71	11	73.36	5.48	85 — 65
10a.	栄養孔位周	(右)	15	89.53	7.40	101 — 78	11	79.82	5.93	90 — 72
		(左)	16	89.75	5.90	100 — 79	10	81.50	6.92	94 — 69
10b.	最小周	(右)	15	72.73	4.79	80 — 64	12	66.67	4.54	75 — 61
		(左)	15	72.87	4.17	79 — 64	11	66.55	4.63	76 — 59
9/8	中央断面示数	(右)	16	73.29	5.05	79.31— 62.50	12	75.61	9.54	90.91— 60.71
		(左)	16	73.05	5.86	88.46— 64.52	11	73.13	7.20	86.21— 65.38
9a/8a	栄養孔位断面示数	(右)	15	72.40	5.43	80.00— 60.00	11	74.32	6.45	84.62— 64.52
		(左)	16	72.78	6.39	83.33— 57.89	10	71.34	6.38	78.57— 61.29
10b/1	長厚示数	(右)	8	22.23	0.73	23.49— 21.02	7	22.17	1.55	23.99— 20.71
		(左)	8	21.96	0.71	22.70— 20.66	7	21.95	1.39	24.37— 20.58

表28 白浜—腓骨計測値（mm）（Fibula）

			男性				女性			
			平均			Max.—Min.	平均			Max.—Min.
			n	M	σ		n	M	σ	
1.	最大長	(右)	9	332.44	12.29	348 —310	4	317.00	10.68	322 —307
		(左)	7	335.29	8.81	347 —321	5	292.40	17.83	311 —270
2.	中央最大径	(右)	15	15.13	1.19	17 — 13	11	13.82	2.27	17 — 11
		(左)	16	15.13	1.59	19 — 13	10	13.50	1.72	16 — 11
3.	中央最小径	(右)	15	10.80	1.52	14 — 9	11	10.00	2.05	14 — 7
		(左)	16	10.81	1.17	13 — 9	10	9.30	0.95	11 — 8
4.	中央周	(右)	15	44.07	3.63	52 — 39	11	40.73	6.97	50 — 32
		(左)	16	44.13	4.38	54 — 39	10	38.30	4.85	45 — 31
4a.	最小周	(右)	12	37.17	2.59	44 — 35	8	33.38	4.78	41 — 27
		(左)	14	37.00	2.25	40 — 33	8	32.25	3.92	38 — 27
4b.	頸横径	(右)	12	11.92	1.38	14 — 10	8	10.50	1.85	13 — 7
		(左)	14	11.50	0.85	13 — 10	8	10.25	1.49	12 — 8
4c.	頸矢状径	(右)	12	11.83	1.64	15 — 9	8	10.75	1.75	13 — 9
		(左)	14	11.29	1.33	14 — 9	8	9.88	1.55	13 — 8
4(1).	上端幅	(右)	6	26.83	1.72	29 — 25	2	24.00	—	26 — 22
		(左)	2	28.00	—	28 — 28	1	21.00	—	21 — 21
4(1a).	上端矢状幅	(右)	6	26.17	2.14	29 — 23	1	25.00	—	25 — 25
		(左)	3	26.33	—	27 — 26		—		
4(2).	下端幅	(右)	7	19.71	2.14	23 — 16	5	18.80	1.48	21 — 17
		(左)	8	21.00	1.85	24 — 19	5	18.60	2.51	22 — 15
4(2a).	下端矢状幅	(右)	8	27.13	1.36	29 — 25	7	21.43	2.76	25 — 16
		(左)	9	25.33	1.58	28 — 23	7	22.57	1.51	25 — 21
3/2	中央断面示数	(右)	15	71.45	8.78	84.62— 60.00	11	72.52	9.66	87.50— 58.33
		(左)	16	71.80	7.20	84.62— 62.50	10	69.26	5.14	76.92— 60.00
4a/1	長厚示数	(右)	9	10.97	0.38	11.61— 10.34	4	10.81	1.06	11.73— 9.27
		(左)	7	11.08	0.71	12.05— 9.97	4	10.68	1.63	12.54— 9.30

表29 白浜—膝蓋骨計測値（mm）（Patella）

			男性				女性			
			平均			Max.—Min.	平均			Max.—Min.
			n	M	σ		n	M	σ	
1.	最大高	(右)	8	41.25	2.87	46 — 36	3	37.00	—	39 — 35
		(左)	4	43.75	0.96	45 — 43	4	36.50	2.38	40 — 35
2.	最大幅	(右)	11	45.45	2.94	50 — 39	3	39.33	—	41 — 37
		(左)	7	46.00	2.52	50 — 43	4	38.50	1.73	40 — 36
3.	最大厚	(右)	14	19.43	1.95	24 — 16	4	16.75	1.50	18 — 15
		(左)	10	20.20	1.93	24 — 18	5	17.80	1.30	19 — 16
4.	関節面高	(右)	8	31.88	1.25	34 — 30	4	28.25	1.50	30 — 27
		(左)	6	33.17	2.14	35 — 29	4	29.25	1.71	31 — 27
5.	内関節面幅	(右)	11	21.64	1.75	24 — 19	4	18.25	1.71	20 — 16
		(左)	6	23.33	3.93	30 — 19	4	21.50	3.70	25 — 17
6.	外関節面幅	(右)	11	25.82	2.09	28 — 21	4	24.00	0.82	25 — 23
		(左)	8	27.00	3.85	30 — 18	4	21.50	4.20	26 — 17
1/2	膝蓋骨高幅示数	(右)	8	91.49	4.34	95.83— 82.98	3	94.21	—	100.00— 87.50
		(左)	4	96.39	6.14	104.65— 89.80	4	94.82	4.64	100.00— 89.74

表30　白浜―四肢骨比(最大長の比)(Ratio of extremitis)

		男性				女性			
		平均			Max.―Min.	平均			Max.―Min.
		n	M	σ		n	M	σ	
鎖骨／上腕骨	(右)	5	47.01	1.04	48.03― 45.57	3	45.10	―	46.29― 43.30
	(左)	6	49.35	1.08	50.57― 48.01	3	47.33	―	48.03― 45.95
橈骨／上腕骨	(右)	5	77.30	2.33	79.85― 73.49	4	74.15	2.01	77.03― 72.45
	(左)	7	77.31	2.67	80.76― 74.17	4	73.92	0.98	75.27― 72.97
橈骨／尺骨	(右)	5	92.89	1.18	94.40― 91.46	4	93.03	1.30	93.97― 90.22
	(左)	4	93.62	1.83	95.73― 91.44	2	91.93	―	93.42― 90.43
橈骨／大腿骨	(右)	7	54.66	1.49	56.80― 53.03	5	52.93	2.15	56.33― 50.96
	(左)	7	54.72	1.91	57.04― 52.05	4	52.15	1.90	54.12― 49.05
橈骨／脛骨	(右)	6	67.23	2.54	71.56― 64.22	6	66.30	2.20	69.65― 63.20
	(左)	6	67.08	2.48	71.43― 64.86	4	64.84	1.99	66.88― 62.10
上腕骨／大腿骨	(右)	7	71.46	1.51	73.27― 69.32	4	72.04	1.76	73.31― 69.65
	(左)	7	70.12	1.49	72.95― 68.11	5	70.05	2.30	72.75― 66.76
上腕骨／脛骨	(右)	5	87.20	3.03	92.05― 84.54	4	89.78	2.00	92.55― 87.24
	(左)	5	86.54	2.26	89.09― 83.75	6	87.72	2.12	90.88― 83.97
脛骨／大腿骨	(右)	8	81.72	1.63	83.64― 79.37	5	79.80	1.80	82.60― 77.96
	(左)	6	81.68	1.56	84.02― 79.85	5	79.75	2.87	84.28― 76.57
腓骨／脛骨	(右)	7	98.08	1.21	100.00― 96.11	4	98.53	1.07	100.00― 97.46
	(左)	5	97.33	1.24	99.12― 95.97	4	97.28	1.20	99.04― 96.09
上肢骨／下肢骨	(右)	5	69.40	1.80	72.40― 67.63	4	69.60	1.89	71.57― 67.92
	(左)	4	69.23	1.81	70.99― 66.71	4	67.99	1.84	69.89― 65.59

＊上肢骨＝橈骨＋上腕骨、下肢骨＝脛骨＋大腿骨

表31　白浜―四肢骨比(中央周の比)(Ratio of extremitis)

		男性				女性			
		平均			Max.―Min.	平均			Max.―Min.
		n	M	σ		n	M	σ	
橈骨／尺骨	(右)	14	92.93	4.43	104.26― 85.71	12	93.97	4.36	100.00― 85.00
	(左)	12	91.38	3.04	97.78― 87.76	11	92.66	6.06	100.00― 82.22
橈骨／上腕骨	(右)	15	67.74	2.78	75.38― 64.52	11	68.20	4.06	73.68― 59.68
	(左)	14	66.55	2.57	72.31― 62.16	10	67.40	5.95	76.92― 58.73
鎖骨／上腕骨	(右)	14	57.01	4.07	63.01― 50.67	10	60.31	4.89	68.42― 53.45
	(左)	13	58.89	3.90	65.08― 52.70	9	58.78	4.71	66.15― 50.79
上腕骨／大腿骨	(右)	16	79.23	3.59	85.00― 74.70	10	78.08	3.66	83.08― 72.60
	(左)	13	78.37	3.31	82.22― 72.29	11	77.35	4.68	82.89― 69.05
上腕骨／脛骨	(右)	15	83.45	4.05	90.67― 75.95	10	80.64	4.24	84.21― 70.37
	(左)	13	83.19	4.17	90.54― 75.90	9	80.30	5.43	86.30― 72.50
脛骨／大腿骨	(右)	15	95.22	4.33	105.13― 87.95	12	97.60	4.94	103.85― 89.61
	(左)	15	94.13	2.90	98.77― 88.89	11	95.90	5.54	104.94― 87.18
腓骨／脛骨	(右)	15	55.66	4.44	62.65― 48.89	11	55.59	6.93	66.67― 43.24
	(左)	15	55.32	5.28	65.06― 46.59	10	53.05	6.01	63.38― 42.47

表32　白浜―推定身長値 (cm)　(Estimated stature)

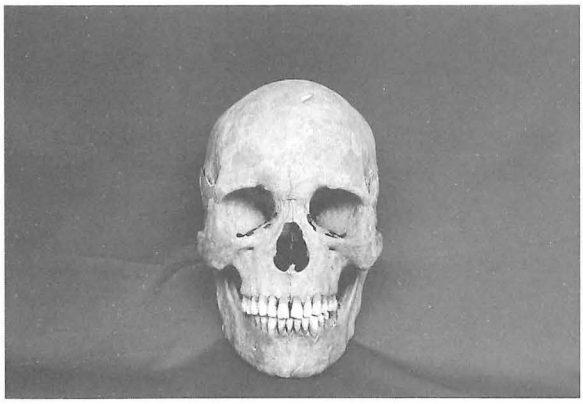
		男性				女性			
		平均			Max.―Min.	平均			Max.―Min.
		n	M	σ		n	M	σ	
Pearson の式	上腕骨	10	155.44	3.53	159.49―148.20	8	147.62	4.41	152.44―138.95
	橈骨	9	160.14	2.82	163.12―155.92	9	149.20	3.78	154.10―143.07
	大腿骨	12	159.94	3.53	166.66―152.56	10	148.12	4.07	152.20―142.09
	脛骨	11	158.43	3.35	163.25―151.84	7	146.04	5.23	153.10―138.51
藤井の式	上腕骨	10	155.16	3.45	158.90―148.01	8	147.19	3.79	151.27―139.75
	橈骨	9	157.73	2.75	160.52―153.42	9	146.65	3.57	151.17―140.84
	大腿骨	12	158.21	4.64	167.04―148.51	10	147.82	4.77	152.91―140.79
	脛骨	11	158.20	3.49	163.91―152.30	7	145.98	4.44	152.01―139.91

表33　白浜―形態小変異の出現頻度 (%)

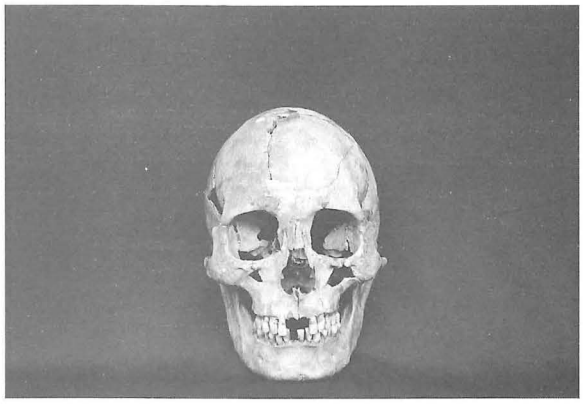
項目	男性	女性
A. 頭蓋底の変異		
1. Medial palatine canal(内側口蓋管)	7.69	0
2. Pterygospinous foramen(翼棘孔)	0	0
3. Hypoglossal canal bridging(舌下神経管二分)	35.71	9.09
4. Clinoid bridging(床状突起間骨橋)	―	―
5. Condylar canal absent(顆管欠如)	44.44	50.00
6. Tympanic dehiscence, Foramen of Huschke (＞1㎜)	18.75	27.27
7. Jugular foramen bridging	15.38	10.00
8. Precondylar tubercle	7.14	―
B. 顔面の孔		
9. Supra-orbital foramen(incl.frontal foramen)	56.25	33.33
10. Accesory infraorbital foramen(副眼窩下孔)	25.00	20.00
11. Zygo-facial foramen absent	26.67	18.18
12. Aural exostosis	0	0
C. 縫合の変異		
13. Metopism(前頭縫合)	6.25	7.69
14. Os incae	0	0
15. Ossicle at the lambda	6.25	0
16. Parietal notch bone	6.25	16.67
17. Transverse zygomatic suture (＞5㎜)	9.09	25.00
18. Asterionic ossicle	6.67	0
19. Occipitomastoid ossicle	6.67	0
20. Epipteric ossicle	15.38	30.00
21. Frontotemporal articulation	0	0
22. Biasterionic suture (＞10㎜)	5.88	0
D. 下顎骨		
23. Mylohyoid bridging(顎舌骨筋神経溝骨橋)	6.25	10.00
24. Accessory mental foramen(副オトガイ孔)	0	0
25. Mandibular torus	23.53	0
E. 上腕骨		
26. 滑車上孔	22.22	30.77

表34　白浜人骨―歯の計測値 (㎜)　(Teeth)

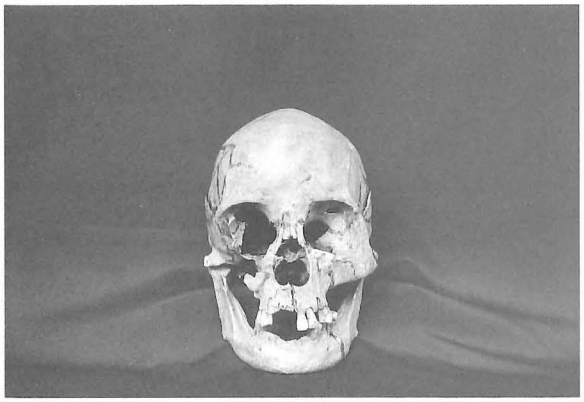
		男性						女性					
		頬(唇)舌径			近遠心径			頬(唇)舌径			近遠心径		
		n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ
上顎	I_1	11	7.24	0.30	12	8.59	0.52	6	7.04	0.27	6	8.60	0.28
	I_2	12	6.44	0.47	12	7.35	0.59	7	6.08	0.32	7	6.56	0.60
	C	12	8.50	0.60	12	8.08	0.41	7	7.78	0.48	7	7.54	0.48
	P_1	12	9.64	0.54	12	7.29	0.47	8	9.29	0.59	8	7.15	0.40
	P_2	13	9.45	0.57	13	6.86	0.52	8	9.12	0.34	8	6.67	0.42
	M_1	13	11.94	0.64	13	10.52	0.59	8	11.52	0.78	7	10.35	0.88
	M_2	11	11.91	0.75	11	9.95	0.68	8	11.42	0.88	8	9.64	0.51
	M_3	6	10.18	0.89	6	8.37	1.13	4	10.52	0.69	4	8.70	0.73
下顎	I_1	9	5.78	0.28	9	5.40	0.33	6	5.65	0.23	6	5.46	0.12
	I_2	10	6.27	0.23	10	5.99	0.35	9	6.07	0.28	8	6.00	0.45
	C	11	7.61	0.54	11	6.86	0.58	7	7.43	0.45	7	6.66	0.54
	P_1	14	7.92	0.46	14	7.17	0.49	9	7.62	0.28	9	7.10	0.40
	P_2	12	8.29	0.52	12	7.15	0.53	7	8.28	0.51	7	7.16	0.70
	M_1	12	10.88	0.65	12	11.54	0.87	8	10.50	0.57	7	11.32	0.75
	M_2	11	10.26	0.64	11	11.12	0.59	6	10.16	0.60	6	10.83	0.92
	M_3	7	10.04	0.71	6	10.63	0.66	4	9.48	0.40	4	9.76	0.37



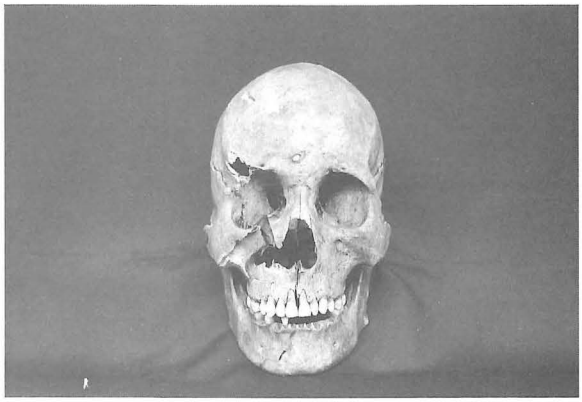
白浜２号人骨（男性・熟年）



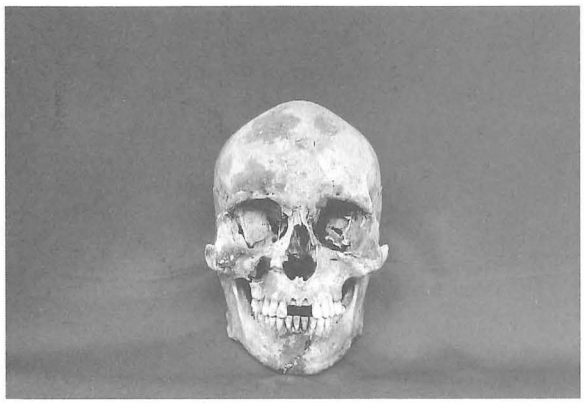
白浜６号人骨（男性・熟年）



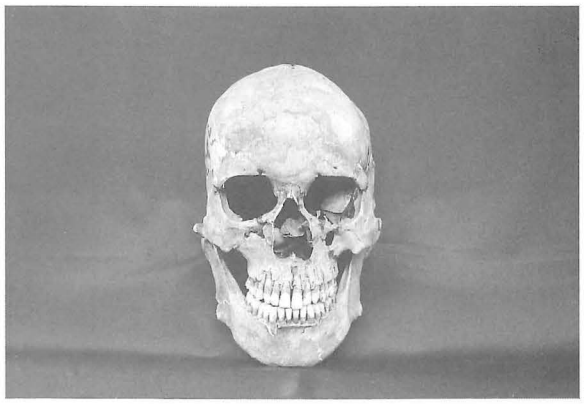
白浜10号人骨（男性・熟年）



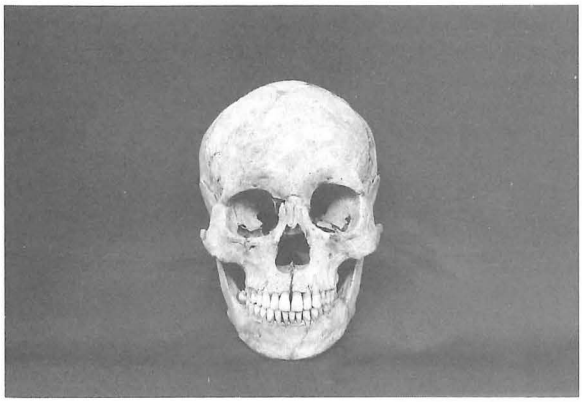
白浜15号人骨（男性・熟年）



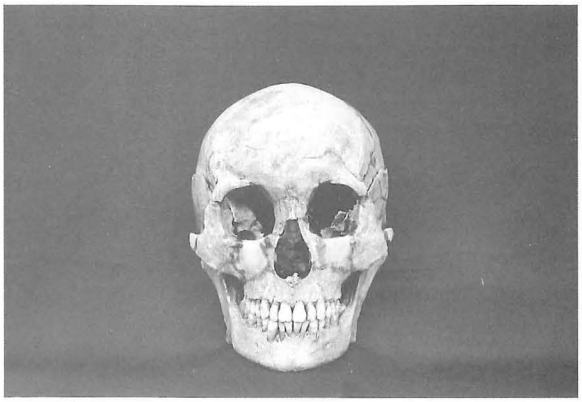
白浜17―１号人骨（男性・熟年）



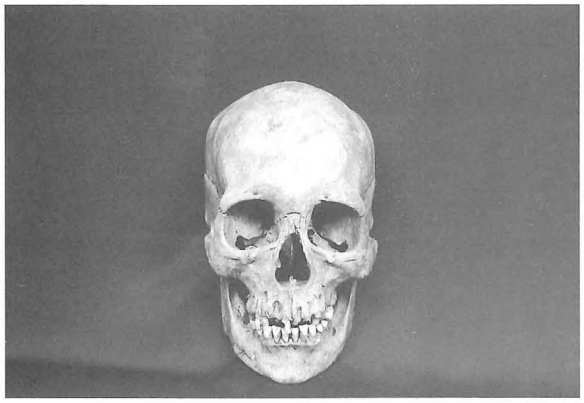
白浜20号人骨（男性・壮年）



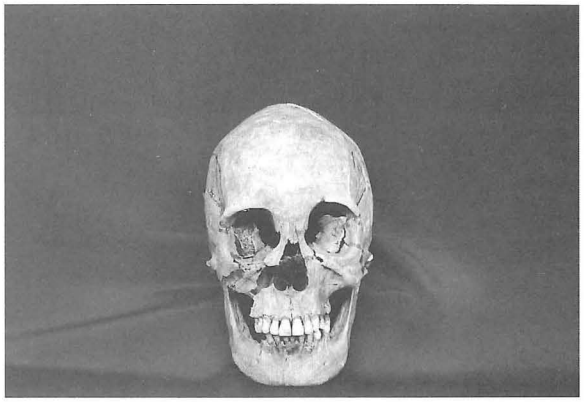
白浜23号人骨（男性・壮年）



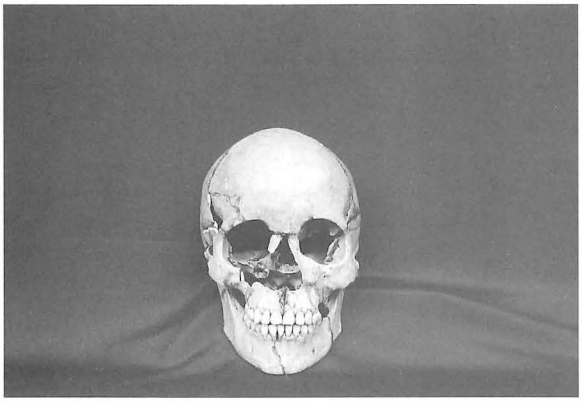
白浜31号人骨（男性・熟年）



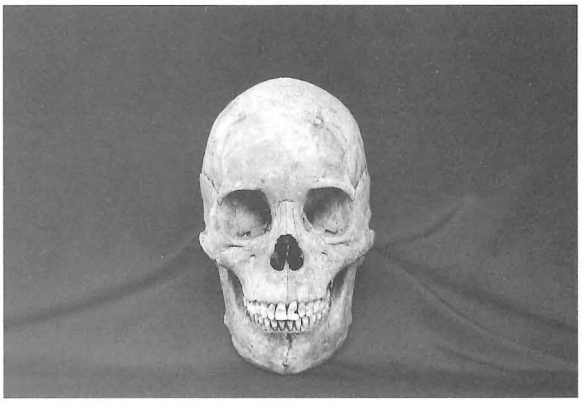
白浜 3 号人骨（女性・壮年）



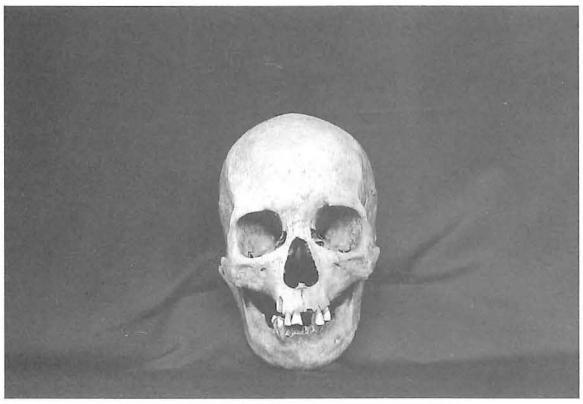
白浜 4 号人骨（女性・熟年）



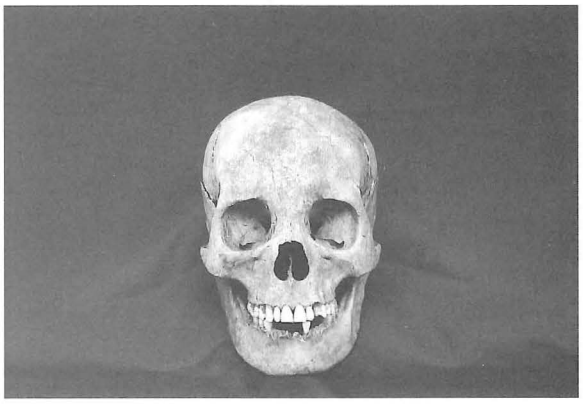
白浜 9 号人骨（女性・壮年）



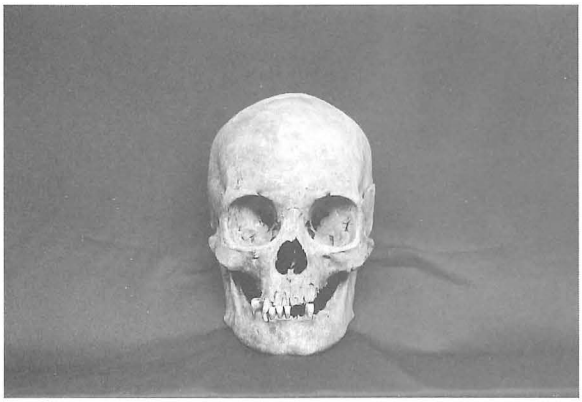
白浜11号人骨（女性・熟年）



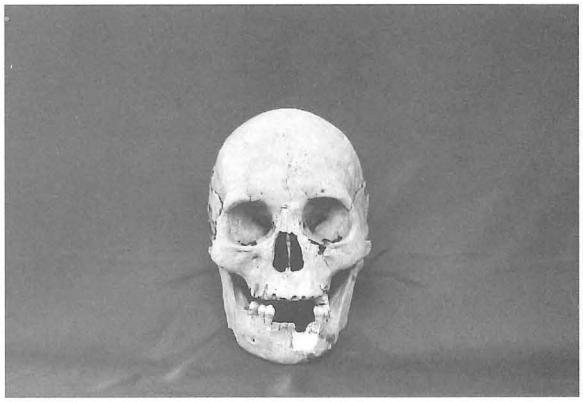
白浜12号人骨（女性・熟年）



白浜13号人骨（女性・壮年）



白浜14号人骨（女性・壮年）



白浜41号人骨（女性・老年）

報告書抄録

ふりがな	かしらがじましらはまいせき
書名	頭ヶ島白浜遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	有川町文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	古門雅高・渡邊康行・松下孝幸・荒木伸也
編集機関	長崎県南松浦郡有川町教育委員会
所在地	〒857-42　長崎県南松浦郡有川町有川郷733番地　TEL (0959) 42-1360
発行年月日	西暦1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かしらがじましらはまいせき 頭ヶ島白浜遺跡	ながさきけん 長崎県 みなみまつうらぐん 南松浦郡 ありかわちょう 有川町 ともすみごう 友住郷 あざしらはま 字白浜	42409	1	33° 0′ 38″	129° 11′ 05″	19950515 ｜ 19950616	400m²	町営アワビ養殖場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
頭ヶ島白浜遺跡	遺物包含地 近世墳墓	縄文 近世	近世墓	縄文土器 石器 朝鮮半島系土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 人骨	

頭ヶ島白浜遺跡

1996

発 行　長崎県有川町教育委員会
長崎県南松浦郡有川町有川郷733番地

印 刷　㈱昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007－2